

沖縄県、八重山地方における生態と世界観に関する
文化人類学的研究

(課題番号 14510335)

平成14年度～平成16年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書



平成17年3月

研究代表者 山田 孝子

(京都大学・大学院人間・環境学研究科・教授)

沖縄県、八重山地方における生態と世界観に関する

文化人類学的研究

(課題番号 14510335)

平成14年度～平成16年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告書

平成17年3月

研究代表者 山田 孝子

(京都大学・大学院人間・環境学研究科・教授)

はしがき

本報告は、平成14年度～平成16年度科学研究費補金（基盤研究（C）（2））による研究「沖縄県、八重山地方における生態と世界観に関する文化人類学的研究」（課題番号14510335）にかかわる研究成果報告書である。

本研究は、八重山地方の人々の世界観を認識人類学的視点から明らかにするとともに、日々の活動の実態という意味での生態と世界観との関係を解明し、さらにはアイヌ文化との比較を試みることを目的とするものである。集中的調査地として波照間島を選び、人々の生態と自然認識の実態とともに、とくに、島の重要な行事であるプーリン（豊年祭）を対象とし、ビデオ撮影などをもとに儀礼実践の実態を明らかにし、儀礼の場における世界観の伝承と表出、現代における儀礼の意義などについて分析を行った。また、波照間島および比較対照として鳩間島において、魚や植物などに関する伝統的知識について個別インタビュー調査を行い、自然認識の動態を分析した。

その結果、波照間島では、生活環境の整備などが進められる中で、生態と世界観との関係は変容しつつあり、生活の現代化のなかで、自然認識は変容し、たとえば、植物の方言名が失われつつあるという現状が明らかにされた。その一方で、伝統的世界観の維持が積極的に図られ、現実には神役のなり手がいないという問題を抱えながらも、年間で46回にもおよぶ神行事が実施されており、たとえば、島中あげて実施されるプーリンの行事では、一部では簡素化を図りながらも、神への拝みに関しては伝統を守るなど現代的調整が計られていることが明らかにされた。さらに、神行事の実施は、信仰上の問題であるばかりではなく、伝統文化の継承に寄与し、島民としてのアイデンティティとも深く関わることを明らかにした。

研究組織

研究代表者 山田 孝子（京都大学大学院人間・環境学研究科教授）
（研究協力者 高橋 そよ）

交付決定額（配分額）

（金額単位：千円）

	直接経費	間接経費	合計
平成14年度	500	0	500
平成15年度	800	0	800
平成16年度	700	0	700
総計	2,000	0	2,000

研究発表

(1) 学会誌等

山田 孝子 Anthropological Studies of the Ainu in Japan: Past and Present.
Japanese Review of Cultural Anthropology, 4: 75-106, 2003.

——— Nature as the Quintessence of Sakha Shamanism Revived. *Abstract Book of XV International Congress of Anthropological and Ethnological Sciences (ICAES), Florence, July 5-12, 2003*, vol. 2. Florence: University of Florence, p.1240, 2003 年 7 月 5-12 日。

——— 「アイヌの世界観と動物の世界—世界観を象徴する動物」 安田喜憲編『魔女の文明史』八坂書房、433-448 頁、2004 年 1 月 30 日。

——— 「ラダック地方における現代化とシャマニズム実践の意味」『北方学会報』10:45-52、2004 年 2 月 13 日。

——— Meaning of Modernization and Practice of Shamanism in Ladakh. *Northern Studies Association Bulletin*, 10: 4-9, 2004 年 2 月 13 日。

——— Symbiosis with Nature: A Message for the Reconstructing of Sakha Ethnicity and Identity. In: Irimoto, Takashi & Takako Yamada (eds.), *Circumpolar Ethnicity and Identity*, Senri Ethnological Studies no. 66, pp. 217-230, 2004 年 2 月 20 日。

——— Language and Rituals of the Ainu in Contemporary Japan. In: Pentikäinen, Juha & Péter Simoncsics (eds.), *Shamanhood: An Endangered Language*, Oslo: Instituttet for sammenlignende kulturforskning, 2005 (出版予定)。

——— Ainu. *The Greenwood Encyclopedia of World Folklore*. Westport: The Greenwood, 2005 (出版予定)。

高橋 そよ 「“ヤギの眠る海”で漁をする：沖縄・佐良浜漁民の漁撈活動と自然認識について」『生態人類学会ニュースレター』8 号、4-5 頁、2002 年 11 月 20 日。

——— 「沖縄・佐良浜における素潜り漁師の地形認識—漁場をめぐる「地図」を手が

かりとして」『生態人類学会ニュースレター』9号、20-22頁、2003年11月28日。

—— 「鶴見良行特集 いつか、チャハヤ号に乗って」『オルタ』8・9月号、38-39頁、アジア太平洋資料センター、2004年7月25日。

—— 「“楽園”の島シアミル」、藤林泰・宮内泰介編『カツオとかつお節の同時代史』コモンズ、180-196頁、2004年11月10日。

—— 「沖縄・佐良浜における素潜り漁師の漁場認識—漁場をめぐる「地図」を手がかりとして」『エコソフィア』14号、101-119頁、2004年11月30日。

(2) 口頭発表

山田 孝子 Nature as the Quintessence of Sakha Shamanism Revived. *Abstract Book of XV ICAES 2K3 "Humankind/Nature Interaction: Past, Present and Future," Florence July5-12, 2003*, vol. II, p. 1240, 2003年7月5-12日。

高橋 そよ 「沖縄・佐良浜における素潜り漁師の地形認識：漁場をめぐる「地図」を手がかりとして」第8回生態人類学会研究大会、神奈川県足柄上郡、2003年3月24日。

—— 「サンゴ礁資源をめぐる取引慣行とリスク回避：沖縄・佐良浜の事例から」第10回生態人類学会研究大会、北海道伊達市、2005年3月18日。

(3) 出版物

山田 孝子 (with T. Irimoto) (eds.) *Circumpolar Ethnicity and Identity*, Senri Ethnological Studies, no. 66, National Museum of Ethnology, 2004年2月20日。

目次

序	山田 孝子	1
Part I. 八重山における自然認識の動態		
植物の方言名にみる自然認識の変容—波照間島の事例から	山田 孝子	7
1980年代における波照間島民俗植物誌	山田 孝子	15
魚名の命名法とその特徴について—波照間島、鳩間島、佐良浜の事例から	高橋 そよ	57
鳩間島における魚名にみる自然認識の動態—1973年と2005年の事例から	山田 孝子	72
Part II. 波照間島における神信仰の動態		
豊年祭（プーリン）の実施にみる現代性—2003年の事例から	山田 孝子	87
アイヌの世界観と動物の世界—世界観を象徴する動物	山田 孝子	108
結びにかえて	山田 孝子	117
写真 1～写真 24		

序

山田 孝子

復帰後 30 年を経た八重山地方は、数次に及ぶ沖縄振興開発計画の実施などにより、本土なみの生活環境整備が進められ、離島での生活は飲料水の確保をはじめ、島嶼間交通の便、保健・医療の充実など改善されてきた。その一方で、八重山地方の離島では、若者は高校以上の高等教育を受けるためには石垣市に出なければならない上、経済的基盤が弱いいため高校を卒業した青年達を受け入れられないという問題を抱えてきたといえる。このため、離島では、とくに若年層の離島による過疎化とこれに伴う島における就業年齢の高齢化が進行するのが実情となっている。

このような現状の中で、八重山地方の自治体は平成 9 年 3 月には 5 年計画の「八重山地域島おこし計画」の策定を公表している（石垣市、竹富町、与那国町、沖縄県八重山支庁、1997）。この計画は基本的な考え方として、まず、それぞれの島のもつ豊かな自然や伝統文化など地域の特性を生かして島を発展させることをうたっている点が特徴的である。これはもちろん近年の「離島ブーム」にあやかろうという観光化を目論んでのことであるともいえる。しかし、声高に「伝統文化」に目が向けられることは、少し視点を変えてみると、過疎・高齢化の中で、特色ある島の伝統文化の維持と継承がどの離島にとっても深刻な問題であるという現状に対する危機感の表出であるということもできる。

たとえば、波照間島を例にとってみても、復帰後、島の生活は大きく変化したことが分かる。島の人口は表 1 が示すように、世帯数でみると減少というよりむしろ増加しているが、近年の人口は 1972 年当時の 53%～55%を示すに過ぎないというように過疎化が進行してきた。また、表 2 にまとめように、国勢調査に基づく年齢階級別の人口動態を見ると、15 才から 34 才の若年層が非常に少ないことが分かる。とくに、0 才から 14 才までの人口の減少は就学児童の減少を意味し、ますます高齢化が進行する現状を示すものといえる。

表 1. 波照間島における世帯数・人口変動

	1972	1998	1999	2000	2003
世帯数	226	235	238	241	259
人口	1,049	569	564	559	582

出典：山田（1984:49）；沖縄県八重山支庁（1998; 1999; 2000; 2003）

表 2. 波照間島における年齢階級別人口変動

	人口	0～14 才		15～19 才		20～34 才		35～64 才		65 才以上	
		人口	%	人口	%	人口	%	人口	%	人口	%
1 9 9 5	5 9 5	87	14.6	13	2.2	54	9.1	238	40.0	203	34.1
2 0 0 0	5 5 1	65	11.8	3	0.5	50	9.1	233	42.3	200	36.3

出典：沖縄県八重山支庁（2000; 2003）

島での生計基盤の変遷を見ると、1963 年の波照間島製糖工場の設立以降、天水田を利用した稲作、サツマイモ、大麦、小麦、アワ、モロコシなどの畑作を主体とした農業からサトウキビを中心とする農業への転換が行われた。一方、明治末期に鰹漁業の基礎が作られて以来、鰹節製造は大きな現金収入となっていたが、1970 年代には、八重山地方の他の離島と同様に鰹漁業が衰退している。2000 年には漁業従事者はわずか 3 人、人口の 0.9% を占めるに過ぎない。2003 年度の登録動力漁船数をみると、3 トン～5 トンの漁船数は 5 隻であるの対し、3 トン未満の漁船数は 42 隻であり（沖縄県八重山支庁、2004: 24, 62）、漁業は主に島内消費、もしくは自家消費を目的とするものとなっている。

波照間島は平坦な隆起珊瑚礁の島であるため、島の農業にとって、伝統的に水の確保は自然の降雨に頼ってきた。このため島の神行事は、作物の豊作や生育に対する祈願、天候を鎮める祈願、病虫害を追い払う祈願など、ほとんどが農耕儀礼といえるものであるが（アウエハント、2004: 366-367）、そのなかでも、雨乞いの行事は神行事のなかでもとくに重要な行事として実施されてきたのである。

波照間島では、現在、圃場および農道の整備が島内全域で完了し、整備された圃場への給水のための貯水池と畑地灌漑施設の整備が進められており、サトウキビ栽培は農地の集約的高度利用を目指すものへと発展している。圃場整備事業は島の景観を大きく変えるものでもある。自然植生は御嶽や海岸線を中心として残るのみとなるばかりではなく、71 頁の図 1 が示すように、島の道路は基盤の目のように張り巡らされ、かつてツカサ達が御嶽から御嶽への巡行の道としたカンミチイ（神の道）は寸断されることとなっている。

本研究は、1）八重山地方の人々の世界観を、とくに波照間島を対象にして、植物、動物（陸上・海棲）、地形、季節などの自然を始めとし多様な精霊や神々といった超自然的存在を含む総合的認識の体系と捉え、認識人類学的視点から明らかにするとともに、2）島の生活のこのような現代化という生態の変容の中での伝統的世界観の動態を解明することを目的とするものである。さらには、3）八重山文化とアイヌ文化を生態と世界観との関係という枠組みのなかでひろく比較検討するとともに、伝統文化と現代化の関係について考察することを目指すものである。

本研究報告は2部構成となっており、第1部では八重山における自然認識の動態を、波照間島、鳩間島の事例にもとづき取り上げる。第2部ではとくに波照間島の事例を対象として神信仰の動態を取り上げるとともに、比較としてアイヌの世界観についても取り上げる。結びとして、神の観念という点からアイヌの世界観との対比の上で、八重山の生態と世界観の特徴について考察する。

引用文献

石垣市、竹富町、与那国町、沖縄県八重山支庁 1997 『八重山地域島おこし計画—島々ぬ美しゃ 人ぬ美しゃ 八重山起くし—』冊子。

沖縄県八重山支庁 1998 『八重山要覧 平成10年度版 (37)』石垣市、沖縄県八重山支庁。

——— 1999 『八重山要覧 平成11年度版 (38)』石垣市、沖縄県八重山支庁。

——— 2000 『八重山要覧 平成12年度版 (39)』石垣市、沖縄県八重山支庁。

——— 2003 『八重山要覧 平成15年度版 (42)』石垣市、沖縄県八重山支庁。

山田孝子 1984 「沖縄県、八重山地方における植物の命名、分類、利用—比較民族植物学的考察」『リトルワールド研究報告』7号、25-235頁。

Part I. 八重山における自然認識の動態

植物の方言名にみる自然認識の変容 —波照間島の事例から—

山田 孝子

1. はじめに

八重山地方をはじめて訪れたのは、ちょうど本土復帰を果たした1972年のことであるが、1970年代前半の八重山地方は、本土復帰を果たしたとはいえ、まだまだ島の生活の随所に、「八重山文化」の香りが漂い、島ごとの独自性も強く保たれていた。1975年頃まで鳩間島、西表島西部にはなんだか通ったのであるが、波照間島をはじめて訪れたのは1980年のことである。1972年の本土復帰により、沖縄県の一部となり、波照間島の物質的状況は一変し、真新しいコンクリートの家や墓が建てられるようになったといわれる（アウエハント、2004:2-3）。しかし、当時、まだまだ波照間島の生活の随所に、「八重山文化」の香りが漂い、島の独自性も強く保たれていた。実際、このとき波照間島で行った民族植物学的調査は、島の植物の多くが島ことばで名づけられ、生活の中で利用されること、人々が植物についての豊富な民俗知識をもつことをはっきりと示している（山田、1984）。たとえば、波照間島では野生種に限っても採集できた224種のうち195種が名づけられ、158種は何らかの意味で意味づけ、利用されているものであった（山田、1984: 80-81）。

2002年に20数年ぶりに訪れた八重山は、表層的には内地化が進み、かつての八重山らしさはその陰にかすんでしまうほどであった。かつて、石垣から船で3時間ほどかかっていた波照間島まで、高速船が通い約1時間の船旅となっている。島では土地改良、圃場整備などによるサトウキビ栽培の効率化、海水の淡水化による飲料水の確保、舗装道路をはじめとする生活環境の整備がすすみ、車は島の生活に無くてはならない交通手段となっていた。島の生活の中で自然が遠くなっていくようにさえ感じられるのである。このような現代化の過程で、伝統的な民俗知識、とくに自然に関する知識はどのように変容するのだろうか。八重山地方の中で、とくに波照間島を対象にして、植物についての方言名をもとに、自然認識の変容について考えてみることにしたい。

2. 調査方法

2005年1月14日から1月22日にかけての八重山地方の調査時に、波照間島において以下の方法でインタビュー調査を行い、収集したものである。実地調査に先立ち、サンプルとする植物の写真を次のように作成した。1980年の波照間島の調査では、野生種、栽培種合わせて314種の植物を採集し、このうち273種類の植物は波照間島方言で名づけられていた。『琉球弧 野山の花』（片野田、1999）に写真が掲載されている植物の中から、波照

間島で採集できたもの 113 種類を中心に、合計 114 種類を選びだし、それらの植物写真を拡大したもの作成し、これらを個別インタビューにおけるサンプル写真とした。インタビュー調査にあたっては、標準和名のアイウエオ順に、一つずつ写真を示しながら、方言名など知っていることを聞き取るという形で進めた。

調査期間が限られていたため、波照間島では 40 才から 82 才にかけての 4 名（男性 2 名、女性 2 名）を対象としたインタビューを実施することができたのみである。

3. 1980 年代初頭における植物の認識

野生植物についてみると、224 種のうち 195 種が波照間島方言で名づけられた、いわゆる個別名をもつ植物であった（山田、1984: 59）。当時の植物の命名法を見ると、植物の形態、臭気、色、生育場所、有用性、渡来植物であるかどうかなど、多様な植物の属性に関心が払われていた。しかも、これら植物の属性を形容する語彙は、人名、地名などの固有名詞から、動物名、ものの名などの普通名詞、動詞や形容詞が組合わさった形容句など、多岐にわたっていた。波照間島における植物の命名法は西表島、鳩間島など他の八重山地方の島々と共通する点が多かった一方で、波照間島では新しく渡来した植物に名前を付ける点が特徴的であった。たとえば、アレチノギクは「フナシキヌブヤフサ」（フナシキ爺さんの草）、ムラサキムカシヨモギは「ハシケヌブヤフサ」（ハシケ爺さんの草）、ハイニシキソウは「イナフクヌブヤフサ」（イナフク爺さんの草）、クリノイガは「マシーブヤフサ」（マシー爺さんの草）と、これらの草が最初に発見された土地の所有者の名前をもとに名づけられていた（山田、1984: 61-62）。

一方、植物の分類法を見ると、植物はキ（木）、フサ（草）、カズラー（蔓）、バラピ（シダ）、タキ（竹）の 5 つのカテゴリーに類別されていた。しかし、「雑草類はフサ（草）であり、バラピ（シダ類）でも畑の雑草となるものはフサである」ともいわれた。実際、蔓性草本類のうちリュウキュウボタンズル 1 種のみは畑の雑草とされ、「ミパグサ」と呼ばれ、カズラー（蔓）ではなくフサに類別されていた。植物の分類にあたり、雑草であるという負の利用価値が植物の生活型に優先して考慮されているという傾向が認められた（山田、1984: 72）。

224 種のうち、生活上の利用価値という点でプラスの評価が与えられているものは 158 種、70.5% を占める一方、畑の雑草などマイナスの評価が与えられるものは、12 種、5.3 % を占めていた。植物は様々な形で生活の中で活用されてきたとともに、植物の中で畑の雑草となるものにはとくに注意が払われて来たことが分かる。とくに、食料、飼料、薬、儀礼、家庭用具、道具、燃料などに利用される植物の数が多いが、たとえば、食物としては 42 種、飼料用となるものが 43 種、薬として利用されるものが 52 種、神行事の際には必ず必要となる植物をみても 27 種、俗信の対象となるものも 11 種に及んでいた（山田、1984: 86）。

御嶽、拝所を中心にしたカミ信仰は生きていたが、とくに波照間島では数多くの年中行

事が実施されており、植物は行事の象徴ともなっていた。一番座（ブザシケ）の床の間には、種取り行事ではススキ、旧正月にはクサスギカズラとテッポウユリを生花として飾る。花穂の豊かなススキは豊穰を象徴し、球根から新芽を出すクサスギカズラやテッポウユリは「あらためる」というメタファーとなる。アダンやオオタニワタリの新芽、ボタンボウフウは行事の料理に欠かすことのできない材料となる。司は行事のときに、オオムラサキシキブで作った杖をかならず用い、「カンヌフニアギ」の日に杖を取り替えるのであるという。シマフサラーの行事では、家畜の血をぬったワラ縄を集落の入り口や主要道路の辻に張り、アミニゲの行事では、パナヌファがブナバリ井戸へ水祭りに出かけ、「ヤマクル」（サツマサンキライ、オキナワサルトリイバラなど）の蔓を冠にして帰り、御嶽に祀る。戦前までは、ヒョウタンで作った面を被り、エビズルを全身にまとい、コミノクロツグの葉軸を杖にしたブサマラが出現したという。

また、葬列が家の前を通るときには、芝あるいはワラを結んだサンを門口に掛けるという、夫婦の一方が死ぬと、死者の霊と別れられるように、オキナワクルマバナを枕元において眠るという。天候を占うこともあり、ハイキビの葉に生じた節の数で、その年に来島する台風の回数を占ったという。また、マルバチシャノキの実が熟する頃には台風が襲来し、グンバイヒルガオが波打ち際まで拡がって生えるころには必ず大きな波がやって来るといい、気圧が下がったときにはゲッキツの花が咲くという。

島に生育する植物は、名づけられるだけではなく、実用的な価値からあるいは象徴的、隠喩的な意味を付加され、日々の生活の中で活用されてきたのである。次章に、当時の植物に関する民俗知識を、民俗植物誌としてまとめているが、1980年代当時、このような植物の知識はまだ、生き生きとした知識として島の人々に継承されていたのである。

4. 植物の方言名の変容

1980年の調査では採集した植物を前にして聞き取り調査をしたのに対し、今回では実物ではなく、写真を前にしての聞き取り調査であった。このため、植物を判別しにくいという制約の上で、個別名の確認を行ったものといえ、実物を見ればもう少し、判別度が上がった可能性も考えられるが、4人のインフォーマントが名前を上げた植物の種数は表1のようになった。表2にはインフォーマントそれぞれがあげた植物名を一覧表にして示した。

表1. 個別名が確認できた植物の種数

インフォーマント	1980年当時	M40	M82	F70	F73
個別名を確認できた植物の種数	101	65	76	59	50
1980年当時を100としたときの%	100	64	75	58	50

注：M40とは、インフォーマントが40才の男性であることを表す。

1980 年の調査時の主なインフォーマントは現在では 80 才代後半となる方々であり、M82 のインフォーマントが植物の名前を一番多く知っているという結果は妥当なものといえる。F70、F73 の 70 才代のインフォーマントでは、インタビューの時に、植物の方言名がなかなか思い出されなかったり、忘れてしまったりということがたびたびあった。表 1 の数字はかつて覚えていたものが忘れられていく状況を数値の上で示すものといえる。

M40 は植物の知識が豊富であることで知られている人であり、若い世代でありながら、インタビューでは 1980 年当時の植物の知識を 100%としたときに、64%については良く知っているという結果を示した。ただし、個別名を確認できた 65 種類のうち、16 種類については、たとえば、ウヤンチュ・ヌ・プルスン（「ネズミの巣」の意）と呼ばれたイワダレソウを「ネズミノテッポウ」と呼び、マザムン・ヌ・ウルン（「ばけもののウリ」の意）と呼ばれたオキナワウズメウリを「ヘビノイチゴ」と呼び、オニタビラコやカタバミをそのままの和名で識別するなどの例がある。また、シマオオタリワタリのようにスクガラという名をあげる一方、オオタニワタリと呼ぶ場合が多いというものもある。方言名だけに限ると、48%を占めるに過ぎなく、学校教育をとおして標準和名を学び、その名前が定着していくという命名化の変容の一端をみることができる。

植物の方言名が忘れられていくというプロセスが認められる一方、3 人以上のインフォーマントが 1980 年に採集したものと同名前をあげた植物が 45 例あり、このうち 29 例は 4 人が同じ名称をあげたものであった。これらはごく一般的な植物といえるが、実際、4 人が同じ名前前で答えた植物のなかには、ヤラブ、リュウキュウコクタン、リュウキュウバショウ、リュウキュウマツ、コミノクロツグ、ソテツ、チガヤなど、八重山地方一般で名前が共通する植物が 21 例と多数を占めた。7 例は波照間島固有の名前で呼ばれていた。3 人が同じ名前をあげた 16 例の植物の中で 2 例は波照間島固有の名前で呼ばれていた。

島の人々に一般的に良く知られている植物の中に、波照間島固有の名前がつけられているものがあることが分かるが、これらの 9 例の植物には、次のようなものがある。たとえば、「ジームイ」と呼ばれるクサスギカズラは、「ヨイサーパナ」と呼ばれるテッポウユリとともに旧正月の生花として欠かすことのできないものである。「オーザキ」と呼ばれるクサトベラの枝の髄では、盆祭（ソーリン）の踊りのときに身につける頭飾りを作るという。

「クツガラー」とよばれるシマオオタニワタリの新芽は祝い事の料理の材料となる。「ミナスク」と呼ばれるカタバミは血止めの薬となり、「カンタビー」と呼ばれるオオイタビの果実は食用になるとともに、高血圧の薬となるものである。傷薬となるセイロンベンケイは、「トーキシ」として知られ、漿液でかぶれるクワズイモは「ビリカナパー」と呼ばれる。行事に欠かすことのできない植物、薬となる植物などには、波照間島方言での名前が生き残っていることがわかる。また、畑の雑草として知られるハイニシキソウは「イナフクヌブヤフサ」として良く知られる。波照間島の命名法において、畑の雑草の命名がよくみら

れることが特徴的であったが、このような雑草については現在でも方言名がよく残っている。農業がサトウキビ栽培に変わるというように、農作物の種類は変化するが、農業が重要な生計基盤であることには変わりなく、畑の雑草に関する関心の高さは引き継がれていることが分かる。

4. おわりに

圃場整備、道路の整備と舗装化などにより、明らかに自然植生が変化しているが、御嶽の周辺などには自然植生がまだ残されている。島の人々には自然植生の残った地域の、どの場所には何が生えているのかという知識が残されている。インタビューのとき、一人の男性は、重要な植物をこのような場所を廻って採集してきてくれたのである。

波照間島では、後の章で述べるように御嶽を中心とする神行事は今も信仰の要として生き続けている。儀礼の時に欠かせない植物の知識はこのような信仰を背景に引き継がれている。また、御嶽の神聖性は、変化する島の景観の中で自然植生を残すことにつながっている。ここで取り上げた植物の方言名の事例は、生活の変化が伝統的知識の体系を変容させることは止められない一面を示すとともに、信仰を軸に伝統的知識が継承されていくという事実を示している。

引用文献

アウエハント、コルネリウス 2004[1985] 『Hateruma : 波照間—南琉球の島嶼文化における社会=宗教的諸相』中鉢良護訳・解説、宜野湾：榕樹書林 [C. Ouwehand, 1985, *Hateruma: Socio-religious aspects of a South-Ryukyuan island culture*. Leiden: E.J. Brill].

片野田逸朗 1999 『琉球弧 野山の花』鹿児島：南方新社。

山田孝子 1984 「沖縄県、八重山地方における植物の命名、分類、利用—比較民族植物学的考察」『リトルワールド研究報告』7: 25-235。

表2 植物方言名に関するインタビュー結果

標準和名	波照間方言名(1980)	M40	M82	F70	F73
アカテツ	トウヌン	ジンキ			
アキノゲシ	トウーナ	トウナンバ	トウナ	トウナ	トウナ
アコウ	アゴン	アコウキ	アゴン	アコウギ	アゴン
アダン	アダニ、アランダニ	アンダリ、アランダニ	アランダニ	アランダニ	アランダニ
イヌビワ	カペー	ンタビ			
イノコズチ	サカジシャ	イノコズチ	サカジシャ	イノコズチ	
イソマツ	ガラスノパン	ガラスノパン	ガラスノパン		ガラスノパン
イヌマキ	キャンギ	キャンギ	キャンギ	キャンギ	
イボタクサギ	フッサレサブー				
イワダレソウ	ウヤンチュヌブルスン	ネズミノテツボウ			
ウシノタケダグサ	ナンヨーバンダマ				
ウスベニニガナ	フクナー				フクナー
エダウチチヂミザサ	タキサー				
エノコログサ	ゴーナ		ゴーナ		ゴーナ
エビズル	カニヤブ	カニブ	カニヤブ	カニヤブ	ノブドウ
オオイタビ	カンタビー	ンタビ	ンタビ		カンタビ
オオシマコバンノキ	スタギ		シタキ		
オオバギ	アガトウペー、マテカナペー	マタカナンバ、カナンバ	アガトウピョ		マテカナバ
オオハマボウ	ユダ	ユーダ			ユダ
オオムラサキシキブ	パネー、パンダヌグサン	グサンヌキ			パンダヌグサン
オオヤブツルアズキ	ガヤブラーマミ				
オキナワスズメウリ	マザムンヌルン	ヘビノイチゴ	パクヌイ		ノウリ、パクヌナリ
オニタビラコ	パビルブサ	オニタビラコ	タビラグ		タンボボ
カキバカンコノキ	(一)				
カジュマル	ガザバニ	ガザバリ	ガザマニ	ガザマニ	ガザマニ
カタバミ	ミナスク	カタバミ	ミナスキ	ミナシキ	ミナスキ
カラスギバサンキラ	サンキラ	ヤマクル	サンキラ		ヤマクル
カラムシ	バーゴー	バーゴー	バーゴー		バーゴー
カンコノキ	(一)				
ギンギシ	ジュールマギ、スクブ	ギンギシ	スクブサ	スブグサー	ジュールマギ
キダチキンバイ	(一)				
ギョボク	(一)				
キンゴジカ	(一)	アシャボノクサ			
ギンチョウ	(一)				ブサ
ギンネム	ギンネム	マーミキ	ギンネム、マミキ	マーミキ	マミキ
クサスギカズラ	ジームイ	ジムイン	ジムイ	ジームイ	ジムイ
クサトベラ	オーザキ	オーザキ	オーザキ		オーザキ
クロイワザサ	タキサー				
コミノクロツグ	マーニ	マーニ	マーニ	マーニ	マーニ
クロヨナ	ブガマー	ブガマ			
クワズイモ	ビリカナパー	ピラカマ	ビリカナパー	ビルカナパー	ビリカナパー
クワノハエノキ	ジンギ、ズンギ				
グンバイヒルガオ	パマズラー	パマカツツア	パマサリヤー	パマサリ	パマザラー
ゲッキツ	ジギチ	ジギチ	ジギチ	ジギチ	
ゲットウ	サーニ	サニン	サーニ	サーニ	サーニ
コミカンソウ	(一)		ヤナギグサ		
サクララン	モルクパナ		カツアカツアシ	カサカサラー	カサカサノパナ
サツマサンキラ	ヤマクル	アマクル	ヤマクル	ヤマクル	ヤマクル
シマオオタニワタリ	クツガラ	スクガラ、オオタニワタリ	クツガラ	クツガラ	クツガラ

標準和名	波照間方言名(1980)	M40	M82	F70	F73
シマツユクサ	シコサ	ツユクサ	シコサ		ツユクサ
ジュズダマ	シィシィータマン	シィシィータマン	シィシィータマン	シィシィタマン	シィシィタマン
シマエンジュ	(-)				
シマグワ	コンギ、ナンズー	ナンジ	コンギ	ナンズイ	ナンズイ
シャリンバイ	シコチ		シコチ	シコチ	
ススキ	ユスキ	ユスキ	ユシキ	ユスキ	ユースキ
スナズル	アガカズラー		ネナシカズラ、アガ カズラー	ネナシカズラー	
スベリビユ	ミーナン	スベリビユ	ミーナン	ミナン	ミナン
セイロンベンケイ	トーキシ	トキシ	トキシ	トーキシ	
ソウシジュ	ソーセージ		タイワンヤナギ	ヤナギ	
ソテツ	シュトゥチー	スイトゥッチ	ストウッチ	ストウッチ	ストウチ
ソナレムグラ	(-)				
タイワンクズ	アールンブヤヌタナン		トーズィ	トーズ	
タカサブロウ	セエー		スセエー		
タブノキ	タブー		タブ	タブ	タブ
タンキリマメ	モールダマン	マーミ	タフケンブヤヌビ ティソルマミ		
チガヤ	ガヤ	ガヤ	ガヤ	ガヤ	ガヤ
ツルソバ	スンメー		スンメー	スンメー	
ツルマオ	(-)		イシグブン		
ツルモウリンカ	マザムンヌヨールスタミ				
デイゴ	ブーズ	ブーズ	ブズィ	ブズー	デイゴ
テッポウユリ	ヨイサーパナ	ユリ	ヨイサーパナ	ヨイサーパナ	ヨンサーパナ
テリハボク	ヤラブ	ヤラブ	ヤラブ	ヤラブ	ヤラブ
トベラ	トゥベラギ		トゥピラギ	トゥペラー	トゥベラ
ナワシロイチゴ	テーシー	イチゴ	テーシ	テーシ	イチゴ
ノゲン	フクナー	スクナン	フクナン	フクナン	フクナー
ハイニシキシウ	イナフクヌブヤフサ	イナフケンブヤフサ	イナフクヌグヤフサ		イマフクヌブヤフサ
ハスノハカズラ			オーカツラ		
ハスノハギリ	サコダチ		サコダチ		マテカナパー
ハゼノキ	バンジ	ウルシノキ、ハチマキ			
パパイヤ	マンジュウ	マンジョ	マンジョ	マンジョ	マンジョウ
ハマイヌビウ	アリドー		アリドー		
ハマオモト	ヤタカビ、サジフカー			ヤタカビ	ヤタカビ
ハマゴウ	ベッサレサプー				
ハマナタマメ	ガヤブラーマミ	パマカズラ			
ハマボツス	ブーミナン				
ハリツルマサキ	イシヌヤマタカニ	マッコオ	イシマタカニ		
ハリビユ	アカビナン				
ヒカンザクラ	サクラ	サクラ	サクラ	サクラ	サクラ
ヒマ	シコーサ	トウゴマ			ヒマシユ
ヒメクマヤナギ	ガラシヌイ		ガラシヌイ		
ヒラミレモン	クンガニフナブ	クニブ	フナブ	フナブ	シークワサー
ヒルザキツキシソウ	(-)				
ビロウ	クパ	クパ	クパ	クパ	クパ
フクギ	フクン	フコン	フコン	フクン	フコン
フクマンギ	パチーシー	ハテルマリンゴ	パチーシィ		
ヘクソカズラ	フッサレカズラー、オーカ ズラー	カツァ	ピンフサリイカズ ラー		カズラー
ヘゴ	(-)				
ホウビカンジュ	ケーバラビ				
ホシダ	ケーバラビ				

標準和名	波照間方言名(1980)	M40	M82	F70	F73
ホソバワダン	ンガナ	ンガナ			
ミズガンピ	スツバヌコツ	ハマシタン	スイパリコツ	スパンコチ	スパンコチ
ミツバハマゴウ	サブー		ツサブー		スツサブー
ミフクラギ					
ミヤコグサ					
ムラサキムカシヨモギ	ハシケヌブヤフサ				
モクビャッコウ	イワギク	イワギク			
モンパノキ	サツザキ	スサツザキ	スサツザキ	スサツザキ	スサツザキ
リュウキュウコクタン	キナ	キナ	キナン	キナ	キナ
ヤブラン	ピローサ		ゴカビラ		
ヤマヒハツ	ヤスパス		ヤスパツ		
リュウキュウマノスズクサモツコー			ムツコー		
リュウキュウトロロアオイ	ナンチャビョー		ナンチャビョー	ナンチャビョー	
リュウキュウバショウ	マーバーサー	バーサ	バサ	バーサ	マーバーサー
リュウキュウマツ	マーマツ	マツ	マツイ	マツイ	マチイ

(注)表中に(ー)とあるのは、採集した植物の方言名が聞き取れなかったものである。

1980年代における波照間島民俗植物誌

山田 孝子

ここに取り上げた植物は、山田（1984）から抜粋したものである。各植物についての記述は、標準和名、学名、科名、波照間島方言名、民族植物学的情報の順となっている。方言名が得られなかったものについては（－）と記す。植物は便宜上、標準和名のアイウエオ順とした。

アイダクグ *Cyperus brevifolius* Hassk.

Cyperaceae カヤツリグサ科

ウシヌフサ

コブスの一種である。方名は「牛の草」の意。

アオガンピ *Wikstroemia retusa* A. Gray

Thymelaeaceae ジンチョウゲ科

フーガージ

紙の原料になる樹皮を採集して売却していた。また、枯れ木を薪にする。

アオツヅラフジ *Cocculus orbiculatus* DC.

Menispermaceae ツヅラフジ科

（－）

アオビユ *Amaranthus gracilis* Desf.

Amaranthaceae ヒユ科

ピナン

葉を食用にする。

アカギモドキ *Allophylus timorensis* Bl.

Sapindaceae ムクロジ科

アトラー

薪によく用いる。

アカテツ *Planchonella obovata* (R. Br.) Pierre

Sapotaceae アカテツ科

トゥヌン

薪には非常によいが建材にはならない。若葉を牛がよく食べる。

アカメガシワ *Mallotus japonicus* Muell.-Arg.

Euphorbiaceae トウダイグサ科

(一)

山羊や牛の餌。終戦直後には、葉をタバコの代用にした。材は薪にしかない。

アキノノゲシ *Lactuca indica* L.

Compositae キク科

トゥーナ

葉を食用にする。汁が服につくと色が落ちない。

アキメヒシバ *Digitaria violascens* Link.

Graminae イネ科

メーナン

メヒシバと同方名。[枯れる寸前の草の葉は鋭く、手を切りやすいので除草には十分注意する必要がある。]

アキランサス *Alteranthera amoena* Voss.

Amaranthaceae ヒユ科

(一)

いずれの島でも屋敷の周囲の石垣の傍らに植えてある。

アコウ *Ficus superba* Miq. var. *japonica* Miq.

Moraceae クワ科

アゴン

大木は日陰をつくり、休息の場となる。

アズキ *Phaseolus angularis* W. F. Wight

Leguminosae マメ科

アマミ

食用。畑で栽培。1~3月に播種し、5~8月に収穫する。

アダン *Pandanus odoratissimus* L.

Pandanaceae タコノキ科

アダニ、アンダニ

若葉を食用にし、焼香のときの料理に用いる。葉で蓆をつくる。むかし、葉で乾燥させ、パナマ帽の材料として出荷していた。気根でつくった縄は、牛の縄、イカリ縄にしたり、網籠をつくるのに用いる。材は掘って小屋の柱にする。

アマクサギ *Clerodendron trichotomum* Thunb. var. *fargesii* Rehd.

Verbenaceae クマツヅラ科

ウギチ

大木の枯れたものを、火起こし棒（ピッキ）に用いた。牛はよく食べる。

アリドウシ *Damnacanthus indicus* Gaertn.

Rubiaceae アカネ科

ヤマトウジー

3〜4月の若葉の出る頃には、山羊や牛はこれをよく食べる。ジーというのは、棘の意。

アレチノギク *Erigeron bonariensis* L.

Compositae キク科

フナシキヌブヤフサ

フナシキヌブヤ（ふなしき爺さん）の畑から広がったので、こう呼ばれている。種子が風で遠くに飛んでいき、繁殖する。人の背の高さほどに成長し、根が深いので除草には力の要る草である。

アロエの類 *Aloe* sp.

Liliaceae ユリ科

アロエ

胃腸薬。

アワ *Setaria italica* Beauv.

Graminae イネ科

アン

ムツァン（餅粟）とサカアン（粳粟）と2種類作っている。お神酒をつくる。

イソフジ *Sophora tomentosa* L.

Leguminosae マメ科

マーミキ

海岸によく生えている木である。マメの仲間だから緑肥によいであろう。「豆の木」の意。

イソマツ *Limonium wrightii* O. K. var. *arbusculum* Hatusima

Plumbaginaceae イソマツ科

ガラシイヌパン

神経痛、梅毒、万病の薬といわれる。「カラスの足」の意。

イヌホウズキ *Solanum nigrum* L.

Solanaceae ナス科

カラボージキ

イヌマキ *Podocarpus macrophylla* D. Don.

Podocarpaceae イヌマキ科

キャンギ

虫がつかない最高の材木である。柱材にすることが多い。自分のヤマ（林）に植林している人が多い。果実は食用になる。

イボタクサギ *Clerodendron inerme* Gaertn.

Verbenaceae クマツヅラ科

フッサレサブー

よく燃えるので薪にする。サブーの仲間で、臭気があるので「臭いサブー」という意味の名となる。

イリオモテアザミ *Cirsium brevicaule* A. Gray var. *irumtiense* Kitamura

Compositae キク科

アザン

根茎を6~7月ごろ採集して食用にする。香りがある。女性の腎臓に薬といい、根茎を煎服する。

イリオモテシャミセンズル *Lygodium microphyllum* (Cavan.) R.Br.

Schizaeaceae, カニクサ科

ジーマサシ

カズラーである。太い蔓では水切り籠、箒などを作る。蚕の簇に用いた。

イワダレソウ *Phyla modiflora* Greene

Verbenaceae クマツヅラ科

ウヤンチュヌプルスン

この草の生えているところにネズミが巣を造るので、「ネズミの巣」という意味の名をもつ。

ウイキョウ *Foeniculum vulgare* Mill.

Umbelliferae セリ科

ウツキョウ

ウコン *Curcuma longa* L.

Zingiberaceae ショウガ科

ウィッキン

黄色の色粉にする。33年忌、墓づくり、家造りなどの祝いには、黄色に色付けした餅や菓子をつくる。根は牛の肝と一緒にして煎じると肝臓の薬になる。

ウシノタケダグサ *Erechtites hieracifolia* Rafin. var. *cacalioides* Grieseb.

Compositae キク科

ナンヨーパンダマ

南洋の人たちが食べる。島に持ち込まれてからあまり経っていない。パンダマの一種。

ウスベニニガナ *Emilia sonchifolia* DC.

Compositae キク科

フクナー

葉は柔らかく、野菜代用にする。花は風で遠くまで飛ぶ。

エダウチチヂミザサ *Oplismenus compositus* Beauv.

Graminae イネ科

タキサー

牛や山羊の餌。

エノコログサ *Setaria viridis* Beauv.

Graminae イネ科

ゴーナ

実が熟すと服につく。

エビスグサ *Cassia obtusifolia* L.

Leguminosae マメ科

アーミチャ、ハブチャ

種子をお茶にして利用する。薬でもある。

エビズル *Vitis ficifolia* Bunge

Vitaceae ブドウ科

カニャブ

果実は食用にし、盆祭のときになムリムヌにして供える。目の病気のとき、太い蔓の節と節の間を切って水につけておき、この一方の口から吹いて出てきた汁を目にさすとなおる。

オイジワ *Eleusine indica* Gaertn.

Graminae イネ科

イバ

薬草。葉の根元の柔らかい部分で目に入ったごみを取り出すのに用いる。2本の果軸それぞれの先端を残して果穂をしごき取り、2本の軸の間に髪を渡してトンボ取り器にして、子供達がトンボをとった。根生葉が密生しているので、この葉の先端をまとめて縛るとちょうどよい虫かごになった。

オオイタビ *Ficus pumila* L.

Moraceae クワ科

カンタビー

果実は食用になると同時に婦人病や高血圧の薬となる。

オオゴチョウ *Caesalpinia pulcherrina* Sw.

Leguminosae マメ科

(一)

花卉として庭に植える。

オオシマコバンノキ *Breynia officinalis* Hemsl.

Euphorbiaceae トウダイグサ科

スタギ

薪。胃腸薬。夕方になると酸っぱい臭いを出す。

オオセイバンモロコシ *Sorghum propinquum* Hitch.

Graminae イネ科

(一)

ニホンカボチャの畑に、北風除けとして栽培。牛の飼料。最近渡来したもの。

オオバイヌビワ *Ficus septica* Burm. f.

Moraceae クワ科

カペー

樹液は皮膚につくとただれやすいが、タムシのところに塗ると効く。板材にはするが柱材にはしない。火縄（ツムトゥ）の材料となる。これは、よく乾かした材をワラでつつみ固く紐で縛ったもので、畑などに火種として持参するのに用いた。

オオバギ *Macaranga tanarius* Muell.-Arg.

Euphorbiaceae トウダイグサ科

アガトゥペー、マテカナペー

枝を切るとでてくる赤い汁は、着物などにつくと色が落ちない。大木でも割れやすく薪によい。建材にはできない。葉は山羊や牛の好物である。昔の人は、葉で食べ物を包んだ。小魚は、葉に包んで焼くとうまく煮えた。

オオバコ *Plantago asiatica* L.

Plantaginaceae オオバコ科

メーブサ

足を捻挫したとき、これを焙り患部にあたためるとよい。ジュズダマ、ナワシロイチゴと一緒に煎服し、解熱剤にする。ギシギシと一緒に煎服し、喘息の薬とする。

オオバナアリアケカズラ *Allamanda cathartica* L. var. *grandiflora* Raffill

Apocyanaceae キョウチクトウ科

(一)

花卉

オオハマグルマ *Wedelia robusta* Kitamura

Compositae キク科

ペーナマ

牛の餌。ペーは這うものという意味でナマには意味はない。

オオハマボウ *Hibiscus tiliaceus* L.

Malvaceae アオイ科

ユダ

樹皮の繊維で縄を綯い、床のコチリ竹を編むのに用いる。この繊維で、むかしは魚網を作ったし、みの笠を編んだ。葉はチリ紙代用となり、とくに痔病の人によいという。薪には利用しない。ユダの縄のことをカスガーとよぶ。

オオムラサキシキブ *Callicarpa japonica* Thunb. var. *luxurians* Rehd.

Verbenaceae クマツヅラ科

パネー、パンダヌグサン

山羊がよく食べる。神行事のときに司が使用する杖となる。「神司の杖」の意。

オオヤブツルアズキ *Phaseolus reflexo-pilosus* Ohwi

Leguminosae マメ科

ガヤブラーマミ

豆は赤くアズキに似ている。

オキナワウラボシ *Microsorium scoropendria* Copel.

Polypodiaceae ウラボシ科

バラビ

新芽を食用にする。庭に花卉として植えることもある。

オキナワクマバナ *Clinopodium chinense* (Benth.) O. K.

Labiatae シソ科

アカレーブサ

夫婦の一方が死ぬと、死んだ人は恋しい気持ちで幽霊になって現れるといわれる。幽霊と別れられる（アカレー）ように、枕元にこの草を置くという。

オキナワサルトリイバラ *Smilax china* L. var. *kuru* Sakaguchi et Yamamoto

Liliaceae ユリ科

ヤマクル

棘のないヤマクルである。山羊と牛の餌。

オキナワズメウリ *Diplocyclos palmatus* C. Jeffrey

Cucurbitaceae ウリ科

マザムヌウルン

臭気があり、山羊や牛も食べない。「化け物のウリ」の意。

オクラ *Abelmoschus esculentus* Moench

Malvaceae アオイ科

オクラ

自家用野菜として近年栽培するようになった。

オシロイバナ *Mirabilis jalapa* L.

Nyctaginaceae オシロイバナ科

サントウシ

花に糸を通して首輪を作り、また、種子の胚乳をお白い粉といって、顔にぬって遊んだ。
日暮れ時に花が咲くのでこの名がある。

オニタビラコ *Youngia japonica* DC.

Compositae キク科

パビルブサ

黄色のチョウがたくさん集まってくるので「チョウチョウ草」の名がある。

カキバカンコノキ *Glochidion zeylanicum* A. Juss.

Euphorbiaceae トウダイグサ科

(一)

カフクラギの一種である。

カジノキ *Broussonetia papyrifera* L'Herit. et Ventenat

Moraceae クワ科

カツィ、マーフガジー

樹皮から繊維をとり、蓆を編む糸に使用する。

カジノハラセンソウ *Triumfetta rhomboidea* Jacq.

Tiliaceae シナノキ科

ピティーグマン、グマンフサ

山羊の餌。果実はゴマに似ているので、「畑のゴマ」または「ゴマ草」の意味の名がある。

カジュマル *Ficus microcarpa* L. f.

Moraceae クワ科

ガザバニ

葉は山羊や牛の飼料に非常によい。気根（サール）は畑から薪を持って帰るときに縄の代用とする。盆栽にすることもある。

カタバミ *Oxalis corniculata* L.

Oxalidaceae カタバミ科

ミナスク

切り傷の薬。葉を揉んで絞った汁で傷口をなでる。また、毒虫に刺された直後に葉の汁をこすると腫れないで治る。さらに、血止めの効能、かゆみ止めの効能もある。

カラシナ *Brassica juncea* Coss.

Cruciferae アブラナ科

マーナン

蔬菜。種子からは食用油をとる。昭和初期まではこの葉野菜しかなかった。

カラスギバサンキライ *Heterosmilax japonica* Kunth

Liliaceae ユリ科

サンキラ

のぼせや梅毒の薬。さらに、下痢止めの薬にする。根を薬に利用する。

カラムシ *Boehmeria nivea* (L.) Gaudich. f. *nipponivea* Hatushima

Urticaceae イラクサ科

バゴ

ブーの仲間であるが、布を織る糸はとれない。山羊や牛の餌となる。

カレンコウアミシダ *Tectaria simonsii* (Bak.) Ching

Aspidiaceae オシダ科

(一)

カワラヨモギ *Artemisia capillaris* Thunb.

Compositae キク科

ヌバー

土地のやせたところによく生える草である。女性の病気によく効く薬である。

カンコノキ *Glochidion obpdatum* S. et Z.

Euphorbiaceae トウダイグサ科

(一)

スタギの一種である。葉は牛の餌になる。

キールンカンコノキ *Glochidion lanceolatum* Hay.

Euphorbiaceae トウダイグサ科

ンギ

材は虫がつきにくく、建材になる。芯は三味線の棹に利用できる。

キウリ *Cucumis sativus* L. var. *tuberculatus* Gabajev. *

Cucurbitaceae ウリ科

キーウーリ

食用として栽培。果菜。

キク *Chrysanthemum mirifolium* Ramatuelle

Compositae キク科

キク

花卉。正月、めでたいときなどに生け花にする。

ギシギシ *Rumex japonica* Houtt.

Polygonaceae タデ科

ジュールマギ、スクブサー

豚の餌。根はオオバコの根と一緒に煎じて喘息の薬にする。

キダチキンバイ *Ludwigia pubescens* (L.) Hara var. *villosa* (Lam.) Hara

Onagraceae アカバナ科

(一)

キダチトウガラシ *Capsicum frutescens* L.

Solanaceae ナス科

グース

果実を香辛料にする。パトゥン (鳩) グース、スー(白) グースなどの種類がある。

キツネノヒマゴ *Justicia procumbens* L.

Acanthaceae キツネノマゴ科

ユーベースフサ

草を搗いて魚毒に用いる。大袋一杯分で約 30 坪あまりのタイド・プールの魚がとれた。「魚を酔わす草」の意。

キツネノマゴ *Justicia procumbens* L. var. *leucantha* (Honda) Hara

Acanthaceae キツネノマゴ科

ユーベースフサ

キツネノヒマゴと同方名で、同じように魚毒として利用する。

ギネアキビ *Panicum maximum* Jacq.

Graminae イネ科

ボクソー

牛の飼料として持ち込まれた栽培種。

キバナコスモス *Cosmos sulphureus* Cav.

Compositae キク科

(一)

花卉。

キャッサバ *Manihot esculenta* Crantz

Euphorbiaceae トウダイグサ科

キャガン

50 年くらいまえ (1930 年代) に島に渡来した。2 種類あり、葉柄の赤い種類がよい。

ギョボク *Crataeva falcata* DC.

Capparidaceae フウチョウソウ科

(一)

カフクラギ (樹皮が厚ぼったく、かぶれそうな感じのする木の総称) の一種である。

キンゴジカ *Sida rhombifolia* L.

Malvaceae アオイ科

(一)

ギンチョウ *Kalanchoe verticillata* Elliot

Crassulaceae ベンケイソウ科

(一)

終戦後、花卉として持ち込まれた。繁殖力が強く、手を焼く雑草でもある。

ギンネム *Leucaena leucocephata* de Wit

Leguminosae マメ科

ギンネム

緑肥として奨励されて台湾から持ち込まれたものである。

クサギ *Premna corymbosa* Rottb. et Willd. var. *obtusifolia* Fletcher.

Verbenaceae クマツヅラ科

パパラ、ウギチ

アマクサギと本種とを区別する人と、両種ともウギチとして区別しない人がいた。パパラは利用しないという。[アマクサギについては次の利用法がある：大木の枯れたものを、火起こし棒 (ピッキ) に用いた。牛はよく食べる。]

クサスギカズラ *Asparagus cochichinensis* Merr.

Liliaceae ユリ科

ジームイ

根はイリオモテアザミの根に似ており、食用になる。漬物にする。旧正月の生け花に必ずもちいる。テッポウユリと一緒にして、茎の数が奇数になるようにし神棚に供える。球根で繁殖し、季節が来ると新しい芽を出すので縁起がよいとされている。屋敷内に植えて保護する人もいる。

クサトベラ *Scaevola taccada* (Gaertn.) Roxb.

Goodeniaceae クサトベラ科

オーザキ

枝の中のスポンジ状の髄を取り出し色をつけ、盆祭の踊りのときに身につける頭飾りをつくった。葉は牛の餌によい。

クマツヅラ *Verbena officinalis* L.

Verbenaceae クマツヅラ科

フサーシ

全草を煎じた液は、皮膚病（湿疹など）に効く。

グミモドキ *Croton cascarilloides* Raeusch.

Euphorbiaceae トウダイグサ科

ションカネキ

昔、女性はこの材でかんざしを作り、頭に挿していた。材は非常に堅いが、薪にできるほど成長しない。干魃のとき、弱い、根や樹皮は胃腸薬として煎服する。

クリノイガ *Cenchrus brownii* Roem. et Schult.

Graminae イネ科

マシーブヤフサ

島に持ち込まれて 40～50 年になる。穂の棘は非常に痛い。マシ爺さんの畑に最初に生えていたので「マシ爺さんの草」という名がついた。

クロイワザサ *Thuarea involuta* R. Br.

Graminae イネ科

タキサー

海岸に生えるタキサーである。馬、山羊の餌。

クロトン *Codiaeum variegatum* Bl.

Euphorbiaceae トウダイグサ科

クロトン

垣根代わりや、庭木にする。神棚、床の間、かまどに生け花にして飾る。

クロヨナ *Pongamia pinnata* Pierre

Leguminosae マメ科

ブガマー

2 回落葉し、緑肥になる。畑の周囲に生える。くさい木である。

クワズイモ *Alocasia odora* Spach

Araceae サトイモ科

ビリカナパー

乳汁が皮膚につくと赤く腫れる。

クワノハエノキ *Celtis boninensis* Koids.

Ulmaceae ニレ科

ジンギ、ズンギ

山羊や牛が葉を好む。大木になるが材は弱く利用しない。

ゲンバイヒルガオ *Ipomoea pes-carpae* Sweet

Convolvulaceae ヒルガオ科

パマズラー

浜の上手の草地で春に芽生え、波打ち際へと一面に蔓がひろがっていく。このカズラが満潮時に波のかぶるところまで広がった頃には必ず大きな波（台風の到来）がやってくるといわれている。「浜蔓」の意。

ケイヌビエ *Echinochloa crus-galli* (L.) Beauv. var. *caudata* (Roshev.) Kitagawa

Graminae イネ科

ガヤナン

畑の雑草。

ケイヌビワ *Ficus erecta* Thunb. var. *beeheyama* (Hook. et Arm.) King

Moraceae クワ科

ンタドゥ、ンタビ

果実を盆祭の時にムリムヌのひとつとして飾る。果実は食用になる。焼香のときにも果実として必ず供えた。

ケイノコズチ *Achyranthes aspera* L. var. *indica* L.

Amaranthaceae ヒユ科

サカジシャ

牛や山羊の餌。サトウキビの収穫の頃実が熟し、キビ刈り作業のときに棘がささりやすく大変である。繁殖力が強く、厄介な雑草である。熟した実は棘が逆向きについており、刺さるとなかなか落ちないので、サカ（下向き）ジシャ（棘）の名がある。

ケタデ *Polygonum barbatum* L.

Polygonaceae タデ科

タナグスー

これが生えている場所を歩くと体がかゆくなり、かおが腫れるので「田のトウガラシ」という意味の名がつけられた。

ゲッキツ *Murraya panuculata* Jack.

Rutaceae ミカン科

ジギチ

材は弾力性があって強いので、鎌やハンマーの柄によい。庭木。気圧が下がったときに花が咲くので、台風や雨の到来を知らせる天気予報の役目を果たす。

ゲットウ *Alpinia speciosa* K. Schum.

Zingiberaceae ショウガ科

サーニ

豊年祭のときの餅を葉で包んでつくる。花卉として庭に植える。

コーライシバ *Zoysia tenuifolia* Willd.

Graminae イネ科

ウキン、ベナサー

芝の一種。牛や山羊の餌。火をつけると非常に勢いよく燃え広がるため、タバコの不始末で野火を出した人がいた。道が崩れないように路傍に植えることもある。子供達は、若い芽を地面に挿して、畑と称して遊んだ。

コニガクサ *Teucrium viscidum* Bl.

Labiatae シソ科

(一)

オキナワクルマバナに似ているが、臭気がないので違う種類であるという。

コバテイシ *Terminalia catappa* L.

Combretaceae コバテイシ科

クパギシャ

南方から渡来した木である。庭木にしてもよい。

コバノツルアズキ *Phaseolus minimus* Roxb.

Leguminosae マメ科

(一)

コバノハスノハカズラ *Stephania japonica* Miers. var. *australis* Hatusima

Menispermaceae ツヅラフジ科

(一)

虫がつきやすいカズラーである。

コフウセンカズラ *Cardiospermum halicacabum* L. var. *microcarpum* Bl.

Sapindaceae ムクロジ科

パシクルブサ

山羊の餌。実をつぶすと、パンパン鳴るのでこの名がつけられている。

ゴマ *Sesamum orientale* L.

Pedaliaceae ゴマ科

グマン

クー(黒)グマンとスー(白)グマンの2種類がある。餅のあんとして一番好まれる。ゴマ油用に出荷していた時期もあった。

コミカンソウ *Phyllanthus urinaria* L.

Euphorbiaceae トウダイグサ科

(一)

コミノクロツグ *Arenga tremula* Becc.

Palmae ヤシ科

マーニ

しゅろ縄で床の簀の子を編む。船網、アンカー網にも利用する。葉柄の芯は食べられる。葉柄の皮を剥ぎ裂いて、篩（ユラシー）、ガヤジー（米や粟を入れる容器）をつくる。未生のもの「ジークパ」といい、葉にする。

サクララン *Hoya carnosia* R. B.

Asclepiadaceae ガガイモ科

モルクパナ

カズラー。魚に中毒した直後であれば、葉をすって飲み込むと食べ物を吐き、治る。

サツマイモ *Ipomoea batatas* L.

Convolvulaceae ヒルガオ科

アガン

葉、根茎を食用にする。「赤いイモ」の意。

サツマサンキライ *Smilax bracteata* Presl

Liliaceae ユリ科

ヤマクル

山羊の餌。山羊が腹をいためたときに、この葉を与えるとなおる。カラスギバサンキライに似た蔓であるが、根茎を葉に利用できない。根茎を煎服すると中毒症状を示す。

サトイモ *Colocasia esculenta* Schott

Araceae サトイモ科

ムジ、アガムジ

食用に栽培。アガムジは茎が赤い種類で、昔からある在来種である。ムジは、大正 10 年頃に渡来してきた新しい種類である。

サトウキビ *Saccharum officinarum* L.

Graminae イネ科

アマスナー

食用として栽培し、盆祭のときの盛物に欠かせないものである。

ザボン *Citrus grandis* Osbeck

Rutaceae ミカン科

ボンカン

最近、町役場から苗をもらい、植えたものである。食用。

ザラツキエノコロ *Setaria verticillata* (L.) Beauv.

Graminae イネ科

スーゴーナ、ゴーナ

牛の餌。茎が緑で白っぽいので、スー（白）ゴーナ（エノコログサ）という名がある。

サルカケミカン *Toddalia asiatica* Lamk.

Rutaceae ミカン科

ジロース

実、根の皮の煎じ汁は、非常に苦いが胃腸薬である。ジは棘の意。この仲間には 2 種類あり、もう一つは棘がもっと鋭く、ヤマジロースと呼ぶ。

サルスベリ *Lagerstroemia indica* L.

Lythraceae ミソハギ科

アカパナー

庭木。赤い花が咲くのでこの名がある。「赤い花」の意。

サンカクチュウ *Amaranthus tricolor* L.

Cactaceae サボテン科

ヨナカビジン

花卉。

サンゴジュスズメウリ *Mukia maderaspatana* (L.) Cogn.

Cucurbitaceae ウリ科

ピティーウルン

果実は食用になる。果実の煎じた汁で皮膚のかゆい時に洗うとよく効く。「畑のウリ」の意。

サンジャクバナナ *Musa nana* L.

Musaceae バショウ科

サンジャクバナナ

食用。実は小さいが一番おいしい種類。

サンショウ *Zanthoxylum piperitum* DC.

Rutaceae ミカン科

サンショウ

本土から苗を持ち込み、庭に植えている家がある。

サンダンカ *Ixora chinensis* Lam.

Rubiaceae アカネ科

サザンカ

盆栽、庭木にする。年中花が咲いているので好まれている。島に自生している木ではなく、持ち込まれたものである。

ジシバリ *Ixeris debilis* A. Gray

Compositae キク科

トゥーナ

葉を食用にする。汁が服につくと色が落ちない。

シマエンジュ *Maackia tashiroi* (Yatabea) Makino

Leguminosae マメ科

(一)

シマオオタニワタリ *Asplenium nidus* L.

Aspleniaceae チャセンシダ科

クツガラー

祝い事の時の吸い物の椀種に、新芽を必ず用いる。

シماغワ *Morus australis* Poir.

Moraceae クワ科

コンギ、ナンズー

材は非常に丈夫で柱材によい。芯は三味線の棹の材ともなる。果実は可食である。薬にもなる。

シマコバンノキ *Phyllanthus reticulatus* Poir. in Lam.

Euphorbiaceae トウダイグサ科

スタギ

薪、胃腸薬にする。オオシマコバンノキと同方名。

シマツユクサ *Commelina diffusa* Burm. f.

Commelinaceae ツユクサ科

シコサ

牛はこれを食べ過ぎると腹をこわす。繁殖力旺盛な雑草である。

シマトリコ *Fraxinus griffithii* C. B. Clarke

Oleaceae モクセイ科

ヤマパテーシ

薪にする。

シマニシキソウ *Euphorbia hirta* L.

Euphorbiaceae トウダイグサ科

ウシユミン

タムシのとき、白い汁を患部に塗ると治る。花が葉腋に咲いている状態が牛の耳のようであり、「牛の耳」の意の名がついている。

ジャノヒゲ *Ophiopogon japonicus* (L. f.) Ker-Gawl.

Liliaceae ユリ科

ゴカビラ

ビローサの仲間である。

シャリンバイ *Raphiolepis indica* Lindl. ssp. *umbellata* Hats.

Rosaceae バラ科

シコチ

花がたくさん咲き、花卉として屋敷内に植えるのを好む。材は硬く、木鋏やハンマーの柄にする。産婦の体を暖めるための薪（シラギ）に用いられた。

ジュズダマ *Coix lachryma-jobi* L.

Graminae イネ科

シイシイータマン

種子で首飾りを作る。解熱剤、膀胱炎の薬で、煎服する。

シュロ *Thachycarpus fortunei* H. Wendl.

Palmae ヤシ科

スグレー

葉柄の根元のシュロ毛（フクエ）で縄を緋い利用する。樹皮でみのをつくる。葉で盆祭に登場するブブザーのヒゲをつくる。

シュロガヤツリ *Cyperus alternifolius* L. var. *obtusangulus* T. Koyama

Cyperaceae カヤツリグサ科

(一)

花卉

シュロチク *Rhaphis excelsa* Henry

Palmae ヤシ科

シュロチク

庭木

ショウガ *Zingiber officinale* Rosc.

Zingiberaceae ショウガ科

ソング

栽培。香味料。

ショウキラン *Lycoris traubii* Hayward

Amaryllidaceae ヒガンバナ科

アミファスパナ

雨が降った直後に花が咲くので、この名がある。「雨が降る花」の意。

ショウジョウソウ *Euphorbia heterophylla* L. var. *cyathophora* Griseb.

Euphorbiaceae トウダイグサ科

アカパナー

1910 年頃、花卉として島に入ってきた。庭に植える人もいる。

シロバナセンダングサ *Bidens pilosa* L. var. *minor* (Blume) Scherff

Compositae キク科

サスブサ、ムッチャーサー

実がよく服に刺さる。サトウキビ作りにとれない、ますます畑地に繁殖するようになった。

シロバナミヤコグサ *Lotus australis* Andr.

Leguminosae マメ科

(一)

浜に生えるフサ (草) である。

スイカ *Citrullus vulgaris* Schrad.

Cucurbitaceae ウリ科

スイカ

食用として栽培。

スイゼンジナ *Gynura segetum* Merr.

Compositae キク科

パンダマ

蔬菜。

ススキ *Miscanthus sinensis* Anders.

Graminae イネ科

ユスキ

牛の餌に非常によい。十五夜、秋の農作物祈願、節祭のとき、リュウキュウチクと一緒に生け花して、床の間、仏壇、かまどに供える。

スナズル *Cassytha filiformis* L.

Lauraceae クスノキ科

アガカズラー

西表同様に、屋根瓦の漆喰に利用していた。どんなに探しても根を見つけることができない蔓で、この根を見た人は短命であるという言い伝えがある。

スベリビユ *Portulaca oleracea* L.

Portulacaceae スベリビユ科

ミーナン

雑炊に混ぜるとおいしい。子供の頭にかさぶたができるとき、葉をすって絞った汁で頭を洗うと治る。婦人病の薬にもなり、女性は一ヶ月に3回くらい食べると良い。

セイロンベンケイ *Kalanchoe pinnata* Pers.

Crassulaceae ベンケイソウ科

トーキシ

傷薬になる。中国からわたってきた草であり、トー（唐）キシとよばれる。

センダン *Melia azedarach* L.

Meliaceae センダン科

シンダン

沖縄で一番の指物材である。シロアリがつかず、タンス材にはテリハボク、タイワンオガタマノキとともに重宝がられる。自分のヤマに植えたりする。大木は建材にも利用する。

センダングサ *Bidens biternata* (Lour.) Merr. et Scherff

Compositae キク科

サスブサ

実は棘があり、服に刺さるので「刺す草」という名がある。厄介な雑草。

センナリホウズキ *Physalis angulata* L.

Solanaceae ナス科

ポージキ

果実の種子を取り出し、鳴らして遊ぶ。果実は酢味があるが食べることができる。

センネンボク *Corydalis fruticosa* A. Cheval.

Agavaceae リュウゼツラン科

センネンボク

花卉

ソウシジュ *Acacia confusa* Merrill

Leguminosae マメ科

ソーセージ

昭和の初期に台湾から持ち込んだ。緑肥用として畑の近くに植える。

ソクズ *Sambucus chinensis* Lindl.

Caprifoliaceae スイカズラ科

トーズ

アカトーズとスートーズの2種類がある。（島内で目につくものはスートーズで、アカトーズは採集、確認できなかった。）水分の多い草で、女性がカツオ節削りの仕事をしていた頃、カツオ節に湿り気を与えて削りやすくするのに、葉を利用していた。肥料。若い茎の皮を剥いて裂いたものを水の中につけると、クルクル廻る。昔、子供達は円を描いて廻るのを

競い遊んだ。

ソコベニヒルガオ *Ipomoea gracilis* R. Br.

Convolvulaceae ヒルガオ科

オーカズラー

手首が痛くなったとき、蔓を手首に巻いていると治る。

ソテツ *Cycas revoluta* Thunb.

Cycadaceae ソテツ科

シュトウチー

明治から大正中期にかけて、種子のデンプンは重要な食料であった。ソテツの実は、それが生えている土地の所有者に採集の権利があった。幹からもデンプンを採って利用した。果実は水さらしによって、幹は発酵作用によって毒抜き処理をした。デンプンの利用法は鳩間島と同様である。デンプンを常食すると胃腸の調子がよい。低く、枝の張らない「キ」であり、作物の成長に悪影響を与えないため防風林として畑の傍らに植栽される。葉は簞に、枯葉は燃料に利用される。盆栽としても好まれ、屋敷内によく植えてある。

ソナレムグラ *Hedyotis coreana* Lev.

Rubiaceae アカネ科

(一)

ダイコン *Raphanus sativus* L.

Cruciferae アブラナ科

デークニ、ダグニ

食用として栽培する。

ダイジョ *Dioscorea alata* L.

Dioscoreaceae ヤマノイモ科

ナラブン

食用に栽培する。

ダイズ *Glycine soja* S. & Z.

Leguminosae マメ科

スーマミ、アマラーアミ

味噌、豆腐の材料にする。スー（白）マミ、アマラー（黒）マミ、ミヤコアマラーなどの品種がある。アマラーマミは、スーマミに比べて豆腐や味噌がおいしくできるが、昔からある品種である。アマラーアミ、スーマミは畑に作ると、よく地面を這い、緑肥にもなった。ミヤコアマラーは、昭和になってから宮古島からわたってきた種類である。これは、マメも大きく葉がよく茂る品種である。

タイワンイチビ *Abutilon indicum* (L.) Sweet ssp. *guineense* (Schumacher) Borass.

Malvaceae アオイ科

パマザー

タイワンカモノハシ *Ischaemum aristatum* L.

Graminae イネ科

タキサー

茎に、竹の節のようにふくれた部分があり、竹に似ているのでこの名がある。

タイワンクズ *Pueraria montana* (Lour.) Merr.

Leguminosae マメ科

アールンブヤヌタナン

蔓は強いが、虫がつきやすく、耐久性がないため建築用としては利用しない。畚（もっこ）の縄にはよい。魚をとる縄をナンといい、タナンというのは非常に強い縄という意味である。アール爺さんが、大木を倒すための縄（タナン）用にこの蔓をはじめて使ったという故事に基づいてこの名がある。

タイワンヒヨドリバナモドキ

Eupatorium formosanum Hay. var. *quasitripartitum* Kitamura

Compositae キク科

ペーサリヤー

タムシの薬。葉を患部にすり込む。

タカサゴイチビ *Abutilon indicum* (L.) Sweet

Malvaceae アオイ科

パマザー、フクルサー

パマザー（イチビ類）の一種で、葉が柔らかく大きい方である。葉を落とし紙の代用にした。フクルサーは「拭う葉」の意である。

タカサブロウ *Eclipta prostrata* L.

Compositae キク科

セー

花が咲くと、花卉が白髪のように見えるので、「白髪」という意味の名がついた。

タツノツメガヤ *Dactyloctenium aegypticum* Richter

Graminae イネ科

(一)

メーナン（メヒシバ）の一種である。[枯れる寸前の草の葉は鋭く、手を切りやすいので除草には十分注意する必要がある。]

タバコ *Nicotiana tabacum* L.

Solanaceae ナス科

タカブー

古くから島で栽培していた。薪を燃やした小屋で葉を 1 ヶ月くらい乾燥させて、タバコをつくった。

タブノキ *Persea thunbergii* Kosterm.

Lauraceae クスノキ科

タブー

建材。割れやすく、火力が強いので薪に非常によい。樹皮は粘り気があり、スナズルと一緒に石灰に混ぜて漆喰としていた。

タマガヤツリ *Cyperus difformis* L.

Cyperaceae カヤツリグサ科

ウシイヌフサ、アンドンネサー

タマテンツキ *Fimbristylis cymosa* R. Br. var. *umbellato-capitata* Hillebr.

Cyperaceae カヤツリグサ科

(一)

タマナ *Brassica oleracea* L. var. *capitata* L.

Cruciferae アブラナ科

タマナ

戦前から栽培している人がいたが、昭和 40 年ころから急激に普及した。蔬菜。

タマネギ *Allium cepa* L.

Liliaceae ユリ科

タマネギ

戦後になって栽培するようになった野菜。農協の指導によって出荷していたが、採算が合わなくなり、現在は自家用にするのみである。

タンキリマメ *Rhynchosia volubilis* Lour.

Leguminosae マメ科

モールダマン

種子の色がきれいなので、これを煮て干し、糸を通して首飾りをつくる。痰のよく出る人は煎服するとよい。

ダンドク *Canna indica* L. var. *rubra* Aiton

Cannaceae ダンドク科

マールブサ

花の蜜は甘く、子供たちが吸う。

チガヤ *Imperata cylindrica* Beauv. var. *major* C. Hubbard et Vaughan

Graminae イネ科

ガヤ

屋根を葺く。

チトセラン *Sansevieria nilotica* Bak.

Agavaceae リュウゼツラン科

ビタ

床の間の家の神に供える生け花に利用する。

チョウマメ *Clitoria ternatea* L.

Leguminosae マメ科

(一)

近年持ち込まれた花卉である。

ツクシメナモミ *Siegesbeckia orientalis* L.

Compositae キク科

フクサー

実はねばりけがあり、服によくつく。若い草は牛や山羊の餌になる。

ツボクサ *Centella asiatica* (L.) Urban

Umbelliferae セリ科

ムヨーサ

サトウキビ畑に生えると、すぐ一面に広がってしまうので大変厄介な草である。

ツルソバ *Polygonum chinense* L.

Polygonaceae タデ科

スンメー

豚の餌。捻挫のとき、葉を揉んで布に包み、患部を湿布する。果実は食用になる。雌山羊に与えると流産するという。フサである。

ツルムラサキ *Basella alba* L.

Basellaceae ツルムラサキ科

テブダー

葉はおいしくないが栄養がある。年中葉が食べられるので緑野菜の代用としてよい。熟した実を搗いて絞った汁で白い布を染めると、紫色に染まる。これで人形の服を作ったりして女の子が遊んだ。カズラーである。

ツルモウリンカ *Tylophora tanakae* Maxim.

Asclepiadaceae ガガイモ科

マザムンヌヨールスタミン

果実を食用にできるヨールスタミン（未同定）の一種に似ているが、果実は食べられない

マザムン（化け物）である。

デイゴ *Erythrina variegata* L. var. *orientalis* (L.) Merr.

Leguminosae マメ科

ブーズ

茶盆、丸盆などの指物材、ミロク面、獅子の材、蒸し器の材にする。庭木にする人もいる。根はよく茂り、2回落葉するので、畑の周囲に植えておき緑肥に利用する。材を買いに来る人がいた。

テッポウユリ *Lilium longiflorum* Thunb.

Liliaceae ユリ科

ヨイサーパナ

旧正月の生け花にする。

デリス *Derris elliptica* Benth

Leguminosae マメ科

キーノ

蔓は強く、サトウキビを縛るのに用いる。根は魚毒に用いる。

テリハボク *Calophyllum inophyllum* L.

Guttiferae オトギリソウ科

ヤラブ

南方から指物材として渡ってきたものである。沖縄で最高の指物材で、昭和7～8年までは簞笥材として最高のものであった。大皿（タネー）の材にもする。堀立小屋の柱にも利用していた。

テンニンギク *Gaillardia pulchella* Foug.

Compositae キク科

(一)

花卉

トウガ *Benincasa hispida* Cogn.

Cucurbitaceae ウリ科

シプリ

在来種では、収穫後1年貯蔵できた。最近は改良種を栽培している。

トウツルモドキ *Flagellaria indica* L.

Flagellariaceae トウツルモドキ科

クツツイ

栈り竹を編むのに利用。箆、籠の材料。

トカドヘチマ *Luffa acutangula* Roxb.

Cucurbitaceae ウリ科

ナービラ

果菜。あまり栄養がない。

トゲカズラ *Pisonia aculeata* L.

Nyctaginaceae オシロイバナ科

ウヤンチュウヌスムツン

実は棘が鋭く、鳥やコウモリなどによくつくが、これがつくと鳥も飛べなくなるくらいである。棘のない部分は牛の餌となる。蔓は畑小屋の枠に利用する。カズラー。果実がネズミ（ウヤンシュウ）のふん（スムツン）似ているところから名づけられた。

トックリヤシ *Mascarena lagenicaulis* L. H. Bailey

Palmae ヤシ科

トックリヤシ

庭木

トベラ *Pittosporum tobira* Aiton

Pittosporaceae トベラ科

トゥペラギ

牛の餌になる。「トズペラギヌクササヨー」と謡われるように臭い木である。

トマト *Lycopersicon lycopersicum* Karst.

Solanaceae ナス科

キンカン

野生のトマトである。食用。カラスもよく食べる。

ナガミボチョウジ *Psychotria rubra* Poir.

Rubiaceae アカネ科

ビダスカー

キでもフサでもない。山羊の餌になる。薪にすることもある。

ナス *Solanum melongena* L.

Solanaceae ナス科

ナーズビ

昔から作っている野菜。在来種にはアカナーズビ、スーナーズビの2種があった。

ナハエボシグサ *Indigofera trifoliata* L.

Leguminosae マメ科

(一)

海岸によく生えている。

ナハカノコソウ *Boerhavia diffusa* L.

Nyctaginaceae オシロイバナ科

イシグブン

石があるところによく生え、根がゴボウのようになるのでこの名がある。

ナピアグラス *Pennisetum purpureum* Schum.

Graminae イネ科

ボクソー

昭和 25 年～26 年に牧草として渡来。牛の餌に最高である。

ナミモロコシ *Sorghum bicolor* Moench

Graminae イネ科

ヤタブ

昔は主食にしていた。作りやすく収穫もよかった。臼にひいて粉にし餅状にして食べたり、粒のまま炊いて食べた。

ナワシロイチゴ *Rubus parvifolius* L.

Rosaceae バラ科

テーシー

果実は食用。解熱剤として、バンジロウ、ハイキビの根、メドハギの根と一緒に煎服する。

ナンバンコマツナギ *Indigofera hirsuta* L.

Leguminosae マメ科

マーエー

藍染の藍を採っていた。葉を水の中に入れて腐らし、これに石灰を加えると糸が染まる。

ニガウリ *Momordica charantia* L. var. *pavel* Crantz.

Cucurbitaceae ウリ科

ゴーヤー

果菜。胃腸薬にもなる。

ニガガシュウ *Dioscorea bulbifera* L.

Dioscoreaceae ヤマノイモ科

カリョーン

根茎は食べられるが多少にがい。食料が不足したときに利用していた。野生である。

ニチニチソウ *Catharanthus roseus* G. Don

Apocynaceae キョウチクトウ科

(一) 花卉。

ニホンカボチャ *Cucurbita moschana* Poir.

Cucurbitaceae ウリ科

カブチャ

果菜。花で養蜂をおこなっているひとがいた。

ニラ *Allium tuberosum* Rottler

Liliaceae ユリ科

ビラ

自家用野菜として栽培する。

ニワホコリ *Eragrostis multicaulis* Steud.

Graminae イネ科

タキサー

葉が竹の葉に似ているので、この名がある。「竹の葉」の意。

ニンジン *Daucus carota* L.

Umbelliferae セリ科

アカデークニ

食用。「赤大根」の意。

ニンニク *Allium satibum* L.

Liliaceae ユリ科

ピル

ラッキョウと同じように塩漬けにする。

ヌカカゼクサ *Eragrostis tenella* (L.) P. Beauv. ex Roem. et Schult.

Graminae イネ科

(一)

メーナン (メヒシバ) の一種。[枯れる寸前の草の葉は鋭く、手を切りやすいので除草には十分注意する必要がある。]

ヌカキビ *Panicum bisulcatum* Thunb.

Graminae イネ科

イシメーナン

タキサーの類。山羊、牛、馬の餌。

ネコアサガオ *Ipomoea sinensis* Choisy

Convolvulaceae ヒルガオ科

ユーモアザラ

山羊や牛の餌。サトウキビの葉によくからみついている。

ネズミノオ *Sporobolus fertilis* W. D. Clayton

Graminae イネ科

イノーフサ

竜巻が起こったとき、この草にしがみついて難を逃れたという故事から「竜巻の草」という名がついた。

ノゲシ *Sonchus oleraceus* L.

Compositae キク科

フクナー

葉は柔らかく食用にする。牛や山羊の餌にもなる。

ノビル *Allium macrostemom* Bunge

Liliaceae ユリ科

ヌスビラ

畑の雑草になっているが食用にする。

ハイキビ *Panicum repens* L.

Graminae イネ科

ニンドウシ

牛の餌。根は解熱剤。胃腸薬となる。葉に生じた節の数でそのとりに襲来する台風の数进行を占う。

ハイシバ *Lepturus repens* R. Br.

Graminae イネ科

タキサー

砂地に生えるタキサーである。

ハイニシキソウ *Euphorbia chamaesyce* L.

Euphorbiaceae トウダイグサ科

イナフクヌブヤフサ

20 年位前 (1960 年頃) に島に入ってきた草である。「稲福の爺の草」の意である。雑草である。

ハギカズラ *Galactia tashiroi* Maxim.

Leguminosae マメ科

マミパツラー

実がなる頃、このカズラーが一面に生えているところを歩くと、パシラ、パシラとマメがはじけるので、この名がある。

ハスイモ *Colocasia gigantea* Hook. f.

Araceae サトイモ科

スッサムジ

葉柄を食用にする。葉も茎も白いので「白いムジ」と呼ぶ。

ハスノハギリ *Hernandia nymphaeaeifolia* Kubitzki

Hernandiaceae ハスノハギリ科

サコダチ

軽くてひび割れしない材であり、琴の材になる。

ハゼノキ *Rhus succedanea* L.

Anacardiaceae ウルシ科

パンジ

かぶれる木である。

ハチジョウイノコズチ *Achyranthes bidentata* Bl. var. *hachijoensis* Hara

Amaranthaceae ヒユ科

サカジシャ

ケイノコズチと同じ。牛や山羊の餌。サトウキビの収穫の頃実が熟し、キビ刈り作業のときに棘がささりやすく大変である。繁殖力が強く、厄介な雑草である。熟した実は棘が逆向きについており、刺さるとなかなか落ちないので、サカ（下向き）ジシャ（棘）の名がある。

ハッカ *Mentha arvensis* L. var. *piperascens* Malinv.

Labiatae シソ科

ハッカ

頭痛に葉を揉んで頭にすりこむとよい。鼻づまりには、葉をつまんで鼻につめるとよい。栽培して出荷していたこともある。

ハテルマギリ *Guettarda speciosa* L.

Rubiaceae アカネ科

イガブサー

葉で食物を包み、またこれを皿の代用にする。材は割れやすく、よく燃え薪に最もよい。

ハナカンナ *Canna generalis* L. H. Bailey *

Cannaceae ダンドク科

カンナ

花卉として庭に植える。

ハナシンボウギ *Glycosmis citrifolia* Lindl.

Rutaceae ミカン科

パクヌイ

キ（木）である。「へびの飯」の意。

ハナチョウジ *Russelia equisetiformis* Schlecht. et Cham.

Scrophulariaceae ゴマノハグサ科

(一)

花卉。

バナナ *Musa x sapientum* L.

Musaceae バショウ科

バーサー

食用。葉は食物を包むのに利用。

パパイヤ *Carica papaya* L.

Caricaceae パパイヤ科

マンジュウ

昔から植えており、在来種があった。果実を食用にする。

ハブカズラ *Rhaphidophora pinnata* Schott

Araceae サトイモ科

ナビヌパー

他の木に這ってのびてゆくカズラーである。牛が食べることもある。樹液が体につくと痒くなる。

ハマアオスゲ *Carex breviculmus* R. Br. ssp. *fibrillosa* (Fr. et Sav.) T. Koyama

Cyperaceae カヤツリグサ科

(一)

ハマアズキ *Vigna marina* Merr.

Leguminosae マメ科

ピティークマミ

「畑のヤエナリ」の意。

ハマイヌビワ *Ficus variegata* Bl. var. *garciae* (Elm.) Corner

Moraceae クワ科

アリドー

葉は牛の好物である。材は火縄（ツムトゥ）の芯にもっともよい素材である。火起こし棒にも用いられる。キである。

ハマウド *Angelica japonica* A. Gray

Umbelliferae セリ科

ブーサコナ

牛の餌。黒砂糖と一緒に煮た汁は、咳止め、喘息の薬になる。「大きいサコナ」の意。

ハマエノコロ *Setaria viridis* Beauv. var. *pachystachys* Mak. et Nemoto

Graminae イネ科

スーゴーナ

牛の餌

ハマオモト *Crinum asiaticum* L.

Amaryllidaceae ヒガンバナ科

ヤタカビ、サジフカー

花卉。内皮でさまざまな風船をつくり、子供達が遊んだ。サジフカーというのは、「竹で吹く」の意である。

ハマゴウ *Vitex rotundifolia* L. f.

Verbenaceae クマツヅラ科

ペッサレサブー

サブー (ミツバハマゴウ) の仲間地面を這う種類なので、「這うサブー」という名がある。

ハマサルトリイバラ *Smilax sebeana* Miq.

Liliaceae ユリ科

ヤマクル

サツマサンキライと同方名で同様に利用する。[山羊の餌。山羊が腹をいためたときに、この葉を与えるとなおる。カラスギバサンキライに似た蔓であるが、根茎を薬に利用できない。根茎を煎服すると中毒症状を示す]

ハマスゲ *Cyperus rotundus* L.

Cyperaceae カヤツリグサ科

コブス

根茎で繁殖してゆく厄介な雑草。

ハマナタマメ *Canavalia cathartica* Thou.

Leguminosae マメ科

ガヤブラーマミ、マーガヤブラーマメ

浜辺によく生えるカズラーである。

ハマボッス *Lysimachia mauritiana* Lam.

Primulaceae サクラソウ科

ブーミナン

花がきれいで生け花にする。牛や山羊が食べる。ミナン (スベリビユ) の一種で、「大きなミナン」の意である。

ハリツルマサキ *Euonymus diversifolia* (Maxim.) Ding Hou

Cerastraceae ニシキギ科

イシヌヤマタカニ

盆栽にする。カズラーである。

ハリビユ *Amaranthus spinosus* L.

Amaranthaceae ヒユ科

アカピナン

食用にしない。茎が赤っぽいので、アカ（赤い）ピナン（ヒユ）と呼ぶ。

バンジロウ *Psidium guajava* L.

Myrtaceae フトモモ科

トッキン

果実は食用にする。ナワシロイチゴの根、ハイキビの根、メドハギの根と一緒に煎じた汁は解熱剤となる。薪にする。

ピーマン *Capsicum annuum* L. var. *angulosum* Miller

Solanaceae ナス科

ピーマン

自家用野菜として栽培。

ヒカンザクラ *Prunus campanulata* Maxim.

Rosaceae バラ科

サクラ

庭木

ヒハツモドキ *Piper retrofractum* Vahl

Piperaceae コショウ科

ピパツ

乾燥させた果実を、そのまままたは粉末にして香辛料として用いる。若葉は香りがよく、細かく刻んで混ぜご飯や山羊の汁にいれる。若葉、果実の利用法は鳩間島と同じである。

ヒマ *Ricinus communis* L.

Euphorbiaceae トウダイグサ科

シコーサ

茎の赤い種類をアガシコーサ、緑色のものをスーシコーサと呼び区別する。種子からヒマシ油をとり、便秘のときの下剤にした。アガシコーサの方が本物で、よく効く。畑で栽培し、出荷していた。

ヒマワリ *Helianthus annuus* L.

Compositae キク科

ヒマワリ

花卉

ヒメクマヤナギ *Berchemia lineata* DC.

Rhamanaceae クロウメモドキ科

ガラシイヌイ

果実は食用になる。実の汁が服につくと紫色になり、色が落ちない。ヤマトウジの仲間
で、棘のない種類である。カラスが実を好物にしているので、「カラスの飯」の意の名があ
る。

ヒメフウチョウソウ *Cleome viscosa* L.

Capparidaceae フウチョウソウ科

(一)

ヒメヤブラン *Liriope minor* (Max.) Makino

Liliaceae ユリ科

パース

根茎を食用にする。のぼせの薬で、常食するとよい。水の取り入れ口に植えておくと、土
が吸い込み口に侵入しないのでよい。

ヒユ *Amaranthus tricolor* L.

Amaranthaceae ヒユ科

スーピナン

畑につくるヒユである。法事や盆のときの料理の材料になる。茎は緑色であるが、赤っぽ
い種類（アカピナン）に対照させスー（白い）ピナンとよぶ。

ヒョウタン *Lagenaria siceraria* Standley var. *gourda* Hara

Cucurbitaceae ウリ科

ヒョータン

栽培。果菜として食用にし、果実を乾燥させて容器、杓子として利用する。

ヒラミカンコノキ *Glochidion rubrum* Bl.

Euphorbiaceae トウダイグサ科

ヤマパテーシ

果実は食用にならず、材は薪にもよくない。*根は枯れにくく、挿木で根がつく。

ヒラミレモン *Citrus depressa* Hay.

Rutaceae ミカン科

クンガニフナブ

果実の汁を酢代用にする。「黄金のフナブ(ミカン)」の意である。

ヒルザキツキミソウ *Oenantha speciosa* Nutt.

Onagraceae アカバナ科

(一)

最近島に持ち込まれたもの。チョウが花の蜜を吸おうとすると、この花にとらえられる。

ビロウ *Livstona chinensis* R. Br. var. *subglobosa* Becc.

Palmae ヤシ科

クパ

葉で笠、みの、うちわをつくる。

ビンロウ *Areca cathecu* L.

Palmae ヤシ科

ビンロージュ

庭木にする。

フィリチトセラン *Sansevieria trifasciata* Prain cv. *laurentii*

Agavaceae リュウゼツラン科

ビタ

焼香や盆祭以外のときに、床の間に、生け花にして供える。

フウリンブッソウゲ *Hibiscus schizopetalis* Hook. f.

Malvaceae アオイ科

(一)

戦後、花卉として島に入ってきた。

フクギ *Garcinia subelliptica* Merr.

Guttiferae オトギリソウ科

プクン

暴風のため屋敷の周囲に植える。建材にする。健康祈願や家造りの祝いに生け花にする。

フクマンギ *Carmona retusa* Masam.

Boraginaceae ムラサキ科

パテーシー

果実は食用になる。枯れ木を薪にする。

フシザキソウ *Synedrella nodiflora* (L.) Gaertn.

Compositae キク科

タンブサ

40 年ほど前 (1940 年頃) に島に持ち込まれた草。木炭と一緒に入ってきたといわれ、「炭草」の名がある。牛の餌。

ブッソウゲ *Hibicus rosa-sinensis* L.

Malvaceae アオイ科

ゴシヨウヌパナ

花卉。仏壇に供える花。

ヘクソカズラ *Paederia scandens* Merr.

Rubiaceae アカネ科

フッサレカズラー、オーカズラー

蔓は非常に強く、ものを縛るのに利用する。蔓は枯れても臭いため虫がつかず丈夫である。田小屋をつくるときの縄に用いる。臭気を発するので、フッサレ（臭い）カズラーと呼んだり、蔓が緑なので、オー（青い）カズラーともいう。

ホウセンカ *Impatiens balsamina* L.

Balsaminaceae ツリフネソウ科

シンザク

花卉。花の色の違いによってアカシンザクとスーシンザクの 2 種類に区別する。スーシンザクの方は捻挫のとき、全草を搗いて布に包み湿布するのに用いられる。葉の汁で黄色に染めることができる。子供は花で爪を染めて遊んだ。

ホウビカンジュ *Nephrolepis biserrata* Schott

Davalliaceae シノブ科

ケーバラビ

ケーは井戸を意味する。

ホウライチク *Bambusa glaucescens* Sieb. et Merr.

Graminae イネ科

ザーダキ

箒や籠の材料。笠やカツオ船の餌入れ籠の材料にもなる。植栽されている。

ホシダ *Christella acuminata* (Houtt.) Holtt.

Aspidiaceae オシダ科

ケーバラビ

井戸の周囲によく生えるのでこの名がついた。新芽はあくがあるが、食用にできる。

ホソバワダン *Ixeris lanceolata* Steff.

Compositae キク科

ンガナ

葉を食用にする。胃腸病には常食するとよい。解熱剤として他の薬草と一緒に煎服することもある。下痢止めにもなる（葉）。薬草としては野生のものがよく効く。

ボタンボウフウ *Peucedanum japonicum* Thunb.

Umbelliferae セリ科

サコナ

葉を食用にする。万病の予防薬といい、常食するといい。産後 3 日目にハマガニと一緒に

海水で煮て子供の健康祝いのために食べる。神行事のときに料理する和物（マンズ）に使う菜である。

ボンテンカ *Urena lobata* L. ssp. *simuata* Borss.

Malvaceae アオイ科

(一)

マクワウリ *Cucumis melo* L. var. *makuwa* Makino

Cucurbitaceae ウリ科

シマーウルン

昔から栽培している在来のウリである。生食でき刺身のつまにしたり、塩漬けにしたりする。アオ（青）ウルン、アヤ（縞）ウルン、スー（白）ウルンなどの品種があった。

マサキ *Euonymus japonicus* Thunb.

Cerastraceae ニシキギ科

ユフサーヌベ

年中、葉が茂っているし、虫がつきにくいので、祈願のときに用いられる。健康祈願（シチビ）には、男女とも必ずこれを生け花にして供える。船の航海安全、豊漁祈願のときにも用いられる。各家の庭に植えられている。

マツバボタン *Portulaca pilosa* L. ssp. *grandiflora* Geesink

Portulacaceae スベリビユ科

(一)

マルバチシャノキ *Ehretia dicksonii* Hance

Boraginaceae ムラサキ科

キナツ、キナス

果実は食用にする。実の熟することに、芒種の嵐が吹く。（台風がやってくる）といわれている。

ミズガンピ *Pemphis acidula* G. Forst.

Lythraceae ミソハギ科

スッパヌコツ

大きくならないので材木にはしないが、島中で一番堅い木であり、薪とくに火種として重宝される。よく乾燥したものは、灰の中に埋めておくと、一晩中燃え続け、翌朝の火種にする。盆栽として珍重される。樹皮を砕き、水に入れて煮詰めると赤い汁となり、これで麻や木綿の糸を赤く染めた。これで染めて織った反物をアカシマとよぶ。珊瑚礁岩の波のかかる地点をスパンといい、ここに生えている木なのでこの名がある。

ミツバハマゴウ *Vitex trifolia* L.

Verbenaceae クマツヅラ科

サブー

まっすぐ立っている草である。実は丸く、竹鉄砲の玉に用いる。

ミヤコジマニシキソウ *Euphorbia vachellii* Hook. et Arn.

Euphorbiaceae トウダイグサ科

(一)

ウシユミンの一種である。

ムクイヌビワ *Ficus irisan* Elm.

Moraceae クワ科

ンタドゥ、ンタビ

ケイヌビワと同様に利用する。

ムラサキムカシヨモギ *Vernonia cinerea* Less.

Compositae キク科

ハシケヌブヤフサ

種子が風に吹かれて飛んでいき、繁殖力の強い雑草である。切り傷の薬になる。「ハシ爺さんの草」の意。昔から生えている草。

メドハギ *Lespedez acuneata* G. Don

Leguminosae マメ科

マヤブー

解熱剤となり、煎服する。グショウ（仏の世）の箸として盆祭のとき茎を用いる。

メヒシバ *Digitaria ciliaris* Koel.

Graminae イネ科

メーナン

枯れる寸前の草の葉は鋭く、手を切りやすいので除草には十分注意する必要がある。

モクビャッコウ *Crossostephium chinense* (L.) Mak.

Compositae キク科

イワギク

珊瑚礁岩上に生える草である。神経痛の薬。

モクマオウ *Casuarina equisetifolia* J. R. et G. Forst.

Casuarinaceae モクマオウ科

モクマオウ

島で植林するようになって 40 年くらいになる。戦後は、町役場から苗が毎年配布された。防風林、薪用として植えている。風速 40~50m で枝が折れるが、新しい芽を出すのが早い。

モモ *Prunus persica* Bastsh

Rosaceae バラ科

モモ

庭に植える。実は食用になる。

モンパノキ *Messerschmidia argentea* Johnston

Boraginaceae ムラサキ科

サツザキ

径5~6cmの太さの幹を切り取り、中をくりぬいて水中眼鏡の枠として利用する。これは、水中で絶対に割れることはなく重宝がられている。糸満の漁師に、水中眼鏡用として幹を売却していた。葉は牛の餌に、またハブにかまれたときには毒消しの応急処置として用いる。葉が白いので「白い葉の木」という名をもつ。

ヤエナリ *Phaseolus radiatus* L.

Leguminosae マメ科

クマミ

食用。畑で栽培。モヤシをつくる。

ヤエヤマアオキ *Morinda citrifolia* L.

Rubiaceae アカネ科

ブガーキ

根の皮を剥いで、煮き出すと黄色の液となり、これで布を染めることができる。盆祭のときに登場するミロクやブブザーの着物を染めるのに用い、平常の染色には用いない。葉は山羊や牛の餌となり、緑肥としても利用する。

ヤエヤマクマガイソウ *Nervilia aragoana* Gaudich.

Orchidaceae ラン科

(一)

ヤマに生えるフサである。

ヤエヤマコウゾリナ *Blumea lacera* (Burm. f.) DC.

Compositae キク科

(一)

ピティーハンダマ (野のハンダマ) のような気がする。

ヤエヤマハギカズラ *Galactia tashiroi* Maxim. var. *yaeyamensis* Ohwi

Leguminosae マメ科

(一)

旧暦9月に行う節祭のとき、これを柱に縛りつけ魔除けとし、また、これを耳に巻いてご馳走をたべる。

ヤナギ *Salix* sp.

Saliaceae ヤナギ科

ヤナギ

石垣島から苗を買い、公園に記念植樹したものである。

ヤブジラミ *Torilis japonica* (Houtt.) DC.

Umbelliferae セリ科

ヤマダクシン

畑（原野）によく生える草である。

ヤブラン *Liriope tawadae* Ohwi

Liliaceae ユリ科

ビローサ

水の取り入れ口に植える。

ヤマヒハツ *Antidesma japonicum* S. et Z.

Euphorbiaceae トウダイグサ科

ヤスパス

果実を食用。薪によい。葉は牛のよい餌になる。花卉。

ヤンバルツルマオ *Pouzolzia zeylanica* (L.) Benn.

Urticaceae イラクサ科

イシグブン

石垣の上で根を太らすので、イシ（石）グブン（ゴボウ）の名がつけられている。山羊の餌になる。

ヨウサイ *Ipomoea aquatica* Forsk.

Convolvulaceae ヒルガオ科

ウンツアイ

葉菜。

ヨモギ *Artemisia princeps* Pamp. var. *orientalis* Hara

Compositae キク科

ヤターフツ

風邪のとき、黒砂糖と一緒に煎服すると熱が下がる。高血圧の人や胃腸の弱い人は平常からおかゆに入れて食べたり、山羊の汁にいれて食べているとよい。陰干しにしたものを揉んで灸にすえることもある。旧暦3月3日にはヨモギ餅をたべて潮干狩りに出かける。

ラッキョウ *Allium chinense* G. Don

Liliaceae ユリ科

ダッキョー

塩漬けにして食用とする。

リュウキュウウマノスズクサ *Aristolochia liukiuensis* Hatusima

Aristolochiaceae ウマノスズクサ科

モッコー

根を乾燥させておき、腹の具合の悪いとき、下痢のときなどに、削ったものを煎服する。
乾燥させた根は各家庭の常備薬であった。蔓を牛の草を束ねるのに用いることもある。

リュウキュウガキ *Diospyros maritima* Bl.

Ebenaceae カキノキ科

ガンキ

樹皮に毒性があり、この汁でミミズが死ぬ。薪にする。

リュウキュウコクタン *Diospyros jerry* Bakhauizen

Ebenaceae カキノキ科

キナ

三味線の棹、箸の材料になる。盆祭のときのムリムヌに果実を用いる。果実は食用。庭木。
出産直後の産婦の体を暖めるための薪に生木を用いる。体を冷やさないように、あせもが
出るくらいにこれを燃やす。

リュウキュウチク *Pleioblastus linearis* Nakai

Graminae イネ科

シヌラー、ポーチダキ

箒を作る竹。

リュウキュウトロロアオイ *Abelmoschus moschatus* Medik.

Malvaceae アオイ科

ナンチャピョー

屋敷内に植えておく人もいる。傷や腫れ物の薬として重要である。根をすって患部に塗る
とよい。

リュウキュウバショウ *Musa balbisiana* Colla

Musaceae バショウ科

マーバーサー

繊維で布を織った。茎から出る液は解熱剤として非常によい。

リュウキュウハンゲ *Typhonium divaricatum* Decne.

Araceae サトイモ科

ビール

汁が唇に触れたりすると腫れるという。根は毒である。中毒することをビールといい、こ
の草を食べると毒なのでこの名がある。3種類あるビールの一つ。

リュウキュウボタンズル *Clematis grata* Wall. var. *ryukyuensis* Tamura

Ranunculaceae キンポウゲ科

ミパブサ

石垣の間に繁茂する退治しにくい草である。三出葉であるので、ミパ（三つ葉）ブサ（草）の名がある。

リュウキュウマツ *Pinus luchuensis* Mayr.

Pinaceae マツ科

マーマツ

島内には本来自生しておらず、西表島から苗をもってきて植栽したものである。新正月の松飾りにリョクチクと一緒に用いる。

リュウゼツラン *Agave americana* L. var. *marginata* Trec.

Agavaceae リュウゼツラン科

ビンドー

近年、島に持ち込まれたもの。縄をつくる。畑の垣根代用に植える。

リョクチク *Bambusa oldhamii* Makino

Graminae イネ科

トーダキ

カツオ釣の竿にする。新正月の松飾にリュウキュウマツと一緒に用いる。

ワケギ *Allium fistulosum* L. var. *caespitosum* Makino

Liliaceae ユリ科

シィビル

蔬菜として昔から栽培している。

引用文献

山田孝子 1984.「沖縄県、八重山地方における植物の、命名、分類、利用—比較民族植物学的考察」『リトルワールド研究報告』7:25-235.

魚名の命名法とその特徴について —波照間島、鳩間島、佐良浜の事例から—

高橋 そよ

1. はじめに

本稿では、魚名の命名法の分析をとおして、魚に関する認知体系と文化的価値について考察することを目的とする。これまで、沖縄の漁村における糸満系漁民の影響がしばしば指摘されてきた。しかし、その多くは漁撈技術の伝播や地域社会による受容のあり方についてであり、漁の担い手である人々がどのように魚を分類し、どのように認識しているのかといった、民俗知識について十分に議論されてきたとはいえない。

これまでの認識人類学的研究では、文化によって物事に対して認識と分類のあり方が異なることに注目し、その土地固有の認知体系が形成されることを指摘されてきた。本稿では、同じような自然環境や歴史性にある複数の沖縄の漁村社会を比較分析することで、認知体系の背景にあるものを探っていきたい。

そこで、本稿では、沖縄島、宮古諸島、八重山諸島から複数の漁村を取り上げ、魚名の命名法について比較分析をし、地域差とその背景を明らかにする。

2. 調査方法と調査地域の概要

1) 調査方法

サンゴ礁に生息する魚類のカラー写真付き図鑑を用い、種ごとに写真を示しながらひとつずつ、呼び名を聞き取りした。写真は、水中での生態写真と陸上で撮影された標本写真の両方が掲載されている。インフォーマントはすべて男性で、その人数は表 1 のとおりである。ただし、糸満での方名に関しては、図鑑を参照した（横井 1989）。

表 1 インフォーマント

	佐良浜	鳩間島	波照間島
人数	7	3	4

ひとつの種に対する呼び名が、インフォーマントによって異なる場合は、採集したなかでもっとも多いものを採用した。民俗知識をめぐる個人差については重要な問題ではあるが、本稿は複数の漁村での比較検討を目的としているため取り上げないことにする。

佐良浜でのインフォーマントは、すべて漁業従事者である。しかし、鳩間島と波照間島でのインフォーマントはおかず採り程度の漁しか営んでいない。天気のよい日や手のあいたときなど、小型船舶からの釣りや礁湖内に設置した定置網によって、リーフフィッシュを漁獲している。今回の調査では、インフォーマント数が少ないため、すべての方名を網羅できているとは言いがたい。こうした資料の不足を指摘した上で、暫定的ではあるが、収集することのできた魚名から、その命名法と特徴について分析していきたい。

2) 調査地域の概要

本研究の調査地は、宮古諸島伊良部島北東部に位置する佐良浜集落、八重山諸島鳩間島、波照間島である。これらの地域は亜熱帯性気候に属し、島の周囲には裾礁が発達している（図1）。表2は、産業別就業者の割合をしめしている。佐良浜と波照間は、第一次産業の割合が高い。しかし、表3からわかるように、波照間では水産業に従事するのは、このうち3人のみである。

表2 産業別就業者数の割合

産業	単位 パーセント		
	伊良部町	鳩間島	波照間島
第一次産業	39.6	17.9	56.1
第二次産業	22.4	3.6	13.1
第三次産業	37.9	78.9	30.7

注) 佐良浜は、字前里添と池間添の総称である。伊良部町の統計には、字ごとの数値はない。このため、伊良部町全体の数値を採用する。

資料 伊良部町統計 平成15年度版、八重山要覧 平成15年度版

表3 就業者総数と水産業就業者数

	単位 人数		
	伊良部町	鳩間島	波照間島
就業者総数	1,329	28	335
水産業就業者数	207	1	3

資料 伊良部町統計 平成15年度版、八重山要覧 平成15年度版

表 4 は、漁港別登録漁船数である。佐良浜は、合計 126 隻が漁船登録されているが、波照間ではその約 3 分の 1 である。鳩間は、指定漁港ではないので統計上の資料はない。しかし、石垣島との定期船は高波に弱く、運休になることも多いため、今では交通手段として小型船舶を個人で所有している人が少数ながらいる。

表 4 漁港別登録動力漁船数 単位 隻

漁港	3t 未満	3～5t	5～10t	10～20t	計
伊良部町	98	21	3	4	126
波照間	42	5	0	0	47

資料 伊良部町統計 平成 15 年度版、八重山要覧 平成 15 年度版

3. 調査結果

1) 個別名

用意した図鑑に掲載された 207 種の魚類のうち、個別名は、佐良浜では 133 個、鳩間島では 53 個、波照間島では 69 個を収集した（付表 1）。2 つ以上の種を、ひとつの個別名で説明する場合は、ひとつとしてカウントした。一方、同じ種であっても性別によって区別されている場合は、ふたつとしてカウントした。

ミナミハコフグは、その四角い形状が木製の枕に類似していることから、クータンマ（佐良浜：枕）、マッフア・イズ（鳩間：枕・魚）、マッフア・イユ（波照間：枕・魚）とよばれている。口部が長いキツネフエフキは、ナガ・ウツ・マーユ（佐良浜：長い・口・マーユ）、ナー・フツ（波照間：長い・口）と名づけられている。佐良浜では、その形状との類似性からクギベラをヒーダキ・フキヤー（ホイッスル・吹く人）、オグロトラギスをヤージュマ・ウズ（ヤモリ・魚）と名づけている。鳩間島と波照間島では、その頭部の形状からナンヨウブダイをゲンナー・イズ（鳩間：かなづち・魚）、グマツ・イラブチ（おでこが高い・イラブチ）と名づけている。これらは、魚の形態の特徴と、身の回りの生活道具や動物との形状との類似性から命名されている。

色や模様を命名の指標とする場合もある。ニジハタは、アカ・ニバラ（佐良浜：赤い・ニバラ）、アガナ・ニバリ（波照間：赤い・ニバリ）とよばれている。鳩間島では、テングハギをシルマーユあるいはチヌマールとよんでいるが、同じニザダイ科のミヤコテングハギをその尾部の色からアカ・シルマーユ（鳩間：赤い・シルマーユ）と区別している。アオノメハタは、佐良浜ではガラサ・ニバラ（カラス・ニバラ）とよび、波照間島ではオー・パトゥ・ニバリ（青い・ハト・ニバリ）とよばれている。佐良浜では体色の全体をしめる黒に着目しているのに対し、波照間島では斑点の青い色に着目している点が興味深い。夕

暮れの空に無数のハトが舞っている情景を投影しているかのようなのである。また、模様から命名される場合もある。キツネウオは、その胴体にある 2 本の線がガ克蘭の襟のラインに類似しているため、鳩間島ではコウコウセイとよばれている。また、チョウチョウウオ科のヤリカタギやハナグロチョウチョウウオなどはカサ・ン・パー（傘・の・葉）とよばれているが、これは胴体部分の模様が、バショウの葉が巻き重なり合った葉鞘に似ていることから名づけられている。バショウの葉は、不意の雨をしのぐ傘としてつかわれていたという。

イロブダイのオスは、ブダイ科のほかの種と比べて肝臓が大きい、クガニ・バツウ（佐良浜：お金持ち・ハツウ）とよばれている。ちなみに、メスはその色からフフ・ヌイ（佐良浜：黒い・？）とよばれている。イロブダイは、分類学上は同じ種であっても、その性別によって異なる個別名で区別されていることが指摘できる。鳩間島では、ノコギリダイは、粘り気のある食感からムチ・イズ（餅・魚）とよばれている。このように、魚の内臓や肉の質の状態を命名の指標とする場合もある。

また、魚の生態的な特徴から名づけられる場合もある。テリトリー意識の強いサザナミヤッコやロクセンヤッコは侵入者にたいして威嚇音を出すことから、ゴーゴー・カビッチャ（佐良浜：威嚇音の擬音語・カビッチャ）とよばれている。カツオ漁の活餌となるテンジクダイの生息場所周辺に棲むクロハタは、ジャゴ・ヌ・バン・ニバラ（佐良浜：活餌・の・番人・ニバラ）と命名されている。

鳩間島では、テングハギをチヌマルともよぶが、サザナミトサカハギをトゥー・チヌマル（鳩間：深い・チヌマル）とよび、その生息場所における水深の違いによって区別している。また、ウメイロモドキとユメウメイロは、その生息場所が礁湖内か外洋かによって、アオ・ガナマラ（佐良浜：青い・頭）とイナウ・アオ・ガナマラ（佐良浜：礁湖・青・頭）とよび分けている。このように、魚の生息場所の特徴が命名の指標となる場合がある。

その他として、希少性や実在した人物との関係から命名される場合もある。波照間島では、ハゲブダイのメスは、カネン・パー・フツィ（金嶺・おばあさん・口）とよばれ、金嶺家のおばあさんが好んでよく食べたことから名づけられたという。また、ムスジコショウダイやアヤコショウダイは、メー・ル・ミスィ（米・と・神酒）とよばれている。これは、米や神酒と同じぐらい、食べることがめったにないおいしい魚として名づけられたといわれている。

以上のことから、形質、色や模様、行動や生息場所の特徴などが、命名される際に着目されていることが指摘できるだろう。また、波照間島では、魚とその希少性や実在の人物との関係から名づけられる場合があった。

表 5 指標と魚名の一例

着目される指標	佐良浜
形態	クータ・ンマ(枕・母)、ホオチョウ(包丁)、ヤー・ジュマ・ズ(ヤモリ・魚)、スサ(平たい)、ヒエ・ダキ・フキヤー(ホイッスル・吹く人)など
色または模様	アカ・バニ・トウトウ(赤い・トゲ・トウトウ)、アヤ・ハイヴァカマ(綾模様・ハイヴァカマ)、ガラサ・ニバラ(カラス・ニバラ)、フフ・ヒツ(黒い・ヒツ)など
肉質	クガニ・バツウ(お金持ち・ハツウ)
生態	ジャグ・ヌ・バン・ニバラ(活餌・の・番人・ニバラ)、アマン・バラ(タニシ・食べる)、イラウ・サダミ(礁湖・サダミ)など
その他	クブシマヤー・ヌ・ウンマ・ヌ・フフビ(コウイカ・の・母・の・フフビ)など

着目される指標	鳩間島
形態	マツファ・イズ(枕・魚)、ゲンナー・イズ(かなづち・魚)、マル・グルクン(丸い・グルクン)など
色または模様	アカ・シルマーユ(赤い・シルマーユ)、カサ・ン・パー(傘・の・葉)、コウコウセイ(高校生)など
肉質	ムチ・イズ(餅・魚)
生態	トゥー・チヌマン(深い・チヌマン)、ガチマヤー(餓鬼)など
その他	

着目される指標	波照間島
形態	マツファ・イユ(枕・魚)、カタ・ピサ・イユ(片・側・魚)、グマツ・イラブチ(おでこが高い人・イラブチ)、ポーツ・イユ(箒・魚)など
色または模様	フー・ジン(黒い・銭)、オー・パトゥ・ニバリ(青い・ハト・ニバリ)、オー・マチ(青い・マチ)など
肉質	
生態	ジュール・フクラビ(礁湖の浅い場所・フクラビ)
その他	ハサキ・ヌ・オクサン(浜崎・の・奥さん)、カネン・パ・フツィ(金嶺・おばあさん・口)、メー・ル・ミスィ(コメ・と・神酒)など

注) 各指標が形容する魚名で、「など」と記していない場合は、今回の調査ではひとつしか採集することができなかった。

2) 包括名

これまで、ほかの種と区別するために命名された個別名をみてきた。このように個別のものとして認識された魚は、なんらかの共通性から複数の種をひとつの集合として類別されている。この集合の名称を包括名という。個別名が、他と区別することを前提として命名されたものであるのに対し、包括名は、他との類別的認識の過程に基づいている(山田

1994 : 116)。

鳩間島と波照間島では、魚の分類について体系だった調査をしていないので、収集した個別名の語彙素やインフォーマントとの会話から得られた情報により、暫定的ではあるが、包括名について分析していきたい。インフォーマントへのインタビューの中で、個別名がなかなか思い出せず、「これは、これこれの仲間なんだけどなあ」と繰り返されることが、しばしばあった。つまり、よび名の記憶が薄れても、日常生活の中でその魚をほかの種との共通性からカテゴライズしていることが指摘できる。

表 6 包括名の一例

佐良浜	鳩間島	波照間島
アイ	エー・グワァー	エー・グワァー
アカユ	ミンタマ	—
イジャン	カタカシ・イズ	カタカシ
イラウツ	イラブチ	イラブチ
カビツチャ	カサンパー	アシュ
クースキャ	クスンクン	—
トウトウ	アバサー	—
ニバラ	ミーバイ	ニバリ
ハイヴァカマ	クーレー・イズ	(メー・ル・ミスイ)
ババ	シュー・イズ	バーバー
ヒツ	ヒカ・グワァー	ヒカ・グワァー
フツナズ	ミミジャー	—
フフビ	フクラベ	フクラビ
マツ	マチ	—

表 6 は、インタビューの中で言及された包括名の一例である。類別の基準として、ヒゲがあることや胴体の形態、体色や模様、皮を剥ぐことができること、肉の臭気などの特徴があげられる。

たとえば、沖縄県魚として有名なクマザサハナムロ、タカサゴ、ウメイロモドキ、ササムロ、ハナタカサゴは、3つの地域で共通してグルクンとよばれている。これらは、魚の分類学上では、フエダイ科クマザサハナムロ属とタカサゴ属にわけられる。下顎のひげが特徴的なコバンヒメジ、ホウライヒメジ、モンツキアカヒメジ、リュウキュウアカヒメジは、イジャン（佐良浜）、カタカシ（鳩間、波照間）とよばれている。これらは、ヒメジ科ウミヒゴイ属とアカヒメジ属に相当する。これらは、異なる属であっても同じ科の魚が、ひとつの集合として認識されている。

しかし、分類学上では異なる科ではあるが、島ではひとつの集合としてカテゴライズされている場合がある。たとえば、イロブダイやカンムリブダイ、キツネブダイ、ナンヨウブダイなどのブダイ科とベラ科のシロクラベラをあわせて、イラウツ（佐良浜）、イラブチ（鳩間）、イラブツ（波照間）とよばれている。これらは、頭部の丸い形態やサンゴ周辺に群れるという生態的な特徴から、ひとつの集合としてみなされている。また、チョウチョウオ科のシチセンチョウチョウオやハグロチョウチョウオなどが、キンチャクダイ科のサザナミヤッコやツバメウオとひとつの集合として、カビッチャ（佐良浜）やカサ・ン・パー（鳩間）、アシュ（波照間）として類別されている。これらは、胴体の形状が類別の基準とされている。

4. 考察

これまでみてきたように、個別名はひとつの種にたいして対応している場合が多かった。しかし、ブダイ科のオスとメスの体色が異なる場合など、同じ種であっても別々の個別名で区別されている場合もあった。また、分類学上では、異なる2つ以上の種が、同じ個別名が与えられている場合もあった。たとえば、同じ科であり、同じ属にあるイソモンガラ、キヘリモンガラ、アオスジモンガラは、ジキラー（佐良浜）、ギチナー（鳩間）、ジキナー（波照間）とよばれている。これらは、その背鰭と尻鰭の形状から、ひとつの種として認識されている。一方で、ジキナーは、分類学上は異なる科であるハクセイハギ（カワハギ科）といった魚と同じ仲間として、フフビ（佐良浜）という包括グループに類別されている。以上のように、佐良浜、鳩間島、波照間島のいずれにおいても、形質、色や模様、行動や生息場所の特徴などが、個別名や包括名の命名される際に着目されていることが指摘できる。

では、ここでは、それぞれの種に注目し、地域社会によって、どのように命名しているのかをみていきたい。

まず、3つの地域において、個別名が同じような意味を表す語彙から命名されている場合である。アカマツカサやツマグロマツカサは、佐良浜ではフ・ツミ・アカ・ユ（大きい・目・赤い・魚）、鳩間島ではミンタマ（目玉）とよばれている。命名の指標として、目の大きさが着目されている。また、スジアラは、佐良浜ではアカ・ディン・ニバラ（赤い・銭・ニバラ）、鳩間島ではアカ・ジン・ミーバイ（赤い・銭・ミーバイ）、波照間島ではアカ・ジン・ニバリ（赤い・銭・ニバリ）とよばれている。これは、胴体の赤い体色と斑点が着目されていることが指摘できる。ハマダイやハチジョウアカムツは、佐良浜ではアカ・マツ（赤い・マツ）、鳩間島ではアカ・マチ（赤い・マチ）とよばれている。これらは、頭部から尾にかけての赤みに着目して、名づけられている。このように、魚の形態や体色、模様の特徴が命名の指標として注目されている。

そのほかのハマフエフキやカマスサワラ、キハダなどの名称は、それ自体、意味をもたない最小の語彙である。これらの名称を糸満系漁民のものと比較すると、興味深いことに、

ほぼ4地域で相同している(表7)。その理由に、魚の市場価値と水産管理の影響が考えられる。スジアラやタマン、キハダなどは市場価値が高く、離島で漁獲されても中央卸市場へ出荷されることがある。このとき、中央卸市場のセリ帳簿や漁協への水揚げの記録に、和名よりも糸満の魚名で記載されることが多い。スーパーマーケットの商品表示に、糸満での名称が書かれていることもある。こうした水産管理や流通構造といった漁業の中央集権化が進む近代以降に、このような糸満系漁民の魚名が広く定着するようになったと考えられる。

表7 個別名が相同のうち、最小語彙からなっている一例

和名	糸満	佐良浜	鳩間島	波照間島
カマスサワラ	サーラ	サーラ	サーラ	サーラ
キハダ	キハダ	シュビ	スビ	シュビ
スジアラ	ホンアカジンミーバイ	アカディン	アカジンミーバイ	アカジン
ハマフエフキ	タマン	タマン	タマン	タマン
バラフエダイ	アカナー	アカイラウツ	アカナー	アガナ

次に、ひとつの種に対して、佐良浜、鳩間島、波照間島で全く異なる名称をつけている場合である(表8)。この名称は、2つの特徴にわけることができる。まず、着目する属性は同じだが、関心をはらう先が異なる点である。テンジクガレイは、佐良浜ではスサ(平たい)、波照間島ではカタ・ピサ・イユ(片・側・魚)と名づけられている。両地域ともに魚の形態に注目しているが、佐良浜ではその体の薄さに、波照間島では目の位置に関心をもっている。また、コクハンアラは、佐良浜ではアヤ・アカ・ディン(綾・赤い・銭)とよばれているが、波照間島ではフー・ジン(黒い・銭)とよばれている。つまり、佐良浜も波照間島も魚の体色に着目しているが、佐良浜が胴の背から腹にかけた綾模様に、波照間島では体色全体の黒い色に関心を払っている。また、関心をはらう属性は同じでも、固有の意味づけをしている場合もある。たとえば、ナンヨウブダイは、佐良浜ではハツウという現在ではその意味がわからない最小語彙でよばれ、鳩間島ではゲンナー・イズ(かなづち・魚)、波照間島ではグマツ・イラブチ(おでこが高い・イラブチ)とよばれている。鳩間島でも波照間島でも、魚の頭部の形状に着目しているが、かなづちとおでこの高いひとという、固有の意味付けをおこなっている。

つぎに、着目する属性が全く異なる場合である。ムスジコショウダイやアヤコショウダイは、波照間島ではこれらをひとつの種としてメー・ル・ミスィ(米・と・神酒)とよばれていることは、すでに指摘した。一方、佐良浜ではそれぞれをアヤ・ハイヴァカマ(綾・ハイヴァカマ)、アカ・ハイヴァカマ(赤い・ハイヴァカマ)と区別している。つまり、波

照間島ではその希少性に注目しているのに対して、佐良浜では体色や模様に関心をはらっている。

以上のことから、魚の名称は、地域によってどこに着目するのかが異なり、また、固有の文化的な価値づけがおこなわれていることが指摘できる。

表 8 個別名が全くことなる場合

和名	佐良浜	鳩間島	波照間島
テンジクガレイ	スサ	ヒラメ	カタピサイユ
コクハンアラ	アヤアカディン	ミーバイ	フー・ジン
アオノメハタ	ガラサニバラ	ミーバイ	オー・パトゥ・ニバリ
モンガラカワハギ	クブシマヤヌウンマヌフビ	フクラベ	ズル・フクラビ
ナンヨウブダイ	ハツウ	ゲンナー・イズ	グマツ・イラブツ
ハゲブダイ(メス)	アカ・バ・イラウツ	イラブチ	カネン・パー・フツィ
ムスジコショウダイ	アヤ・ハイヴァカマ	クーレーイズ	メー・ル・ミスィ
アヤコショウダイ	アカ・ハイヴァカマ	クーレーイズ	メー・ル・ミスィ
ノコギリダイ	ンミサビ	ムチ・イズ	

5. おわりに

本稿では、佐良浜と鳩間島、波照間島の調査結果から、魚の命名法の特徴について分析をおこなった。命名する際には、魚の形態、色や模様、行動や生息場所などが着目されおり、その方法には地域差がないことが明らかとなった。ところが、波照間島でみられたように、魚とその希少性や実在の人物との関係からなづけられる場合もあった。そして、このような方法によって名づけられた個別名は、地域によって関心をもつ属性が異なったり、その属性に関する地域固有の文化的な意味づけがなされることを指摘してきた。

一方で、それ自体意味を持たない最小の語彙による名称をもつ魚類が、市場価値の高いハマフエフキやキハダなどであること、そして、それらが糸満系漁民の名称と相同していることから、魚名に関する糸満系漁民の影響は、水産管理などの中央集権化という近代以降に考えられることを指摘した。本稿では、魚名の分析をとおして、名称という地域固有の認知体系とその文化的表象の一面を描くことを試みた。

参考文献

益田一 1992 『海水魚』 山と溪谷社。

山田孝子 1984 「沖縄県、八重山地方における植物の命名、分類、利用—比較民族植物学的考察」『リトルワールド研究報告』7:25-235。

横井謙典 1989 『沖縄の魚図鑑』 (有) 沖縄出版。

付表1 魚の方名(糸満、佐良浜、鳩間、波照間)

科	糸満	佐良浜	鳩間	波照間
ジンベエザメ科	ジンベエザメ ミジサバー			
ドチザメ科	ドチザメ タックワヤー		サバの一種	サバ
メジロザメ科	メジロザメ ナカー		サバの一種	サバ
ウシバナトビエイ科	ウシバナトビエイ ヘンジャーガマンタ	スダク	カマンタ	イン
イトマキエイ科	オニイトマキエイ ガマーカマンタ	スダク		
ニシン科	リュウキュウドロクイ アシキン ミズン イリカーミジュン ヤマトミズン ヤマトミジュン ミナミキビナゴ シーラーグラー	カアミジュヌ ミジュヌ	ミジュン	イワシ
カタクチイワシ科	ミズスルル ミジスルル			
エソ科	マダラエソ イッチョウウーウィーバー			
ダツ科	リュウキュウダツ ハイユージジ オキザヨリ マーシジャー		シジャーイズ シジャーイズ	ウーシン、シジャー ガツキヤ
トビウオ科	ツマリトビウオ サガーマー アヤトビウオ ブーカー マトウトビウオ ウートゥブー	トウビユウ スズー	トビイズ トビイズ トビイズ	トッピーユ アカバニ
イットウダイ科	アカマツカサ ミンタマアカイユ ツマグロマツカサ ウルアカイユ ハナエビス アカイユ スミツキカノコ アカイユ アオスジエビス アカイユ トガリエビス マチラカー	アカユ フツミアカユ フスマイアカユ ハスナガ ハスナガ	パチナーイズ、ミンタマ パチナーイズ、ミンタマ パチナー	ハマサキヌオクサン
アカマンボウ科	アカマンボウ アカマンボウ			
トウゴロウイワシ科	ヤクシマイワシ ハララー	ハダラー		
ボラ科	フウライボラ ブラー	ブラ	ブラ	ボラ
カマス科	オニカマス チキルガマサー ヤマトカマス フナガマサー	チクル	カマサー カマサー	カマサー
サバ科	カツオ アカガチュー キハダ キハダ カマスサワラ サーラ グルクマ グルクマー イソマダ トカキン ゴマサバ マル	ダイバン シュビ サーラ	カツイズ スビ サーラ グルクマー	カッチュ シュビ サーラ グルクマー トカキン
タチウオ科	タチウオ タチンイユ			タッチイユ
マカジキ科	クロカジキ アンダーチ	バレン		バレン、カジキ
アジ科	メアジ ガチュン クサヤモロ ウーシマナガイユ マルコバン イユガシー マルヒラアジ ヒラガーラ カスミアジ ホンガーラ ナンヨウカイワリ ガーラ シマアジ ガーラ コガネシマアジ アヤガーラ ウマツラアジ ヒラソー イケカツオ ビービーターヤー ツムブリ ヤマトウナガユ カンパチ ウキムラー	ガツヌ ユツル ガーラ ガーラ ガーラ ガーラ ガーラ クサラー	ガーラ ガーラ ガーラ ガーラ ガーラ ガーラ クサラー	ガーラン、ガーラ ガーラン、ガーラ ガーラン、ガーラ ガーラン、ガーラ ガーラン、ガーラ ナガユ
ヒラギ科	セイタカヒラギ シャープーシャープー シマヒラギ シャープーシャープー			ガーラン、パマイユ
テンジクダイ科	リュウキュウヤライイシモチ ウーミー	イスダ		
キントキダイ科	ミナミキントキ ミンダナー ホウセキキントキ イーキブヤー	デンキミー	ミンタマ	ヤフザラ、オオナカサン オオナカサン

科	系満	佐良浜	鳩間	波照間
	チカメキントキ イーキーヤー			オオナカサン
ハタ科				
	ハナゴイ デュリグーイユ	アオツズガマ		
	サラサハタ クチナギーミーバイ		ミーバル	ニバリ
	コクハンアラ アカジンミーバイ	アヤアカディン	ミーバイ	フージン
	スジアラ ホンアカジンミーバイ	アカディン	アカジンミーバイ	ニバリ、アカジン
オオアオノメアラ	クルバニー		ミーバイ	ニバリ、オオパタニバリ
	クロハタ ガラサミーバイ	ジャグヌバンニバラ	ミーバイ	ニバリ
アオノメハタ	ヤーラーミーバイ	ガラサニバラ	ミーバイ	オーパトウニバリ
シマハタ	アカミーバイ	ジャグヌバンニバラ	ミーバイ	ニバリ
ユカタハタ	アカテンテンミーバイ		ミーバイ	ニバリ
ニジハタ	アカワター	アカニバラ	ミーバイ	アガナニバリ
アザハタ	アカミーバイ		ミーバイ	ニバリ
アズキハタ	ナガミーバイグワー		ミーバイ	ニバリ
バラハタ	ナガズー	ブナガニバラ	アカナー	ニバリ
カンモンハタ	イシミーバイ	アヤニバラ	ニーバルイズ	ヤツツアニバリ
アカハタ	アカミーバイグワー	ミツダマイ	ミーバイ	タカミニバリ
ナミハタ	タックエーミーバイ	ユズニバラ	ミーバイ	ニバリ
ヒトミハタ	テンテンミーバイ	ナガウツニバラ	ミーバイ	ニバリ
マダラハタ	ユラヤーミーバイ	ユズニバラ	ミーバイ	ニバリ
ホウキハタ	オーナサーミーバイ		ミーバイ	ニバリ
ツチホゼリ	タカバー	アオニバラ	ミーバイ	タカバー
メギス科				
	メギス ウフミー	アカバタ		
フエダイ科				
	ロクセンフエダイ ビタロー	アカンチャ	ビタロー	アムチ、アムツウ
	アミメフエダイ アヤビタロー	アカンチャ		
ニセクロホシフエダイ	ヤマトウパー	ハヌアイアカンチャ		
オキフエダイ	スピイナフクー		ミミジャー	ヤマトビー
ヒメフエダイ	ミミジャー	ミミジャー	ミミジャー、ミーマージャー	ナーダカ
マダラタルミ	シバチャーシチュー	タカジュ		
ヨコフエダイ	アカナンバン	アカンチャ		
バラフエダイ	アカナー	アカイラウツ	アカナー	アガナ
センネンダイ	ナンバン	アカンチャ	ミミジャー	
ゴマフエダイ	カースビ	アカンチャ		
ハマダイ	アカマチ	アカマツ	アカマチ	
ハチジョウアカムツ	ヒーランマチ		アカマチ	
オオヒメ	マーマチ	アカマツ		
ヒメダイ	クルキンマチ			
アオダイ	シチューマチ			
ハナフエダイ	フカヤービタロー			
アオチビキ	オーマチ	アオマツ		
ウメイロ	チーヌックワー			
クマザサハナムロ	ウクー	ウクー	マルグルクン	グルクン
タカサゴ	カブツクウヤー	アカツ	マルグルクン	グルクン
ウメイロモドキ	アカジュ	アオガナマラ	マルグルクン	グルクン
ササムロ	ヒラー	ヘラー	マルグルクン	グルクン
ハナタカサゴ	オームレージャー		ヒラグルクン	グルクン
ユメウメイロ	チーヌックワー		ヒラグルクン	グルクン
シマイサキ科				
	コトヒキ クワーバナー		アヤマーサ、ガチマヤー	パマイユ
イサキ科				
	チョウウチョウコショウダイ ミーバイクレ	ハイヴァカマ	クーレーイズ	
	ムスジコショウダイ ヤナグレー	アヤハイヴァカマ	クーレーイズ	メールミスィ
	クロコショウダイ クレマンカー	アナグル	クーレーイズ	
	アヤコショウダイ クレー・アカクレ	アカハイヴァカマ	クーレーイズ	メモミスィ
	クロダイ シラマーグレー		アカナーの一種	
	ミゾイサキ ガクガク		チン	
タイ科				
	ヘダイ カンガータイ		チン	
フエフキダイ科				
	イトフエフキ イノームルー			
	ホオアカクチビ オームルー		ムル	モールユ
	ハナフエフキ クチナギ	フツナズ	フチナイ、クチナギ	
	イソフエフキ ホンクチナギ	フツナズ	フチナイ、クチナギ	
シモフリフエフキ	シルタマン	フツナズ	フチナイ	
ハマフエフキ	タマン	タマン	タマン	タマン
	アマクチビ ヤキータマン	マングルップタイ		オーマチ
ムネアカクチビ	ウムナガー	アカウツマーユ	アブル	オボロ
キツネフエフキ	ホンウムナガー	ナガウツマーユ		ナーフツウ
ヨコシマクロダイ	ダルマー	タイミ	ダルマイズ	スサドウルメ
	メイチダイ アマクチシルイユ			
	シロダイ シルイユ		シルユー	
サザナミダイ	シルイユ	マーユ		
ノコギリダイ	ムチグワーイユ	ンミサビ	モチイズ、ムチンズ	
ナガメイイチ	アカバニーシルイユ			
タマメイチ	アカバニーシルイユ			

科	系満	佐良浜	鳩間	波照間
イトヨリダイ科				
	ヨコシマタマガシラ ムチグー			
	ヒトスジタマガシラ チューマー	イナウサダミ		
	フタスジタマガシラ シルムチーグー			
	キツネウオ ムチグー	サダミ	コウコウセイ	
メジナ科				
	クロメジナ クルシヒチュー			
イスズミ科				
	テンジクイサキ シパサーヒチュー	フフババ	シューイズ	バーバー
	ミナミスズミ マットウ	アカババ	シューイズ	バーバー
クロサギ科				
	セツパリサギ ハナアマイユ		シンイズー	
インダイ科				
	イシガキダイ ガラサミーバイ	ガサラニバラ		
ヒメジ科				
	コバンヒメジ ホンデンパー	ウスンパンカ	カタカシイズ	ムナカタス
	ホウライヒメジ ユアカー	イジャン	カタカシイズ	カタカシ
	モンツキアカヒメジ フールヤー	スサガタカツウ	フーリヤー	カタカシ
	リュウキュウアカヒメジ ユーアカージンパー	イジャン	カタカシイズ	カタカシ
ゴンベ科				
	ホシゴンベ ピィシヌボーソン	ミタイニバラ		
タカノハダイ科				
	タカノハダイ トウルバイ			
キス科				
	ホシギス ブッル			
ツバメコノシロ科				
	ツバメコノシロ サバチックワ	ダーナガユ		
スズメダイ科				
ミスジリュウキュウスズメダイ	ジュエヌー		ヒカグワァー、スズメダイ	
	ルリスズメダイ オーイユ	オアビー		
	レモンスズメダイ アカビー	アカビー		
	デバスズメダイ オービカー			
	クラカオスズメダイ オービカー	タナンラ		
	ナミスズメダイ ルカー	フツバイビツ		
	キホシスズメダイ アカビカー	フツビツ		
	モンスズメダイ ジューシルビカー	ガラサビツ	スズメダイ	
	アマミスズメダイ クルビカー	ブツジャ		ヒカグワ
	ロクセンズズメダイ アヤビカー	タナンラ		ヒカグワ
	オヤビツチャ アヤビカー			
ペラ科				
	ギチペラ ミミジャー	ウンタグルキヤー		
	クギペラ クサバー	ヒーダキフキヤー		
	ミツバチノウオ イノーヒローサー	ヒロシ		
	メガネモチノウオ ヒローサー	フーイヒロシ	チバルカミ	ピークサ
	キツネペラ アカレー	アマンバラ		
	シチセンペラ アヤナンドラー	アッヴァミヌズ		
	シロクラペラ マクブ	マクブ	イラブチの仲間	マネグ
ブダイ科				
	イロブダイ(オス) イラブチャー	クガニバツウ	アーカーサーイズ	ピョファリブンダー
	イロブダイ(メス) イラブチャー	フフヌイ	アーカーサーイズ	イラブツ
	カンムリブダイ ゲジラブツタイ	ヤマトバツウ	イラブチ	イラブツ
	キツネブダイ イラブチャー	ブータ	ボーダ	イラブツ
	ヒブダイ アーガイ	アカザツフ	アーガエー	スサフク
	イチモンジブダイ(メス) アカイラブチャー	ンナカビキヤ	イラブチ	イラブツ
	ナンヨウブダイ ゲンナータブチャー	ハツウ	ゲンナーイズ	グマツイラブツ
	スジブダイ イラブチャー	アカガマツチャ	イラブチ	イラブツ
	オオモンハゲブダイ イラブチャー		イラブチ	イラブツ
	ハゲブダイ(メス) アカイラブチャー	アカバイラウツ	イラブチ	カネンパーフツィ
	ハゲブダイ(オス) オーイラブチャー	アオミバタ	イラブチ	イラブツ
スダレダイ科				
	ツバメウオ アンラガーサー			ピミザユ
チョウチョウウオ科				
	ヤリカタギ カーサー	マラウイカビツチャ	カサンパー	
	シチセンチョウチョウウオ カーサー		カサンパー	
	ハグロチョウチョウウオ カーサー		カサンパー	
	カガミチョウチョウウオ カーサー		カサンパー	
	ミカドチョウチョウウオ カーサー		カサンパー	
	オニハタタテダイ フーカキカーサー	マラウイカビツチャ	カサンパー	
キンチャクダイ科				
	チリメンヤッコ ハチマキガーサー		カサンパー	
	サザナミヤッコ カーサー			アシュ
	ロクセンヤッコ ゴーゴーカビツチャ	ゴーゴーカビツチャ		カベツツァ
ニザダイ科				
	メガネクロハギ クチクー	アカユラ	トカジャーの一種	
	クログチニザ クチクー	クースキヤ	クスンクン	トカジャ
	ゴマハギ カーサークチクー			
	ナンヨウハギ ジュリグワークチクー			

科	系満	佐良浜	鳩間	波照間	
	ミヤコテングハギ	ハーサーチヌマン	アカジューガミ	アカシルマール	ブナリヤー
	テングハギ	ホンチヌマン	マブユ	シルマール、チヌマール	ツノマラ
	サザナミトサカハギ	ナガジューマシ	マスウ	トウチヌマン	スネブ
アイゴ科					
	ヒメアイゴ	アケー	アカアイ	エーグワァー	
	サンゴアイゴ	アケー		エーグワァー	エーグワー
	マジリアイゴ	ナガアケー		エーグワァー	エーグワー
	アミアイゴ	ハナブックワー		エーグワァー	エナハ
	ハナアイゴ	オーンレー	アオアイ	カーエー、オンデー	エーグワー
	シモフリアイゴ	アカガンチエー	ミヤーン	カーエー	エーヌハ
	アイゴの仲間	カンチエー	アカバニアアイ		
	ゴマアイゴ	カーエー	ヤドアイ	カーエー	エーヌハ
トラギス科					
	オグロトラギス	ヒーバーミツクワー	ヤージュマズ		
オニオコゼ科					
	オニダルマオコゼ	イシアー			
ヒラメ科					
	テンジクガレイ	ヒラトンマー	スサ	ヒラメ	カタピサイユ
ダルマガレイ科					
	モンダルマガレイ	シラヒラトンマー			
ササウシノシタ科					
	アマミウシノシタ	ヒラトンマー			
モンガラカワハギ科					
	モンガラカワハギ	イロカーハギ	クブシマヤヌウンマヌフビ	フクラベ	ジュルガミ
	イソモンガラ	チキランカーガー	ジキラ	ギチナー	ジキナ
	キヘリモンガラ	イノーチキランカーガー	ジキラ	ギチナー	ジキナ
	アオスジモンガラ	ヘーナーカーガー		ギチナー	ジキナ
カワハギ科					
	ハクセイハギ	カーガー		センスリイズ	フクラビ
	ソウシハギ	センスラー	サンスナーノヤイタナビ		ポーツユ
ハコフグ科					
	ミナミハコフグ	マックワバク	クータンマ	マッフアイズ、ブーナ	マッフアイユ、クロバス・ムン
ハリセンボン科					
	ヒトツラハリセンボン	アヤアバサー	アカバニトウトウ	アバサー	
	ネズミフグ	イノーアバサー	アオバニトウトウ	ブーナ、アバサ	イシカボ、シシカブノイシカボ

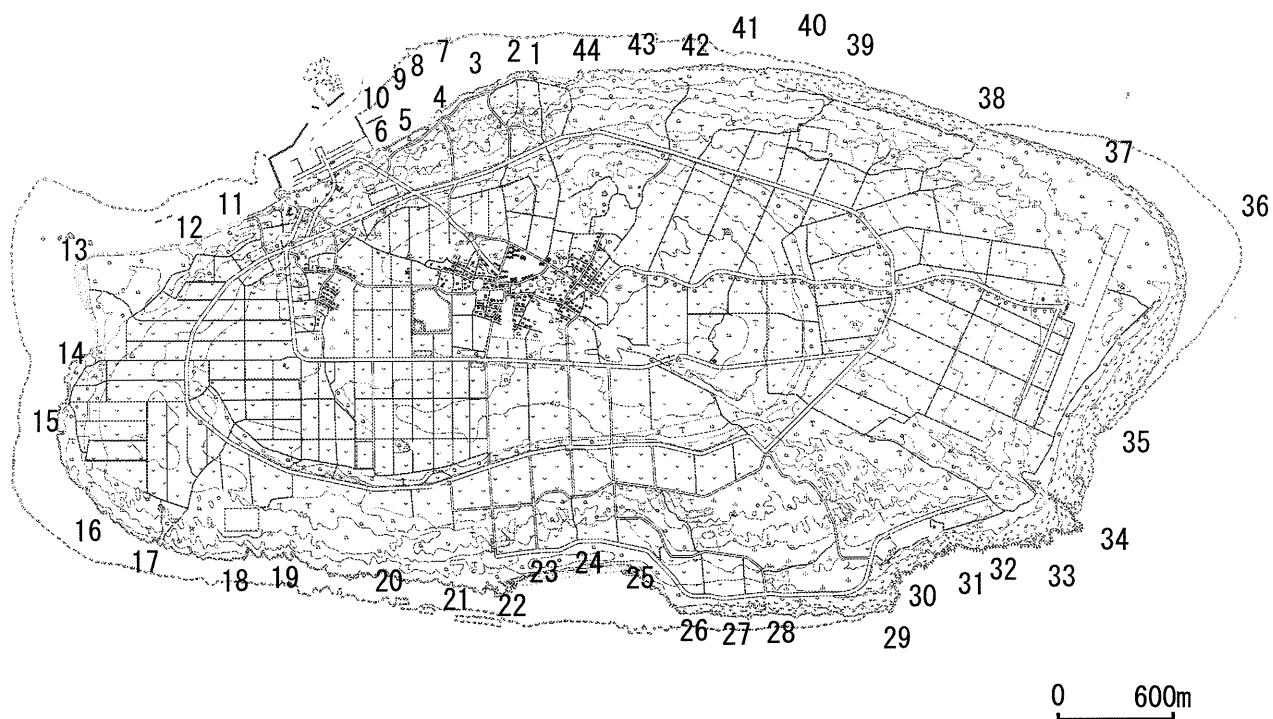
注1) 系満の方名については、横井謙典1989『沖縄の魚図鑑』沖縄出版を参照。

注2) 分類群の名称と配列は、『原色魚類検索図鑑 I、II、III』の動物分類表に順ずる。ただし、この図鑑にのっていない種については、『沖縄の魚図鑑』と下記のホームページを参照した。

<http://f15.aaa.livedoor.jp/~ichthy/Main.html>

参考文献

横井謙典1989『沖縄の魚図鑑』沖縄出版
 阿部宗明1963『原色魚類検索図鑑 I、II、III』北隆館
 岡村収・尼岡邦夫監修1997『日本の海水魚』山と溪谷社



- | | |
|--------------|-------------|
| 1 ブドウマリウダツ | 23 マペーウダツ |
| 2 カノーウダツ | 24 ブノーウダツ |
| 3 アスモタ | 25 アリュゴー |
| 4 パサバリ | 26 キノピナーウダツ |
| 5 ガナバリ | 27 キノバリ |
| 6 イナマ | 28 マリツイウダツ |
| 7 イヌマラ | 29 クナリザツィ |
| 8 コムリヤー | 30 トウラグチィ |
| 9 ブムリヤー | 31 アビッチャ |
| 10 ウイゴー | 32 ナピサー |
| 11 ミシュク | 33 スパスケウラ |
| 12 バスバリ | 34 ブドウピキ |
| 13 ニシノマリー | 35 ブッピナーウダツ |
| 14 ハマシタンモーピナ | 36 サクラグチ |
| 15 ウラピナ | 37 カツシケウダツ |
| 16 イソテウダツ | 38 アメウラ |
| 17 ナナバリ | 39 ニーピナーウダツ |
| 18 ヨーノウダツ | 40 ノバルメ |
| 19 オアンシュピ | 41 タカフク |
| 20 マートウリウダツ | 42 ウダツ |
| 21 サーニウダツ | 43 パナミン |
| 22 ブサツ | 44 ナバタクムリ |

注 浜の境界線
 富嘉集落 11~20
 前集落 20~29
 北・南集落 29~44
 名石 1~11

図1 波照間島の地図とウダツ（浜への下り口）名

鳩間島における魚名にみる自然認識の動態 —1973 年と 2005 年の事例から—

山田 孝子

1. はじめに

2005 年 1 月、1970 年代始めに何回かにわたって訪れていた鳩間島に、本当に久しぶりに訪れてみた。島に舗装道路ができ、一周道路も整備されるという変化はあるが、島の自然景観には大きな変化がなかった。しかし、1970 年代すでに過疎化が進んでいたとはいえ、まだ、活気にあふれていた島の生活は失われてしまったような感じを受けてしまった。

1960 頃には、人口が 500 人ほどに達していたが、カツオ漁の衰退とともに、島民の離島が進み、1973 年には人口が 47 人に減少していた。人口の上では、1970 年代当時と現在とで大きな違いがない（表 1）。2000 年の年齢階級別人口をみると（沖縄県八重山支庁、2004: 4）、0～14 才が 13 人、15～19 才が 5 人、20～34 才が 11 人、35～64 才が 17 人、65 才以上が 8 人である。

表 1 鳩間島における人口変動

	1972.12	1 9 9 9	2 0 0 0	2 0 0 1	2 0 0 2	2 0 0 3
世帯数	1 8	2 5	2 8	2 6	2 9	3 1
人口	6 4	4 4	4 9	5 0	4 8	5 4

出典：山田（1984）、沖縄県八重山支庁（2004）

森口（1985）が詳しく描いているが、鳩間島小学校は創立 86 周年を迎えようとした 1982 年、小学校存続の危機を迎え、その後、小学校存続に向けてのさまざまな努力が行われてきた。島の消滅を救うために小学校の存続が計られてきたといえるが、現在では内地からの留学の受け入れが毎年行われている。このため、就学児童はすべて島外出身者であり、また、鳩間小中学校の教職員 11 名のほとんどは島外出身者で、数年ごとに入れ替わる。2005 年に訪れたとき、鳩間島出身の住民のほとんどが U ターン組で、しかも最年少の人ですでに 52 才であった。島民の若い世代は島外出身者となっている状況にある。

このような島を取り巻く状況の中で、島の人々の生計は主に夏の間に集中する観光客相手の民宿、食堂の経営に依存するものとなっている。島の周囲に広がる珊瑚礁海域では、現在でも、釣り、潜り、ときには網を使って魚が獲られ、自家消費のみならず、観光客用に消費されている。このような島の状況のなかで、人々の海との関わり方は明らかにかつ

てのものとは異なってきている。では、このような変化の中で、海に関する知識はどのように維持、あるいは変化していくのであろうか。1973 年調査の時のフィールドノートをもとに当時の島の海を利用した生活を再構成したうえで、今回、とくに、島の人たちから得られた魚の鳩間島方言名を当時の魚の方言名と比較対照させ、自然認識の動態について考えてみたい。

2. 1973 年当時の島の状況

当時の島の生活は、すこしずつ近代化されるようになっていた。まず、1969 年 7 月から竹富町の負担で、発電が行われるようになったため、1 日 3 回に分けて 10 時間、電気が利用できるようになった（6:30～8:00；11:00～14:00；18:00～23:30）。発電は、1973 年 4 月 1 日からは 1 日 13 時間発電に延長された。それまで、天水に頼る飲料水は、1968 年頃から、コンクリート製のタンクに貯水して、利用するようになった。1968 年には栈橋工事は完成し、1973 年には住吉丸が就航し、島に着岸できるようになり、1971 年夏（7 月頃）には栈橋近くに共同冷凍庫が完成し、漁で獲れた魚を出荷まで冷凍保存できるようになっていた。

八重山でのカツオ漁は、1909（明治 42）年に始まったことが知られるが、鳩間島では、1913（大正 2）年から始まる。1928（昭和 3）年には鳩間漁業組合も専用漁業権を取得して、海人草、ツノマタの養殖を始めた。戦後、1946 年に八重山水産業会が設立され（牧野清、1972: 302）、カツオ漁景気に沸いたこともあった。しかし、1969 年には島の 5 業者がカツオ漁を廃業し、島の経済生活は大打撃を受け、過疎化が進行することになる。当時、八重山地方各地で進行した現象であるが、黒潮の流路、海水温度の変化、エサの不足などの要因が重なり、カツオが獲れなくなったといわれる。

島の人々の生活は、島の周囲の珊瑚礁海域での沿岸漁業と西表島の水田での稲作、島内での畑作であった。ただし、1972 年度には西表島での米作を続けていた家は 6 軒となってしまう、1973 年度には 1 軒のみとなるというように、西表への通い稲作は放棄されていたのである。一方、家畜は自家消費用に飼育されており、たとえば、S 家では、山羊 4 頭、豚 1 頭、鶏 4 羽が飼育され、T 家では、牛 1 頭、成豚 1 頭、子豚 2 頭、D 家では鶏 4 羽、豚 1 頭、K 家では山羊が 2 頭飼育されていた。

漁船の保有を見ると、1 トン未満の動力付き船（サバニ）は 9 隻、1 トン未満動力なし（サバニ）が 2 隻あり、5 トン未満の伝馬船 2 隻が学校用と西表との連絡船として利用されていた。また、モーターボートを保有する家も 1 軒あった。世帯数が 18 のうち、12 世帯で船が所有されていたことが分かる。漁業は島の主要な生計であり、サバニを利用した珊瑚礁海域の積極的利用がなされていたのである。島の周囲にはリーフが発達し、たとえば、東側のフナバルの浜から東南には、「ナーバレー」とその先の「タカビ」と呼ばれるリーフが張り出している。西側の屋良の浜から西南には、「ピザキ」と呼ばれるリーフが張

り出しており、いずれも良い漁場となる。男性による各種の漁法を駆使しての漁業ばかりではなく、女性もタコやシャコ貝を目当てに磯採集を盛んに行っていたのである。

3. 多様な漁法の活用

1973 年には、男性は次の 12 種類の活動を組み合わせ、海での生計を成り立たせていた。

1) シナカキヤー（追い込み型網漁）

たとえば、1973 年 5 月 6 日（旧暦 4 月 4 日）には、4 人のおじいが共同でシナカキヤーの網をあげに行った。この日は大漁であった。ピィカー（アイゴの類）、バーバー（イスズミ）、タマン（フエフキダイの仲間）が沢山獲れた。

この漁法は、袋網を中心に、両袖網を払って形に網を張るものである。袖網の先には藁を所々に縛り付けたツナをくくりつけて、広い範囲を囲んで、魚を袋網に追い込むような形に張る。袋網はリーフの深みに、袖網はツナの部分が干潮時には海面から出るぐらいの深さのところに張る。満潮時に網を張ったあと、一人が残って干潮時まで網を見張る。干潮時に共同で、深みにたまった魚を逃さないように、先端のツナを両側からもちながら、回り込み、深みに張った袋網の方に追い込む。深みに集めた魚を、銚で突くか、魚毒を使って捕る。この漁法を行う場所は、島の周囲に 2 カ所あるだけであるという。東側は、マエノハマの東端、西側は屋良の浜の東端にある。西側の場所をクッキクムルと呼ぶが、東側の場所には名がない。

2) クサエン

シナカキヤーに似ているが、これのようにシナをたぐり寄せて囲い込みことはしない。潮が引いたときに自然に、深みの袋網に魚が入り込みように網を設置する。

3) フッチマチル

チヌマル（シヌマルともいう）（テングハギ）用の網。この魚がリーフ内に入ってきて、外に出る道筋が決まっている。この通路に網を仕掛ける。魚がかかったときには潜って、網からはずした。

4) 追い込み網

クスクン（表 2 の No. 27, 28）用である。島では追い込み漁をする人がほとんどであり、追い込み網をもっている人が 3 人いる。

5) スンカヤーアミ

追い込みの網とは袋網の形状が異なる。袋網の両側に長い網をつけ、沖に網を張った後、浜から両サイドに分かれて網を引いて、袋網に魚を集めてとる。

6) その他の網漁

ムジャミと呼ばれるカツオの餌とり専用の網。投げ網（ウツツァン）、巻き網（ヤジミ）、ムジアミがある。島で、刺し網をもっている人は一人である。

7) 釣り

4種類の方法がある。ウッチバァイといって沖で舟をアンカーで固定して釣る方法があり、クッチナギ（No. 184, 185）、ミーバイ（No. 129）、タマン、アブルー（No. 189, 191）、アカジナ（No. 125, 126）などを対象とする。餌にはカツオの内臓を使う。また、パンビキ（引き網一本釣り）、底引きという一本釣りがある。パンビキはカツオ、マグロ、カジキ用であるが、カツオが多い。底引きではトカキン（No. 250）、アカジナなどを釣る。さらに、カッチナーといって、アンカーは岩に固定するが舟は動くようにして釣る方法もある。その他、岸からの投げ釣りも行うが、これはシロイカ、雑魚を釣るものである。

8) 突き漁

素潜り突き、イズコロシがある。イズコロシは夜間の突き漁であり、3人一組で海に行く。一人が石油灯をもって周囲を照らし、他の二人が魚を見つけたら突く。夜の大潮の時に出かける。実際、1973年10月29日の夜の大潮には3組が出かけていた。

9) ツノマタ採集

漁業権は8月1日から12月31日となっている。盆過ぎの8月中旬からツノマタ取りが始まる。10日間ほど毎日続く。この間の収入は多い人で30万円、平均して10～15万円となる。ツノマタは8月一杯が採取時期である。西表島のサバ崎付近の沖合で養殖している。工業用のオブラートの原料として売却されるのだという。ツノマタ取りが終わってから、町役場からの依頼で、オニヒトデ退治をする。このときの日当は3,500円/人、船代1,500円/船で、一日5,000円となる。この作業は約1週間続く。これと合わせて20～50万円の収入となる。ツノマタ採集は島の人々の重要な現金収入源の一つとなっていた。

10) アカイカ（アオリイカ）漁

アカイカは一斤あたり400円で売れ、一晩で60,000円ほどの稼ぎとなるときもある。非常に稼ぎがよい。9月にはいると、アカイカ釣りの時期となる。海が風いでいるとき、イカランプをもって夕方出かけ、一晩中釣る。たいてい、翌朝6時頃港に戻る。

1 1) 潜り漁

潜り漁をする人は5名いた。潜りをする人は釣りもする。追い込み漁の手伝いもする。

4. 女性達の海での活動：磯採集

女性達の磯採集はタコ獲りが目当てである。新暦の10月から3月にかけて、漁期となる。冬の大潮のとき、リーフで良く獲れ、4月頃からだんだん獲れなくなる。10月～2月には夜の潮に磯に行く。3月～4月になると、昼の潮にかわる。

旧暦の2月にはタコの豊漁のお礼をする行事がある。また、旧暦9月9日に「イモ祭り」の行事には、ハレの食事として赤いタコを供えるが、イモ（サツマイモ）の豊作祝いとともに、タコの豊漁の返礼の意味が込められる。

干潮時のリーフ上を歩くと、タコが主目的であり、タコの穴を探して歩く。フクラベ（モンガラカワハギ）、アバサー（ハリセンボン）、ウジ（ウナギ）などの魚も同じような穴にいるため、これらの魚も捕る。タコが獲れないときは、ギーラ（シャコガイ類）、ナーノミナ、ユナミナ（イモ貝の一種）など巻き貝類の採集に切り替える。何も採取しないで家に戻ることはない。1973年4月の大潮時期には次の事例が示すように、毎日のように、潮に合わせて磯採集に出かけていた。

事例1：1973年4月15日（旧暦3月13日）

昼間の潮が引くようになり、磯採集に出かける。著者と二人で「フナバルの浜」から「島仲の浜」までの間を磯あさりして廻る（10:30～14:00）。タコ一匹、ギーラ（シャコガイの一種）、ヤードウンブレ（クモ貝の一種？）、ヌスミナ、ナーノミナ、ビキミナ（高瀬貝の一種）、ミイーミナなどを採集する。タコは採集した場所で、頭を叩いて持ち帰る。ギーラ、ヤードウンブレは、貝殻が重いので中身のみを取り出して持ち帰る。ナーノミナは珊瑚礁を殻にして生活しており、貝のふたを素早くはずして身を獲る。旧暦3月3日の大潮のときに、大量に採集した後なので、収穫量は少なかった。この日は、東の方に3人、西の方にも1人が磯採集に出ており、合計で5名の女性がリーフに出ていた。

事例2：1973年4月16日

6人の女性がリーフに出かけていた。「屋良の浜」沖のリーフで、著者を含めて3人で磯採集をする（11:25～14:55）。タコを目当てにリーフを廻る。一人は、この日はタコが獲れず、魚とユナミナ（イモ貝の一種）を獲る。もう一人は、タコ2匹の収穫。この間、リーフ上を歩き続ける。

この日、3人の女性が船を頼んで、10:30に対岸の西表島アカパナリ（赤離れ）の方のリ

ーフに出かけ、14:30 に島に戻る。別の女性は東の浜からリーフを歩き、タコをとって帰る。

事例 3 : 1973 年 4 月 17 日 (旧暦 3 月 15 日)

7 名の女性がリーフに出かけていた。「屋良の浜」からは 3 名が磯採集に出かける (11:50 ~15:20) が、だれもタコをとれず、ミナ類のみとなった。東の「フナバルの浜」からは 4 名の女性が出かけ、4 名ともタコを獲って帰る。

事例 4 : 1973 年 4 月 18 日

この日は、3 名が屋良の浜よりリーフに出る (12:30~15:40)。一人はタコ 2 匹、魚、貝類の収穫、もう一人はタコ一匹、貝類、魚の収穫、3 人目は貝類のみの収穫であった。

たいてい、リーフではタコを目当てにタコの穴を探しながら歩くのであるが、タコ取りが獲れないときは、シャコ貝、イモ貝、高瀬貝などの貝類、潮間帯の魚などを捕る。

事例 5 : 1973 年 4 月 19 日

干潮時に合わせ、12 時半頃、船を頼み島の南方沖に広がるリーフであるタカビに (船で 20 分ぐらい沖)、5 名の女性が向かう。タコ、シャコ貝、イモ貝、ブダイなどの魚を獲る。このときは豊漁で、8 匹のタコを収穫した。15 時 30 分頃島に戻る。女性 2 人は屋良の浜からリーフに出た。

事例 6 : 1973 年 4 月 20 日

干潮時にあわせ、12 時 30 分ごろ、島の女性 4 名が、船で島の東南沖の赤離に広がるリーフ、ウブビ (大きい瀬) に向かい、16 時 30 分に島に戻る。各自タコ 2 - 3 匹を獲り、その他にシャコ貝、イモ貝等の貝類を採集した。

東の屋良の浜からシマビに 2 名が出る (13:10~16:10)。タコ、シャコ貝、ミナ類を獲る。他に、フナバルの浜からシマビでタコ取りをする女性が 2 名いた。

事例 7 : 1973 年 4 月 21 日

13 時 30 分頃から磯採集に出かける (13:30~16:30)。全員が島の周囲に広がるリーフ、シマビ (島の瀬) に歩いて向かう。東の屋良の浜からは 3 名の女性と 1 名の男性、西のフナバルの浜からは 4 名の女性が向かう。タコやイモ貝を獲る。

事例 8 : 1973 年 4 月 22 日 (旧暦 3 月 20 日)

島の周囲のリーフ、シマビに 4 名の女性が採集に出かける (14:00~18:00)。タコは獲れず、ミナ (イモ貝) が少し獲れただけである。旧暦 3 月の 15 日潮の磯採集 (イソパルン=

「海に行くか」の意、タコ取りを意味する）はこれで終わりとなる。

5. 1973年当時の魚などについての知識

島の人々は、いろいろな魚についての話を語ってくれた。断片的ではあるが、当時の島民の魚などについての知識を取り上げてみる。

「ニナブチ（未同定）は、時期が関係なく獲れる」

「フッチナイ（イソフエフキ）は、旧暦2月、3月頃が卵を産む時期で、このころ岸に寄ってくる。このため、この時期に多く獲れる」

「タマン（シモフリフエフキ）は、トゥジ（冬至）過ぎてから、良く釣れ始める。麦が色づいた頃からちょうど冬至に入り、これを目印にしていた。このころ、卵を産みに来るのである」

「ボラは、年中網に入る。釣る場合には、たまに釣れるだけである。釣りの時には、イラブッチャー（No. 81, 82, 83）の肝を餌にする」

「ミーバイ（ハタの類）は、旧暦の3-4月に卵を産みに来る」

「旧暦4、5月には、ミィースーベュー（シロダイ？フエダイ科）が獲れる」

「旧暦5、6月には、イラブー（エラブウナギ）が獲れる」

「アブルー（アマミフエフキなどのフエフキダイ科の魚）には時期がない」

「旧暦1月16日の16日際の頃になると、カツオが釣れ始める。旧暦3月から8月15日がカツオ漁の時期であり、最盛期は旧暦6月である。冬にもカツオの群れはいるが、この時期は餌となる魚が少ないし、カツオドリも見られないので、なかなか獲れない」

「カタカシ（ヒメジ類）の群れは、6-7月に黒島の近くに寄る」

「シツ（テンジクイサギ）、バァーバァー（イスズミ）には、時期がない」

「シロイカ（アオリイカ）の漁期は、旧暦7月から2月である」

「アカイカ（アオリイカ）の漁期は、旧暦6月から12月である」

「コブシメ（コウイカ）の漁期は、旧暦7月から2月である」

「タコは、旧暦2-3月が良く獲れる。旧暦7月頃から再び獲れ始める」

「ミズン（ミズスルル）の時期は、旧暦7月から10月である」

「パタラ（ヤマトミズン）には、時期が決まっていない」

「スク（アイゴ類の稚魚）は、旧暦4月末の2週間が漁期である」

「チン（キヂヌの仲間）は、冬至が過ぎた頃から岸に寄ってくる」

「アカイズ（「赤・魚」の意、未同定）は、時期がなく獲れる」

「スヌル（未同定）は、旧暦1月から2月の、ちょうど田植後の田草を取る時期に獲れ

る」

「アァーサ（海藻、ヒトエグサ？）は田草取りの時期から旧暦3月頃に採集する」

「チヌマルやフッチマチル（テングハギの類）。穴の中に入っていて、網にはなかなかかからなく、潜ってついて獲る。潮時に関係なく、釣れない。時期はなく、年中獲れるが潮時による。満潮時には下りてこなく、引き潮になってから下りてくる。チヌマルは驚いたら自分の穴にはいるため、この穴を目指して突きに行く」

「トカジャー（ニザダイ科クロハギの類）は、網で獲る。追い込みがよい。突きではなかなかつかない。これも時期は決まってない。臭みのある魚なのであまり獲らない。産後の女性には、これを食べると乳が良く出るので良いという。釣りもできない」

「アイゴの類は網で獲る。釣ったりすることもあるが、朝と晩にしか釣れない。栈橋がよい。ティルと呼ぶ竹製の籠で、中に餌（サツマイモのもち）をいれて、これを沈めておいて獲る。この籠はアイゴを獲るためにだけ使う」

「針金製のティルではカツオやイカのはらわたを餌にして、アカジナ（ニセスジハタ）、フッチナギ（イソフエフキ）、タマン（ハマフエフキ）、ミーバイ（アオノメハタ）などを獲る」

「ウジ（ウナギ）には種類があり、アミフリウジ（体に斑点模様がある）、アカウジ、シロウジ、タクタベウジなどがある」

「タコの穴は決まっており、獲ってもまた、そこに別のタコが入る。だから、タコの穴の場所を覚えていることが大切である。この穴は他人には絶対に教えない。タコをよく獲れる時期は11月から4月であり、とくに冬のイザリ（夜間磯採集）にはタコが沢山獲れる。夏にはタコがあまり岸に寄らなくなる」

6. 魚の方言名にみる変化

表2に1973年に二人の男性から聞き取った魚の方名と2005年の調査で高橋そよが聞き取った方言名（前章に命名法としてまとめている）とを対照させてみた。方名を聞き取る際に参照とした魚類図鑑が1973年と2005年の調査とでは異なるため、参照図鑑の相違により少しは結果が影響されているといえなくもない。1973年には、『原色沖縄の魚』（具志堅、1972）を、2004年には『沖縄の魚図鑑』（横井、1989）を用いた。しかし、ここでは参照図鑑の違いによる大きな影響はなかったものとみなすことにする。

1973年には、図鑑に記されている魚の中で方名を聞き取ることができたものは167種であった。これらの方名の中には、異なる種類に一つの方名を対応させるものも多い。類別の最小単位という個別名（山田、1984）のレベルで考えると、1973年のMDでは71タイプ、1973年のMSでは80タイプ、2005年では55タイプに区別していたということになる。

2005年に聞き取った個別名のなかで、1973年の聞き取りと大きく異なるものは、スズメ

ダイ科のモンズズメダイ（表2のNo.9）に対し、「スズメダイ」と和名で答え、ベラ科のメガネモチオウオ（No.66）に「チバルカミ」、ロクセンフエダイ（No.165）に「ビタロー」と答えた例、ニジョウサバ（No.249）に「クサラー」の方名を採集していたのに対し、ツムブリ（アジ科）にこの名があてられた例の4例のみであった。2005年に聞き取った個別名の93%は1973年当時と同じ個別名であった。

1973年と2005年との魚の方言名にみる大きな違いは、特定の魚についての個別名レベルでの数の減少にあるといえる。この数の減少は、キントキダイ科、テンジクダイ科、メギス科、オニオコゼ科、タチウオ、ヒラメ類、ウミノシタ類、イソギンポ科などの魚が命名されないこと、ハタ科、カジキ類、サメ類などにおいて、命名上の細かい区別がなされていないことによっている。これらの魚の多くは、水深のより深いところに住む岩礁性の魚、内湾性のもの、あるいは外洋性のものであり、命名上にみられた違いは漁法の違いに大きく関わるということがいえる。現在も漁撈活動上利用する珊瑚礁海域の魚については方言名が伝承されていることが伺える。

7. おわりに

今日、どの社会も現代化の中で変化することを余儀なくされるのが現状といえる。変化のただ中で、伝統的知の体系は消滅あるいは変貌の危機にさらされている。ここで取り上げたのは、自然に関する知識のうち魚名というごく一部に過ぎない。1973年と2005年とで、明らかに魚の個別名の数という点では大きく減少しており、伝統的知の体系が衰亡しつつあるかのようにみえる。

しかし、現在細々ながらも続けられる漁撈活動によって獲れる魚については、魚の方言名が根付いていることが明らかとなった。ここでの事例は、伝統的知の体系の継承には活動が続けられることが大きく関わることを示唆しているといえよう。

引用文献

具志堅宗弘 1972『原色沖縄の魚』那覇、沖縄水産協会事務局長。

森口裕 1985『子乞い』東京、マルジュ社。

山田孝子 1984「沖縄県、八重山地方における植物の命名、分類、利用—比較民族植物学的考察」『リトルワールド研究報告』7:25-235。

横井謙典 1989『沖縄の魚図鑑』宜野湾、沖縄出版。

表2 魚の鳩間島方名

科名 和名	No.	方名 (MD: 1973)	方名 (MS: 1973)	方名 (2005)
スズメダイ科				
ミスジリュウキュウスズメ	1	ヒイカーグワー	オオビカー	ヒカグワアー
ルリスズメ	2	ヒイカーグワー		
レモンズズメ	3	ヒイカーグワー		
モンズズメダイ	9	ヒイカーグワー		スズメダイ
ロクセンズズメダイ	11	ヒイカーグワー		ヒカグワアー
チョウチョウウオ科				
ヤリカタギ	13	カサヌパー	カサンパ	カサンパー
シチセンチョウショウウオ	14	カサヌパー	カサンパ	カサンパー
ハナグロチョウチョウウオ	15	カサヌパー	カサンパ	
カガミチョウチョウウオ	16	カサヌパー	カサンパ	カサンパー
ミカドチョウチョウウオ	17	カサヌパー	カサンパ	カサンパー
オニハタタテダイ	18	カサヌパー	カサンパ	カサンパー
ロクセンヤッコダイ	23	カサヌパー	カサンパ	
ニザダイ科				
メガネニザ	25	クスク	トカジャー	
クログチニザ	27	クスク	クスクン	クスクン
クロモンツキ	28		クスクン	
カンランハギ	29		トカジャー	
クロハギの仲間 <i>Acanthurus</i>	30		トカジャー	トカジャー
sp.				
ミヤコテング	32		アカシヌマール	アカシヌマール
テングハギ	33	ツノマル	シヌマール	シルマール
アイゴ科				
ヒメアイゴ	37	アイ	アカビイーカー	エーグワアー
ハナアイゴ	41	アイ	アオイイズ、オンレー	カーエー、オンデー
ジャバアイゴ	42	オンレー		
ブチアイゴ	44	アイ	マテー	
ゴマアイゴ	45	カーエー	カーイー	カーエー
モンガラカワハギ科				
モンガラカワハギ	46		フクラベアー	フクラベ
タスキモンガラ	47	フクラベアー		
イソモンガラ	49	キチナー		ギチナー
キヘリモンガラ	50	ギチナー	グンザン、ギッチナー	ギチナー
ナメモンガラ	51	ギチナー		
カワハギ科				
ゴマウマヅラ	52		カーガー	
ウスバハギ	53	ギチナー		
ソウシハギ	54		センスルー	(一)
ハクセイハギ				センスリイズ
ベラ科				
キヌベラ	59		クサベアー	
ミツバモチノウオ	65	ヒロサ		(一)
メガネモチノウオ	66	ヒロサ		チバルカミ
クサビベラ	71	マクブ	マキャブ	
シロクロベラ	72	マクブ		イラブチの仲間
ブダイ科				
イロブダイ(雄)	73	アーガサアー	アーカサアー	アーカーサーイズ
イロブダイ(雌)	74	アーガチャー	ミーハガアー	アーカーサーイズ
カンムリブダイ	75		クジラフタイ	イラブチ
ブダイの仲間 <i>Scarus vetula</i>	76	ブーダー	ボーダ	ボーダ
Bloch et Schneider				
ヒブダイ	77	イラブッチャー	アーガアイ	アーガエー
イチモンジブダイ	79		イラブチャー	イラブチ
ナンヨウブダイ	80	オオバチャー	オーバチャー	ゲンナーイズ
スジブダイ	81		イラブチャー	イラブチ
オオモンハゲブダイ	82		イラブチャー	イラブチ
ブダイの仲間 <i>Scarus</i>	83		イラブチャー	?
<i>rhoduropterus</i> Bleeker				
ハゲブダイ	84	アオイラブッチャー		イラブチ
イサキ科				
チョウチョウコショウダイ	85	アオクーレー	クーレ	クーレーイズ
ムスジコショウダイ	86		クーレ	クーレーイズ
アヤコショウダイ	87	クーレー	クーレ	クーレーイズ
ミゾイサキ				チン
フエダイ科				
クマササハママロ	91	グルクン		マルグルクン
タカサゴ	92	グルクン		マルグルクン
ウメイロモドキ	93	グルクン		マルグルクン
ササムロ	94	グルクン	ムレジ	マルグルクン
ユメウメイロ	96	グルクン	ヒラグルクン	ヒラグルクン

科名 和名	No.	方名 (MD: 1973)	方名 (MS: 1973)	方名 (2005)
イトウダイ科				
アカマツカサの仲間 <i>Myripristis</i> sp.	97	アカメンタマ		パチナーイズ、ミシタマ
ウロコマツカサ	98	グラグラ		
ホシエビス	100	アカメンタマ		
スミツキエビス	101	アカメンタマ	アカメンタマ	
トガリエビス	103	アカバチナー	パッチナー	パチナー
キントキダイ科				
オキナワクマダイ	104	アカメンタマ		
クマダイ	105	アカメンタマ		
キントキダイの仲間 <i>Priacanthus cruentatus</i>	106	アカメンタマ		
Lacepede				
ホウセンキントキ	107	アカメンタマ		(一)
チカメキントキ	108	ミマザア、アカメンタ		(一)
テンジクダイ科				
テンジクダイの仲間 <i>Apogon</i> <i>nubilis</i> Garman	109		ウミ	
ヒトスジシモチ	110		シロミ	
メギス科				
オキナワメギス	113	アカゲー	アカゲー	
ハタ科				
ホソスジナミダテンジクダイ	125	アカジナー	アカジナー	?
ニセスジハタ	126	アカジナー	アカジン	
ユカタハタの仲間 <i>Cephalopholis rogaa</i> Forskål	127	クルミーバアイ		?
アオノメハタ	129	ミーバアイ		ミーバアイ
バラハタ	133	アカバタミーバアイ	アカジン	アカナー
マダラハタ	141		ユダヤミーバアイ	ミーバアイ
イスズミ科				
テンジクイサギ	147	シツ	シツ	シューイズ
イスズミ	148	バアーバアー	バアーバアー	
オニオコゼ科				
オニダルマオコゼ	153	アバイズ	アバイズ	(一)
ヒメオニオコゼ	154		シイシイイズ、フツチナシ	
ウツボ科				
ウツボの仲間 <i>Lycodontis</i> <i>nudivomer</i> Günther	155	アカウナギ	アカウジ	
ヒメジ科				
ミナミヒメジ	157	カタカシ		
インドヒメジ	158	カタカシ	ジンバアー	
オウゴンヒメジ	159	カタカシ		
マルクチヒメジ	160	カタカシ		
コバンヒメジ	161	カタカシ		カタカシイズ
ホウライヒメジ	162	フールヤー		カタカシイズ
モンツキアカヒメジ	163		カタキシ	フーリヤー
リュウキュウアカヒメジ	164		アカムル	カタカシイズ
フエダイ科				
ロクセンフエダイ	165	スーベエ	スーベエ、ヤマトスー	ビタロー
キンセンフエダイ	166	スーベエ		
ヒメフエダイ	173	ミイミイジャー	ミイマジー	ミシジャー、ミマージャー
フエダイ	174		イヌバアー	
フエフキダイ科				
イトフエフキ	181	ムルー	ムルー	(一)
キツネフエフキ	182	アオムル		(一)
イソフエフキ	184	クチナイ	クツチナイ	フチナイ、クチナギ
シモフリフエフキ	185		タマン	フチナイ
ハマフエフキ	186	タマン		タマン
フエフキダイの仲間 <i>Lethrinus</i> sp.	187	タマン		
アマクチビ	188	タマン		(一)
ムネアカクチビ?				アブル
ホオアカクチビ?				ムル
アマミフエフキ	189		アブルー	
ヨコシマフエフキ	191		アブルー	
ヨコシマクロダイ	193	ダルマー	ダルマー	ダルマイズ
シロダイ	195	シルイズ	スーイズ	シルユー
ノコギリダイ	198	ムチイユ	ムチイズ	モチイズ、ムチンズ
タイ科				
キチヌの仲間 <i>Acanthopagrus</i> sp.	204		チン	
ヘダイ				チン
フエダイ科				
ハマダイ	217	アカマチ	アカマチ	アカマチ

科名 和名	No.	方名 (MD: 1973)	方名 (MS: 1973)	方名 (2005)
キンメヒメダイ	219	ミーマチ		
オオヒメ	220	マーマチ		(一)
アオチビキ	223		オオマチー	(一)
サバ科				
ゴマサバ	247		グルクン	(一)
ニジョウサバ	249	クサラー		
イソマグロ	250	トカキン		(一)
カマスサワラ	251	サアーラ	サアーラ	サーラ
ヨコシマサワラ	252	ヒラサアーラ		
カマス科				
オニカマス	253	カマサアー	カマサー	カマサー
ヤマトカマス	256	マルガマサアー		カマサー
アジ科				
メアジ	258	ガツン		(一)
マルヒラアジ	261	ガアーラ	ガアーラ	ガーラ
ヨロイアジ	262	ヒラガアーラ		
イトヒラアジ	263	ガアーラ		
ヨロイアジの仲間 <i>Caranx fulvogattatus</i> Forskål	264	クロガアーラ	カマジ	?
カスミアジ	265	ガアーラ		ガーラ
シマアジ	266	ガアーラ		(一)
カイワリの仲間 <i>Caranx</i> sp.	267	ガアーラ		
インドカイワリ	268	ガアーラ		
カイワリの仲間 <i>Caranx speciosus</i> Forskål	269	ガアーラ		?
イトヒキアジの仲間 <i>Alectis major</i> Bloch	270	ガアーラ		?
ツムブリ				クサラー
シマイサキ科				
コトヒキ	281		アヤマサー	アヤマーサ、ガチマヤー
ハモ科				
ハモ	287	ウジ	ウジィ	
タチウオ科				
タチウオ	289	タクウジ		(一)
ヒラメ科				
モンダルマガレイ	298	ヒラメ	ヒラメ	(一)
ササウミノシタ科				
アマミウシノシタ	299	ヒラメ	ヒラメ	(一)
イソギンボ科				
ニセカエルウオ	303		ピョンピョン	
ボラ科				
ヒメメナダ	305	サクラアー		
フウライボラ	306		ブーラ	ブラ
ハコフグ科				
ハコフグ	309		アツパイズ (枕の魚)	マツパイズ、ブーナ
コンゴウフグ	310	マツファイズ	アツパイズ	
ハリセンボン科				
イシガキフグ	312	アバサアー		
ニシン科				
ヤマトミズン	314	パアダラ		ミジュン
ミズスルル	315	ミズヌ		(一)
トビウオ科				
ツマリトビウオ	317	トウビイズ	トウビィイズ	トビイズ
アヤトビウオ	318	トウビイズ		トビイズ
アカトビの仲間 <i>Cheilopogon spilopterus</i> C. et V.	319	トウビイズ		?
オオメナットビ	320	トウビイズ		
サヨリ科				
マルサヨリ	323		パレーザアー	
ダツ科				
ヒメダツ	326	シジ	シジ	シジャーイズ
タイワンダツ	327	シジ		
オキザヨリ	328	シジ		シジャーイズ
テンジクダツ	329	シジ		
ハマダツ	330	トウシジ		
サバ科				
クロマグロ	335		ウシスビ	
カツオ	331		カツイズ	カツイズ
マカジキ科				
バショウカジキ	339		バレン	
メカジキ科				
メカジキ	344		カジキ	
アカエイ科				
ツバクロエイ	346		カマンター、エイトウン	?カマンタ

科名 和名	No.	方名 (MD: 1973)	方名 (MS: 1973)	方名 (2005)
イトマキエイ科				
イトマキエイ	350		ガーマ	
オナガザメ科				
オナガザメ	357		イエーイジ	
シュモクザメ科				
シュモクザメ(シロシュモクザメ)	358	イーパアイサバ	イーパアイサバ	
ヨゴレ	359	ウーバアーニ	ウーパニ、ミンダァナー	
ウバザメ科				
ウバザメ	365	ウーバアーニ		
ジンベイザメ科				
ジンベイザメ	366	イッチョウ	イッチョウサバ	サバ

注: 魚名については、『原色沖縄の魚』(具志堅、1972)を参照した。科の配列は具志堅(1972)の記載順。
No.は具志堅(1972)の図版の番号である。

Part II. 波照間島における神信仰の動態

豊年祭（プーリン）の実施にみる現代性 —2003 年の事例から—

山田 孝子

1. はじめに

波照間島の御嶽を中心とする神行事については、これまでに数多くの研究報告で取り上げられてきた（宮良、1972；畠山、1982；仲底、1998a, 1998b；中鉢、2002；アウエハント、1971[1967], 2004[1985]；住谷・クライナー、1977）。宮良(1977)とアウエハント（2004[1985]）は、祭司組織、年中行事全般について非常に詳しく報告しているが、畠山(1982)、仲底(1998a)はとくにプーリン、アミジュワーについて述べたものとなっている。秘儀とされてきた神行事の性格のうえに、御嶽ごとに独自に神行事を実施してきた経緯から、調査年やどの集落から主な情報を得ているかによって、これら報告には異なる点も認められる。いずれにしても、神行事の歴史、構造、実施方法などについて、多くの点が明らかにされてきたといえる。

生業基盤が大きく変化し、生活そのものも現代化した状況の中で、歴史性を背負った御嶽を中心とする伝統的の神行事はいかに実施され続けるのであろうか。ここでは、観察事例としては、2003 年のプーリンからアミジュワーに至る一連の行事を取り上げる。1962 年以前は、ミヨウクツェ、カンパナ、プーリンが連続して実施されたあと、20 日後にアミジュワー、アサヨイが行われたという（アウエハント、2004: 386）。神行事は五つの集落において同時進行で実施される。このため、すべての集落で行われる行事を観察することは難しく、とくに前集落で実施された行事に焦点を当てて観察した¹。観察にあたってはビデオ撮影を行ったが、このビデオ映像をもとに、行事の進行状況の再現を試み、神行事の実践にみる現代性について考えてみることにしたい。

2. 神行事とこれを支える集落の体制

波照間島には、富嘉（外と一般に表記される）、名石、南、前、北の 5 集落があり、それぞれの集落ごとに、内の御嶽（ウツヌワー）があり、内の御嶽は野原の御嶽（ピティヌワー）の遙拝所といわれる（宮良、1972: 89）。島には、3つのピティヌワーと5つのウツヌワーがあり、「五山三山（イチヤマ ミーヤマ）」と呼ばれるが、両者の関係は次のようになっている（表1）。神行事は集落ごと、御嶽ごとに実施され、野原の御嶽での祈願がある際には、同じピティヌワーを拝む御嶽の司は共同して祈願を行う。

¹ ビデオ撮影は京都大学大学院人間・環境学研究科院生小西賢吾氏が行い、研究協力者高橋そよ氏が活動記録の整理を行った。

表 1. 波照間の御嶽間の関係

ピティヌワー(野原の御嶽)	ウツヌワー(内の御嶽)	集落名	メーパナチ
マートゥル・ワー (真徳利御嶽)	アースク・ワー (阿底御嶽)	外集落	
アバティ・ワー (阿幸俣御嶽)	ブスク・ワー (大底御嶽)	前集落	ケイシムリ・ワー
	ブイシ・ワー (大石御嶽)	名石集落	
シィサバル・ワー (白郎原御嶽)	ミシュク・ワー (美底御嶽)	北集落	
	アラントゥ・ワー (新本御嶽)	南集落	

これらの御嶽は村落祭祀の中心となるが、伝統的な祭祀の担い手について簡単に触れておきたい。御嶽ごとに祭司をつとめるツカサ（神司、女性）、パナヌファ（御嶽に「加入」している者）が存在する。パナヌファは自分の集落の御嶽のパナヌファになるとは限らなく、また、女性に限られるのでもなく、少数であるが男性の場合もある。1965 年当時、島全体で 351 人のパナヌファが存在し、そのうち男性のパナヌファは 35.6%を占めていたという（アウエハント、2004[1985]: 305-306）。この数値は現在の状況からみて想像できないような数であるが、現在のツカサが「昔の神行事は盛大で、楽しかった」と語るように、当時は多くの島民が参加しての神行事が行われていたことを裏付けるものである。

神司やパナヌファの地位継承のシステムに関しては、すでに詳しく報告されており（宮良、1972；アウエハント、2004[1985]）、これについては立ち入らない。神司とパナヌファの年齢制限は、理念的には 13 才から 61 才であるとされてきた（アウエハント、2004[1985]: 304；宮良、1972: 98）。しかし、現在ではツカサもパナヌファも引退時期が延長され、73 才となっている。

7 才から 73 才の集落の居住者は当該集落の御嶽のヤマニンジュ（「ヤマの人々」の意、氏子）²となっていた。ヤマニンジュは自分の御嶽に対し、年 2 回行われるカンパナ（神の米）という祭祀の折には、グソーミ（五勺米）と呼ばれる米を御嶽に奉納するという義務を負っていた。さらに、ヤマニンジュのうち 15 才から 50 才までの男女は、とくにフダニン（生産人）と呼ばれる。フダニンは人頭税制時代において課税の義務を負っていたものであるが（宮良、1972: 33-34；アウエハント、2004[1985]:136）、集落をあげての神行事には自分の御嶽への労働の提供などが義務づけられてきたものである。たとえば、プーリン（豊年祭）のときには、フダニンは次のようにさまざまな役を分担し合ったというが（宮良、1972: 110-111）、現在でも、これらの役目は集落の住民で分担され、プーリンが実施されている。

² ただし、当該集落居住者のうち、島民の血を引く者、並びに島民との婚姻、縁組みなどを通じて居住定着している者が加入できるものである。

- 1) イショウブサ（漁をする人）といい、行事に必要な海の幸を漁する係。彼らが漁をする漁場は集落ごとに決められている。
- 2) サキブサー（酒を集める人）といい、男性フダニン全員からグシン（泡盛）を徴収する係。
- 3) ポツツアポー（料理人）といい、御嶽の境内のゾーレー（料理場）で、必要な料理、食べ物の準備係。
- 4) ミシイブサー（神酒）といい、フダニンから徴収した米をもとに発酵させた神酒を造る係。
- 5) コーシアータ（モチ）といい、女性がその任に当たるが、菓子（サニン餅）、マンズーという和え物を作る係。

また、各集落には神行事を補佐する役職がある。ムラブサーといい、男性が割り当てられるが、行事の折にヤマニンジュである住民から決まった量のお米、線香などを集める役である。カマガーまたはカマンガといい、御嶽の境内の手入れなどの補佐をする男性神役もある。

現在の島の自治組織をみると、代表は公民館長であり、公民館長、公民館副館長は総会で投票によって決定され、任期は1期2年とされる。その下に、総務、文化部長、事業部長、社会厚生部長などの役職があり、公民館の役員は13名となっている。各集落では、総務が選ばれ、集落の代表となる。フダニンの年令制限は時代に応じて変わってきた。1966年当時すでに55才まで上がっていたが（アウエハント、2004[1985]: 201）、現在では正式なフダニンは20才から65才までとされ、集落での行事等に必要な経費を全面的に負担することになっている。66才から70才まではフダニンの1/2の負担とされ、73才以上はあらゆる神行事からの免除の対象となるという。

波照間島の集落全体の神行事の日程は、年2回、公民館の13名の役員、各集落の総務（代表）、ツカサ、パナヌファが公民館に集まり、干支をもとに決められる。年間の行事はシチ（節祭り）に始まり、プーリン、アミジュワー、トゥマニゲで終了することになっており、公民館長の改選もプーリン・アミジュワー後と決まっている。各行事が実施されるべき干支は決まっており、ほぼ自動的に日程が決まるといえるが、とくに、プーリンの日程については干支の先か、後かのどちらの日程を取るのかが相談されるという。11月頃の「つちのとうし」の日に開かれるウシヌバンユレにおいて、年度上期の行事日程が決められ、4月頃の「つのととり」の日に開かれるトリヌバンユレにおいて、年度下期の行事日程が決められる。このようにして決定された行事日程は日程表にして各家庭に配られることになっている。

公民館の役員は行事日程を決定するのに関わるのみであり、公民館としての神行事への関わりはプーリン翌日のアサユイの日の夕方に「巻踊り」を主催するのみである。神行事は各御嶽を中心として実施されるものであり、行事の実施は当該集落の自治組織に任せられ、それぞれで予算を立てて行われてきており、集落ごとに運営の仕方は異なるという。たと

えば、南集落では、以前は年間予算を立てて、各戸あてに負担額を決めて費用を徴収していたが、2-3年前から予算を立てていないという。その代わり、集落の共同売店の収益金から行事の費用を捻出するようになってきているという。また、神行事への参加は、集落内の「フダニン（生産人）」の義務に等しい負担すべきものとなっており、参加できない場合には負担金を払うという決まりになっている。

各家庭に配布される神行事日程表を見ると、年度上期には22回、年度下期には25回の神行事が組まれている（表2a, 表2b）。これらの表をみると、神行事は、1964-65年に実施された年中儀礼サイクル（アウエハント、2004[1985]）、1970-71年の年中儀礼サイクル（宮良、1972）とほとんど変わっていないことが分かる。しかし、1964-65年当時と変わっている点がいくつかあることが分かる。3日間ずつ実施されていたアミニゲエ（雨願い）が1日間のみの行事となり、3日間、5日間、7日間として年に3回実施されていたクムリ（籠もり）がそれぞれ1日となっている。また、年間の行事日程は三回行われるバンユレにおいて決定されていたが、現在では、二回目のミニンバンは省略され、ウシヌバンユレとトリヌバンユレの二回に分けて行われるようになっている。行事の実施には、簡略化がみられるが、一部の行事がトゥニムトゥ（伝説上の宗家と結びつく本家）のみにより実施されるとはいえ、年間を通じて47回に及ぶ神行事が集落ごとに実施されていることになる。

このように、神行事の実施が維持されている反面、現在ではツカサ、パナヌファのなり手がいないという深刻な問題を抱えるようになっている。かつて、ツカサは50才になったら後継者を決めて、61才になって退任するまで、後継のツカサに神願いに関するすべてを教えたという（宮良、1972: 98）。ツカサの責務は重く、一人前のツカサとなるには、御嶽のウヤン（神）に唱える祈詞であるヤマヌパンを始め、行事ごとの祈詞や歌、供物の供え方からミジィマチ（水祀り）といい、御嶽の敷地内や巡行途中での決められた場所での水の供えに至るさまざまな行事の所作など、修得すべきことが非常に多い。

このような重い責務のうえに、日々の生活のなかで拘束される時間も多く、ツカサやパナヌファの退任年齢を73才に引きあげたにもかかわらず、島民の高齢化のなかで、若い後継者をみつけることは非常に厳しいというのが現状である。たとえば、外集落の御嶽アースクワーでは、ツカサが2003年に73才を迎え、その年の豊年祭をもって退任となったが、後任のツカサが決まらず、数人いるのみとなったパナヌファの一人が代理をつとめている。南集落のアラントゥワーでも2003年にすでに後任のツカサが決まらず、パナヌファの女性がツカサの代役をつとめていた。名石集落では、2005年にはツカサもパナヌファもいない状態となっている。前集落のブスクワーのツカサは2004年のプーリンをもって退任となり、後任がいない状態が続く。2005年現在、集落の御嶽でツカサがいるのは北集落のミシユクワー、ブスクワーのメーパナチであるケーシムリワーのみとなる。

表 2a 上期に実施される神行事

行事名	日取り	平成 16 年度	1970～71 (宮良、1972)	1964～1965 (アウエハント、2004)
ナータビ	かのえとら		ツクルニカ ^イ 1970.11.06	
雨ニゲ 朝ニゲ	つちのえいぬ	2003.11.21	アミニゲ ^ー 1970.11.14	アミニゲ ^エ Ⅱ 1964.12.15 (3 日間)
雨ニゲ スニゲ	かのとうし	2003.11.24		スニゲ ^エ Ⅰ 1964.12.18 (2 日間)
ナータビ (外村)	みづのえね	2003.12.05	ツクルニカ ^イ 1970.11.28	
3 日クムリ	かのとり	2003.12.14	三日クムル 1970.12.06	ミ ^ー カ ^ク ムリ 1965.01.07 (3 日間)
ミニンバン	つちのとみ	2003.12.22	バンユーレー 1970.12.14	バンユレ ^エ Ⅱ 1965.01.15
ブタービ	つちのえとら	2003.12.31	ブ ^タ ビツクルニカ ^イ 1970.12.24	シクリニゲ ^エ Ⅲ 1965.01.24
トシイヌブリ	みづのとひつ じ	2004.01.05	ヌブリ 1970.12.28	ヌブリ ^イ Ⅱ 1965.01.28
カナムヌソージ	かのえいぬ	2004.02.01	イナスビ ^ー 1971.01.25	カンナムヌソージ ^ー Ⅱ 1965.02.25
ヌブリ	かのとみ	2004.02.02	ヌブリ 1971.01.26	ヌブリ ^イ Ⅲ 1965.02.26
アラブリ	みづのえね	2004.02.03	ヒブリ 1971.01.27	ヒブリ ^イ Ⅰ 1965.02.27
5 日クムリ	かのとり	2004.02.12	五日クムリ 1971.02.05	イシイカクムリ 1965.03.08 (5 日間)
2 月ミヨウクチ エ	みづのえさる	2004.02.23	ミヤクツアイ 1971.02.16	ミヤクツエ ^ー Ⅱ 1965.03.19
神パナ (カンパナ)	みづのととり	2004.02.24	カンパナ 1971.02.17	カンパナⅡ 1965.03.20
2 月シマフサラ	みづのとひつ じ	2004.03.05	シマフサラー 1971.02.27	シマフサラⅡ 1965.03.30
2 月トマニゲ	つちのとうし	2004.03.11	トウマニゲ ^ー 1971.03.05	トウマニゲ ^エ Ⅰ 1965.04.05
ブサシマシ	かのえとら	2004.03.12	ブサシマツ 1971.05.05	
雨ニゲ、朝ニゲ	かのえね	2004.03.22	アミニゲ ^ー 1971.03.16	アミニゲ ^エ Ⅲ 1965.04.14 (3 日間)
	かのとうし			スニゲ ^エ Ⅱ 1965.04.17 (2 日間)
トリヌバンユレ	つちのととり	2004.03.31	バンユーレー 1971.03.25	バンユレ ^エ Ⅲ 1965.04.25
トピムヌニゲ	かのとみ	2004.04.02	トウピ ^ー イムヌニゲ ^ー 971.03.27	
ヌブリ (外村)	かのとみ	2004.04.02	ヌブリ 1971.03.27	ヌブリ ^イ Ⅳ 1965.04.27
ナーブリ	みづのえね	2004.04.03	ヒブリ 1971.03.28	ヒブリ ^イ Ⅱ (ナーブリ ^イ) 1965.04.28

表 2b 下期に実施される神行事

行事名	日取り	平成 16 年度	1970～71 (宮良、1972)	1964～1965 (アウエハント、2004)
スクマンマッシ	かのととり	2004.04.12	スクママス 1971.06.05	シイクマン(プ [°] リンタマ) 1965.05.07
7 日クムリ	かのととり	2004.04.12	7 日クムル 1971.04.04	ナンカ [°] クムリ 1965.05.07 (7 日間)
カナムヌソーシ	かのととり	2004.04.12	イナアスビ [°] 1971.04.04	カンナムヌソーシ [°] III 1965.05.07
シビランカン	みづのととり	2004.04.24	カンヌフニアギ [°] 1971.06.17	シビ [°] ランカン 1965.05.19
ヌブリ	かのえたつ	2004.05.01	ヌブリ 1971.04.25	ヌブリ [°] イ V 1965.05.26
ブリブチ	みづのえうま	2004.05.03	ヒブリ 1971.04.27	ヒブリ [°] イ III 1965.05.28
シマフサラ	みづのとひつじ	2004.05.04	シマフサラ [°] 1971.04.28	シマフサラ III 1965.05.29
ミヨウクチェ	つちのえね	2004.05.09	ミヤクツアイ 1971.07.03	ミヤクツエ III 1965.06.03
神パナ	つちのとうし	2004.05.10	カンパ [°] ナ 1971.07.03	カンパ [°] ナ III 1965.06.04
プーリン	かのえとら	2004.05.11	プーリン* 1971.07.04	プーリン 1965.05.06 (2 日間)
アサヨイ	かのとう	2004.05.12		
アミジュワー	みづのえたつ	2004.05.13	アミジュワー 1971.07.05	アミジ [°] ワー 1965.06.07 (2 日間)
アサヨエニゲ	みづのとみ	2004.05.14		
トマニゲ	つちのとみ	2004.05.20	トウマニゲ [°] 1971.07.13	トウマニゲ [°] エ II 1965.06.14
シチ入り	つちのえいぬ	2004.09.16	シン 1970.09.15	シイシン 1964.10.16 (3 日間)
シチ祭 舟コギ	かのえね	2004.09.18		
カナムヌソーシ	かのえいぬ	2004.09.28	イナアスビ [°] 1970.09.27	カンナムヌソーシ [°] I 1964.10.28
年始ヌブリ	かのとみ	2004.09.29	ヌブリ 1970.09.28	ヌブリ [°] イ I 1964.10.29
ミヨウクチェ	みづのえさる	2004.10.20	ミヤクツアイ 1970.10.19	ミヤクツエ I 1964.11.19
神パナ	みづのととり	2004.10.21	カンパ [°] ナ 1970.10.20	カンパ [°] ナ I 1964.11.29
アラタービ	つちのえとら	2004.10.26	ツクルニガイ [°] 1970.10.25	アラタービ [°] 1964.11.25
シマフサラ	みづのとひつじ	2004.10.31	シマフサラ [°] 1970.10.27	シイマフサラ I 1964.11.30
雨ニゲ 朝ニゲ	つちのえね	2004.11.05	アミニゲ [°] 1970.11.04	アミニゲ [°] エ I 1964.12.05 (3 日間)
ウシヌバンユレ	つちのとうし	2004.11.06	バンユレー [°] 1970.11.05	バンユレエ I 1964.12.06
ナータビ	かのえとら	2004.11.07	ツクルニガイ [°] 1970.11.06	ナータービ [°] 1964.12.29

*アサヨイは 4 日目に

3. 2003 年のプーリン（豊年祭）

では、こうした神行事の実施をめぐる厳しい現状の中で、プーリンを中心とした一連の神行事はどのように調整され、実施されているのであろうか。2003 年のプーリンは干支をあと取りしたために、例年であれば5月頃に実施されるところが、7月の実施となり、表3にまとめた日程で実施された。5日間の一連の行事について、活動順序に沿ってながめながら、現代における神行事の維持と実践について考えてみることにしたい。

2003 年のプーリンでは、南集落のアラントゥワーではツカサがいなく、パナヌファが代理として行事の祭司となっていた。今回参与観察の対象としたのは、主として前集落のブスクワーで行われる一連の行事であり、ブスクワーのツカサ A³の一日の活動を中心にして述べていく。

表3. 2003 年のプーリン（豊年祭）の実施日程

月日	日取り	行事名	備考（担い手等）
7月14日	つちのえ ね	ミヨウクツェ	島民、ウタキの掃除
7月15日	つちのと うし	カンパナ	ムラブサー、ツカサ
7月16日	かのえ とら	プーリン	ムラブサー、ツカサ
7月17日	かのと う	アサヨイ	ムラブサー、ツカサ。プーリン最終日、カマガーの交代式
7月18日	みずのえ たつ	アミジュワー	
7月19日	みずのと み	アサヨイユーニゲー	

1) 2004 年7月14日 ミヨウクツェ

カンミチィ（神の道）を掃除する日である。この日のみは、男性を含めて一般の人々がピティヌワーに入ることができる。5つの集落は、1) 外、2) 前、名石、3) 南、北の3つにわかれて実施する。

ブスクワーのツカサ A の家で：

8:40 ケーシムリワーのツカサ B がカマバリ（ひょうたん）をもち、やって来る。

名石集落のブイシワーのツカ C が、水をもつ助手⁴Dとともに来る。これにより、全

³ 昭和7年生まれであり、2004年のプーリンをもって引退の予定である。

⁴ 本来は、パナヌファがツカサの助手として御嶽の井戸から汲んだ水をヒョウタンに入れてもつ。この場合、ブイシワーのパナヌファが現在島に在住していないので、ツカサが助手役を頼んだ、パナヌファではない名石集落の住人である。

員そろって、前集落第1のトゥニムトゥ家（親盛家）に移動。

トゥニムトゥ家で：

- 8:49 トゥニムトゥのブナリ（当主の姉妹）がきたことで、ツカサはゆったりとした着物（ツカサ、パナヌファとしての神衣装）を羽織る。ツカサAとBが台所のピナカン（火の神）に祈りを捧げる。
- 8:51 ブザシケー（一番座の床の間）の香炉の前で、ブザシケーのウヤン（神）を拝む⁵。ツカサAとBが並んで座り、その後ろにツカサCと助手Dが座る。「カンミチィ（神の道）を清掃しますよう、カンパナですよ」と拝むのであるという。

ブスクワーへ移動：

- 8:58 ツカサA、B、Cはブスクワーのマソーミ（御嶽内の聖域）の掃除をし、拝んだあと、マソーミの入り口、前、東側、ブスクワーの外北側の2カ所など、敷地内の決まった場所にひょうたんの水を供える。助手Dはこれを見守る。次いで、ツカサBは御嶽の井戸から水を汲み、カナバリに入れる。

ケーシムリワーに移動：

- 9:04 4人全員がケーシムリワーに移動。ツカサAがケーシムリワーのマソーミの前で祈詞を唱え、ツカサCと一緒に拝む。その後、ツカサBはケーシムリワーの香炉、石垣の上などの決まった場所に、水を供える。

ピィティヌワーへの移動を開始：

- 9:06 4人がそろって、ケーシムリワーを出て、ツカサAを先頭にして一列に並んでカンミチィを南にたどる。名石集落への岐路で、水を供え、拝む。さらに南に進むと、畑への舗装道路に出る。そこで、車に乗り⁶、アバティワーへと、南に移動する。
- 9:13 途中にある、ボーズラヤマ⁷で、車から降り、拝み、水を供える。再び車で移動。
- 9:17 キナヤマのところで、車から降り、水を供え、拝む。再び移動（写真1）。
- 9:22 アバティワーに到着。ムラブサー役の男性がすでにカマなどをもって待機。ツカサらが履物を脱ぎ、御嶽の中にはいっていく。
- 9:26 御嶽内の道を、前集落のトゥニムトゥ家の四男、名石集落のムラブサーが鎌で除草すし（写真2）、マーニの葉を刈って中央に敷く（写真3）。マーニ（コミノクロツグ）

⁵ 祈詞を唱えたあと、最後に、床に指先を連弾させて、祈願するというのが波照間での拝みの形式となっている。

⁶ トゥニムトゥ家の嫁が車で待機していた。

⁷ ボーズラヤマとキナヤマは、ピィティヌワーとウチヌワーを移動する間、ウヤン（神）が休息する場所といわれるウガンジョである（アウエハント、2004[1985]: 416）。

⁸の葉を敷いた上に座り、3人のツカサは拝みを始める。

- 9:36 ツカサ等はさらに奥へと入っていき、祈りと水を供え、拝む。この間もムラブサー等は枝を払い、道の清掃を行う。
- 9:36 2人のムラブサーはトゥニムトゥ家から運ばれた膳を用意する。膳にはミシュ（神酒）、塩、にんにくがのる。ムラブサーはこれをツカサ等がいる奥へと運ぶ。奥の方で祈りを捧げ、神酒を飲む。
- 10:02 ツカサ等4人は、再び、マーニが敷かれたところまで戻る。ツカサ等はマーニの葉に座り、参加した全員とともに、神酒を飲む（写真4）。
- 10:05 神酒を飲み終わり、御嶽の外へでる。そこから、車で同じ道を家まで戻る。道の途中では、集落のフダニンの男性らがそれぞれカンミチィの自分の持ち場を清掃する。

行事の開始にあたって、まず、トゥニムトゥ家のウヤンへの報告がなされることが分かる。これは、これ以降の行事の実施にあたって同じである。既に述べたように、圃場整備により、集落外の畑の道路は碁盤の目のように整備されている。このため、カンミチィはサトウキビ畑で分断されている。現在では、ウチヌワーであるブスクワーとピィティヌワーであるアパティワー間の移動は、集落内のケーシムリワー周囲に残るカンミチィのみを徒歩で行幸し、畑を出たところで車を利用するというかたちで行われ、ツカサ等の負担が軽くなっている。この行事は、野原の御嶽、カンミチィの掃除が目的であり、集落のヤマニンジュにとっては作業の負担がかかるが、ツカサ等にとっては、車を利用することもあって家を出て帰るまで、約1時間30分の行事への関わりとなった。

2) 2003年7月15日 カンパナ

御嶽のヤマニンジュが神への納税と称して、カンパナ（神米）を納める日である。ムラブサーが、各家（7歳から73歳）からカンパナとしてグソーミ（五勺米）を集め、集落の御嶽のツカサに届けることになっている。現在では、割り当てられた米の量が集計され、共同売店からまとめてツカサに届けられることになっている。

ブスクワーのツカサA宅：

- 9:07 ツカサAは届けられたカンパナ（神米）を、まずブスクワーとケーシムリワーのマサン（最後の日の拝み）用として、9合⁹ずつ二つの盆に振り分ける。残りを7才から73才までのヤマニンジュのグソーミ分として別の盆にのせる。これらをブザシケー（床の間）の前に並べる。

床の間には、タキ（竹）とフコン（フクギ）が生けられる。これに向かって最前列にマサン用の米の盆をのせた膳、グソーミの膳が並べられる。その後ろに、塩、タチ

⁸ マーニは波照間島では神聖な木と考えられている。

グシン（泡盛を入れた銚子）、そして盃をのせた膳が並べられる（写真5）。

9:18 ケーシムリのツカサ B が到着し、ツカサ A は床の間の香炉に線香を立て、始まりの
拝みをする。

9:20 まず、台所のピナカンに、米と塩のセットでのせた膳を二つ⁹そなえ、拝む。

9:49 ツカサ二人はブザシケーの前に座り、カンパナの拝みを行う。

ブスクワーで：

11:03 ツカサ二人はブスクワーに移動する。ブスクワーでは、男性達がブルーシートの天
幕をはっている。ふたりのツカサは拝殿のなかにはいって、マサン用の9合米を供
え、祈願。

ケーシムリのツカサは、拝殿の中にあるひょうたんを受け取り、御嶽の井戸から水
をくみ入れる。その後、ブスクワーとケーシムリの二手にわかれる。

ケーシムリワで：

11:20 マソーミのなかには、タツグシン、クパン¹⁰、マサン用の9合米を供え、祈詞を唱え
る。ケーシムリワのツカサは1年前にツカサに就任したばかりであり、紙に書か
れた祈詞を見ながらの拝みとなった。ツカサの膳を右手側に配置する。香炉がおか
れている場所（マソーミ）の後ろには、ホラガイやシャコガイがある。ホラガイ（サ
ブラー）は御嶽の井戸から水を汲むつるべとして使用し、ヒョウタンに汲んだ水を入
れる（写真6）。

11:30 拝みを始める。拝むときには、ツカサの膳から、酒を3回、クパンを3回、グソー
ミを9回ずつすくって、ウヤン（神）に供える。供えおわると、「はい、おわりま
した」といいながら、調査者の方を振り向き、「ンゲオリ、カゲオリ（下々のもの
がたべます、神様も、召し上がってください）」といって終わる」と説明してくれる。

ツカサA宅で：

17:31 サニン餅づくり。ツカサAはサニン（ゲットウ）の葉を「好きなところ」から集め
てくるという。Aの長女と夫の姉が手伝いに来る。

17:38 米粉に水を加え、こね始める。平行してサニンの葉を湯がく。サニンの葉が足りな
いようなので、前集落の公民館で、もちを作っている婦人会からわけてもらう。

17:52 餅を丸め始めるとともに、湯がいたサニンの葉をちょうど良い長さに切り、水気を
拭く。ツカサAの孫娘、トゥニムトゥ家の次女も手伝いに来る。

18:03 餅を一かたまりずつ、サニンの葉に包み始める。

⁹ ブスクワーとケーシムリワの二つの御嶽それぞれの分を意味する。

¹⁰ クパンには、本来カニを調理したものを供えるが、このときにはカツオで代用していた。

18:09 蒸し器の準備をし、包んだ餅をこれに並べ始める。2人の女性が手伝いに来る。

18:38 蒸し器を火にかける。

ペムチ浜へ香炉用の砂を取りに：

18:43 ツカサAは、車でマーペーミチをとおって、砂（新しい香炉の砂）を採るために、前集落の浜であるペムチパマに向かう。マーペウィダツ（図1の23）から浜に降りる。Aは海に向かって南東を向いて座り、祈りを唱え、浜辺の砂を両手で13回にわけてすくい、袋に入れる（写真7）。ブスクワーとケーシムリワーの二つの御嶽の香炉用に、二袋分の砂を採る。

集落に戻る：

19:07 Aはブスクワーに戻り、明日のために砂をマソーミに置く。

19:15 サニン餅が蒸し上がる。

20:00 Aは外集落のアースクワーのツカサの家に行く。すべての御嶽のツカサ、パナヌファが集まり、プーリンの打合せを行う。

この日、ツカサは、カンパナの拌みをするとともに、プーリンに向けての準備として、香炉用の砂の採取、プーリンの供え物となるツカサ用のサニン餅の料理をすることが分かる。一方で、集落の住民もプーリンに供えての準備を始め、集落住民用のサニン餅、クパン（写真8，9）の用意、ミシュの製造が行われる。ツカサは一連の拌みに約2時間20分の時間を費やし、サニン餅の料理、砂採りなどに約3時間費やすこととなる。

3) 2003年7月16日 プーリン

豊作の感謝を込める豊年祭で、島全体をあげて実施される最大の行事であり、1年間の神行事を締めくくる最後の行事であるとされる。プーリンは準備のためのミヤクツェ、カンパナの次に行われる感謝のための祝祭であり、翌日のアサヨイまで、ミヤクツェから4日間連続して行われるものである。そのあとに続く2日間の翌年の豊年を祈願する予祝祭であるアミジュワーは、1962年以前にはプーリンの20日後に実施されていた（アウエハント、2004[1985]: 386）。プーリンとアミジュワーを連結させるという合理化が図られたとはいえ、現在でもサトウキビ栽培という農業に依存する島の生活にとっては、もっとも重要な神行事と考えられている。

この日、前部落の第1のトゥニムトゥ家では朝から供物の準備に忙しくする。モヤシ、刻んだアダンの若葉、サコナ（ボタンボウフウ）がマンズー（和え物）の材料として用意され、モヤシ、サコナそれぞれのごま和え、これら3種を混ぜた和え物が調理される。タツウセ（魚のゆでたものやかまぼこ）が用意され、膳の中心におくマンズー（これは3種類を混ぜた和え物）の小皿のまわりに、これを5、7、9本ずつさす（写真10）。また、ツ

カサ、パナヌファにもてなしとして手渡す弁当（てんぷら、ソーセージ、かまぼこ、カツオのかまぼこ、さつまいも、アズミ（寒天）が入る）（写真 11）、ミシュ（神酒）も用意される。ミシュを入れるシュヌザラー（外側が黒で中が赤い漆器で、もち手が水牛の角のような形をとる）（写真 12）が用意される。マンズーの小皿が 5、7、9 皿ずつのった膳はブザシケーの前に配置される。

トゥニムトゥ（親盛家）で：

- 9:40 ブザシケーのウヤン（神）に供物が供えられる。最前列は米の膳、2 番目はタチグシン（泡盛）の膳、3 列目がマンズーの膳となる。床の間に向かって左から 5 皿膳、7 皿膳、9 皿膳となる。
- 9:45 ツカサ A¹¹は台所のピナカンの前に座る。A とトゥニムトゥ家の当主のブナリ（姉妹）E が並んで座り、トゥニムトゥ家の次女 F が介添え役となる。ピナカンへの拝みを捧げる（写真 13）。再び、膳などの用意が続けられる。
- 9:52 ケーシムリワールのツカサ B、ブスクワールのパナヌファ 3 人が加わり、ブザシケーの前での拝みが行われる。
- 9:55 名石集落のブイシワールのツカサが到着する。前集落ブスクワールのツカサ（東に座る）、ケーシムリワールのツカサ、名石集落のツカサ（西側）の順に座り、前集落のパナヌファが加わる。名石集落のパナヌファはいない。ツカサとパナヌファと合わせ 8 名となる。パナヌファも神衣装を羽織る。
- 10:01 ツカサ A と B は台所のピナカンの前に座る。トゥニムトゥ家の次女 F が介添え役として再び、ピナカンに線香を供えたあと、クパンと花米を 3 回ずつ、つまんで供える。次いで、グシン、ミシュを供え、ツカサ A の拝みが始まる。このとき、他のツカサ、パナヌファはブザシケーの前に座ったままで、ピナカンへの拝みに参加する。
- 10:06 一番座のブザシケーの前に全員が移り、そこでのプーリンの最初の拝みが開始され、ヤマヌパンが唄われる（写真 14）。
小休止となり、マンズー（和え物）の膳が下げられ、ツカサ等はこれを食べる。
- 10:17 つぎに、神酒の入ったシュヌザラ（角皿）が運ばれる。シュヌザラを両手でもちながら、シュヌザラの神歌を唄い、神酒を飲む。
- 10:22 神酒の入ったナガザラ（中皿¹²）に入った神酒が運ばれ、ナガザラをもちながら、この神歌を唄い、そのあとで、神酒を飲む（写真 15）。
- 10:31 小さい杯と魚の塩漬け、弁当が配られる。ツカサ、パナヌファは弁当に少し手をつける。トゥニムトゥ家のブナリから、ツカサ、パナヌファへの感謝の口上がなされ

¹¹ ツカサ A はこのトゥニムトゥ出身である。

¹² 丸い普通の漆塗りの椀である。

る。そのあと、グシンの杯を手に、ニゲー（願い）の神歌を唄う（写真 16）。これでトゥニムトゥ家での拝みは終了となる。

- 10:40 ツカサとパナヌファはトゥニムトゥ家を発って、前集落 2 番目のトゥニムトゥ家である新川家に向かう。

前集落 2 番目のトゥニムトゥ家で：

- 10:41 新川家に到着。ブザシケーの前の供え膳の配置、内容はトゥニムトゥ家と同じ。ただし、タツウセはピンクの魚肉ソーセージが使われていた。

新川家のブナリが口上を述べる。これに対し、ツカサが返礼の口上を述べ、神酒を全員が飲む。

- 11:11 3 番目のトゥニムトゥ家である前津家に向かう。

前集落 3 番目のトゥニムトゥ家で：

- 11:12 前津家に到着。玄関先にひょうたんをおいてある。新川家の場合とほぼ同じことが行われる。

- 11:27 前津家出発。

ブスクワーへ：

- 11:32 5名のツカサ、パナヌファがブスクワーに向かう。オオタニワタリの上に供物をおく。ブスクゲーでホラ貝のつるべで水を汲み、ヒョウタンに入れる。

- 11:39 御嶽の敷地内の決まった場所にミジイマチ（水を供えること）を行い、ケーシムリワーに移動する。

ケーシムリワーへ：

- 11:40 ケーシムリワーで、御嶽の敷地内でミジイマチを行う。

アパティワーへ移動：

- 11:41 5名のツカサとパナヌファが、杖をもち、ケーシムリワーから南にカンミチィをとり、舗装道路まで歩いたあと、車に乗りアパティワーに向かう。ミヨウクツェのときと、同じプロセスをとるが、これは[★]ピィティヌワーからウチヌワーへとウヤン（神）を迎えるためのものである。

- 11:46 ボーズラヤマで止まり、ミジイマチと拝み。

- 11:50 キナヤマで止まり、ミジイマチと拝みを行う。

- 11:53 アパティワーに着く。入り口で履物を脱ぎ、御嶽の奥へと向かう。

- 12:07 ツカサ達は拝みを終えて、アパティワーから出て、車に乗る。

- 12:13 ケーシムリワーの南のカンミチィの入り口にもどり、車を降りる。ふたたび、ブス

クワーへのカンミチィをたどる。

12:15 途中の名石集落への分かれ道で、名石のツカサと補佐は名石集落へと戻る。

ブスクワーで：

- 12:19 ブスクワーのツカサA、ケーシムリワーのツカサB、ブスクワーのパナヌファはブスクワーに戻る。マソーミ（御嶽の聖域）、拝殿で準備を始める。ケーシムリワーのツカサBは自分の御嶽に戻る。マソーミの中にパナヌファも入って掃除をする。ツカサAは御嶽内のオオタニワタリとフクギの葉を切り、井戸水で洗う。フクギの葉を生け、またこれで香炉の灰や砂をくみだし、前日、ペムチ浜からとってきた砂と入れ替える。オオタニワタリはウヤンに差し上げる意味で供物膳からつまんだものを置くのに用いるものである。
- 12:41 マソーミの中に供物の膳が並べ始める。1回目の供物の膳の1列目（香炉側）にはサニン餅¹³の膳が並ぶ。2列目の膳はマンズーの膳、3列目はクパンの膳、4列目が米の膳となる。それぞれ3膳ずつである。この膳の香炉側に向かって右側にはミシュ、左側にグシンの膳が配置される。
- 12:57 ツカサAはパナヌファ2人とともに、マソーミに座り、プーリンの最初の拝みを開始する。
- 13:00 第1のトゥニムトゥ家のブナリが訪れる。供え物を持参し、マソーミに入る。
- 13:14 これに対し、ツカサは、線香を焚き、拝みをあげ、グシン、ミシュ、クパン、塩をウヤンに捧げる（香炉の横に敷いたオオタニワタリの葉の上に供物をこぼす）。これを繰り返し3回行う（写真17）。
- 13:25 3回の拝みが終わり、サニン餅の供物を下げる。ツカサ等はお下がりのサニン餅を食べ始めが、小休止となる。
- 13:56 2回目の膳が運び込まれ、並べられる。1列目はタチウセの膳、2列目はミシュの膳、3列目はクパンの膳、4列目は米の膳。
- 14:04 2回目の拝みが線香を立て、開始される。これは前集落の3軒のトゥニムトゥ（親盛家、新川家、前津家）のための拝みであるという。
- 14:09 集落の人が拝みに訪れ始める。
- 14:13 3回目のシュヌザラー（角皿）の膳に取り替えられる。入れ替わり立ち替わり、集落の女性が供物をもってやって来る。
- 15:55 外集落からカンシン（神客）の行幸が到着し、ブスクワーに対し、拝みを捧げる。ブスクワーのシシブラー（接待役）らがワーヌヒー（拝殿）で彼らを迎え、接待する。ブスクワーのツカサ、ケーシムリワーのツカサも参加する。

¹³ モチはヤマニンジュとツカサの分として、それぞれ45個をそなえる。

- 16:30 カンシンを迎え、シュヌザラの歌が歌われる。前集落のパナヌファも供物をもってくる。
- 16:35 ナガザラの歌が歌われる。
- 16:42 カンシンを送る、ユガフの歌が歌われ、終わりとなる。
- 16:52 カンシンは次の集落である南集落へと向かう。
- 19:15 カンシンがブスクワーを通り過ぎ、外へ向かう。これでプーリン1日目は終わる。

プーリンの拝みでは、集落の第1のトゥニムトゥ家のみではなく、第2、第3のトゥニムトゥ家によるツカサ等の神役のもてなしが行われ、ピィティヌワーからウチヌワーへとウヤンが迎えられ、ブスクワーでの拝みが進行する。ブスクワーには集落のヤマニンジュが供物をもって豊作のお礼に来る。現在では、すべてのヤマニンジュが来るわけではなく、年輩の女性が数名やってきただけである。

夕方には、外集落アースクワーのツカサとパナヌファからなるカンシンの巡行が久しぶりに行われた。外のツカサは今回で引退するため、彼女にとって最後となるカンシンを実行することにしたのであるといい、これは前日のツカサ達の集まりで決められたものである。カンシンは9人で行うのがよいとされるが、奇数であれば、9人揃わなくても良いとされる。今年の巡行は5人で行われた。

プーリンの拝みは全部で11回あるといい、ツカサにとっては大変気の張る一日であるという。拝みごとに変わる供物膳、その順序など、神行事は手順を間違えることなく実施することが必要であり、ツカサは時々自分のメモ用のノートを参照し、また、集落の手伝いの人たちが間違わないように指示していた。ツカサはほぼ9時間半あまり、ぶっ続けて拝みに関わっていたのである。

4) 2003年7月17日 アサヨイ：朝の祈願

各御嶽でツカサとヤマニンジュが集まり、祈願を行ったもので（宮良、1972: 170）、プーリンが無事終わったことを感謝し、これから先の豊作を祈願するものである（畠山、1982: 33）。一度は神行事の合理化の中で、プーリンのアサヨイとアミジュワーの2日間を一緒に1日で済ました時期もあったようである（アウエハント、2004[1985]: 366）。しかし、2003年現在では、再び、アサヨイは切り離され、アミジュワーとは別個にプーリンの翌朝に実施される。そして、アサヨイの翌日がアミジュワーとなっている。

一年最後の神行事であるプーリンが終わり、この日はカマガー（御嶽の男性補佐役）の交代する日でもある。ブスクワーには、ブスクワーとケーシムリワーのツカサ、ブヤイマシン（長老客）、新旧二人のカマガーが集まって、祈願に参加し、次のように行事は進んだ。

- 8:47 ツカサAとBがマソーミ、拝殿の掃除をし、アサヨイ祈願の準備をする。
- 9:24 ツカサAはマソーミの中に入り、供物（米、クパン、神酒）をそなえ、香炉に線香を

立て、祈願を開始する。ツカサB、ブヤイマシシ 3 人、新旧二人のカマガー役の住民らは拝殿に座る。ブヤイマシシ、カマガーの男性たちは立ち上がり、Aの祈願に合わせて祈る。

9:29 Aはマソーミでの祈願が終わり、供物を下げて拝殿に戻る。Aは拝殿で、再びマソーミを向いての拝みを行う。参列者全員一緒に祈る。

9:32 Aはマソーミ内に戻り、長老客の一人が 73 才となり神行事から引退するため、これを報告するウヤンへの拝みをする。長老は供物として米をウヤンに供える。拝殿内で、この長老はツカサの拝みにあわせ、立ち上がって祈る。

9:37 Aはマソーミから戻り、次は一年間カマガー役を務めたことのお礼をウヤンへ報告する拝みとなる。旧カマガーは供物として米を供え、拝殿の正面に進み出て、マソーミに向かい合って座り、Aの拝みにあわせて立ち上がり、拝む（写真 18）。

9:41 ツカサAは拝みが終わり、供物を下げて拝殿に戻る。

9:43 ブヤイマシシにグシシ(泡盛)、供物、ミシュが振舞われる。新しいカマガーが給仕役となる。

10:00 アサヨイの終了となる。

18:30~18:50 公民館前のムシャマー広場で、公民館主催の「巻き踊り」が開かれる。住民は大人も子供も、サトウキビの葉で鉢巻をして参加する（写真 19）。巻き踊りは時計とは反対周りで、銅鑼の音に合わせて踊られる。最後に、閉会に当たって、公民館副館長が挨拶をし、「明日はアミジュワーで、来年の豊作祈願です。来年も雨がたくさん降って豊作になるように、祈願してください」と述べる。

この日は、ツカサにとって中休みの日といえる。午前中に 1 時間あまり、御嶽で拝みをして開放される。

5) 2003 年 7 月 18 日 アミジュワー：豊作予祝祈願

アミジュワーは、次の年もまた豊作することを願って、新たな農作業を開始する前に行われる予祝祈願の行事である。プーリンとはほぼ同じプロセスで行事が進行するが、翌年の豊作を祝うという点で異なる。ブスクワーでは、まず、一番のトゥニムトゥ（宗家）にツカサ、パナヌファが集まり、一連の祈願を行い、その後、ブスクワーにツカサ等は戻り、ブスクゲーの水をヒョウタンに入れ、ブスクワー、ケーシムリワー、カンミチィを歩き、ボーズラヤマ、キナヤマをへて、アパティワーへとミジィマチの巡行を行う。ウヤンをアパティワーからはウチヌワーへとお連れし、ブスクワー、ケーシムリワーのマソーミで、祈願を行う。プーリンと同じ供物が供えられるが、ここでの祈願の趣旨は豊作の感謝ではなく、豊作をもたらす雨が降ることを願うことにあり、この意味で、祈願は雨乞いとなり、祈詞が異なることになる。

以下に、時間に沿って行事のプロセスを簡潔に追ってみる。ここでは、御嶽でのツカサの活動はケーシムリワーでの事例である。

トゥニムトゥ家で：

ブスクワーのツカサAとケーシムリワーのツカサB、前集落、名石集落のパナヌファ6人が参加する。

- 9:46 ツカサ等は全員神衣装を羽織る。ツカサAがピヌカンでの拝みを開始。トゥニムトゥ家のブナリも拝みに加わる。
- 9:52 ブサシケー（一番座）での拝み。拝みのあと供物をいただく。
- 10:03 ブザシケーの前で、ミシュの入ったシュヌザラを手に、この神歌を唄う。
- 10:08 ナガザラの椀が配られ、これを手にナガザラの神歌を唄う。
- 10:12 トゥニムトゥ家のブナリはツカサ等に予祝願いの口上を述べる。
- 10:13 グシンの入った杯を手に、ユガフを唄う。唄い終わって酒を飲む。
- 10:17 お茶が出され、今回でパナヌファを退任する人がお礼の挨拶を述べる。

ブスクワーで：

- 10:31 ツカサとパナヌファはブスクワーへ移動。御嶽の井戸の水を汲み、ミジイマチ（水供え）の準備をする。集落の人は供え物の準備などに忙しく働く。

アパティワーへの巡行：

- 10:36 ツカサAとB、パナヌファ4名は水を入れたヒョウタンをもって、ケーシムリへ移動。残りの二人のパナヌファは名石集落に帰る。
- 10:39 ツカサとパナヌファはケーシムリワーを出た南側で、ミジイマチと拝みをする。そのあと、南に続くカンミチィを歩く。
- 10:41 舗装道路に出たところで、車に乗る。
- 10:44 途中のボーズラヤマで止まり、ミジイマチと拝みをする。
- 10:47 途中のキナヤマで止まり、ミジイマチと拝みをする。
- 10:50 アパティワーに着き、入り口で履物を脱いで、拝んだあと、奥にはいる。
- 11:09 車でカンミチィの入り口まで戻る。
- 11:00 カンミチィの途中の名石への道の分岐路[※]で、名石からの2人は名石の御嶽へ戻る。
- 11:13 ブスクワーに到着。

ケーシムリワーで：

- 11:17 ツカサBは、マソーミの前で準備をはじめる。
- 11:18 手伝いの人が供物をもってくる。ツカサの助手としてパナヌファ1人がつく。
- 11:33 1番目の供物が並べられる。サニン餅、マンズー、ミシュ、タチグシン（銚子に入

- った泡盛)、米それぞれ膳に乗せられる (写真 20)。
- 11:39 最初のアミニゲー (雨乞いの拝み) が始まる。ツカサが祈詞を唱える前に、パナヌファは線香に火をつけ、香炉に供える。
- 11:42 祈詞を唱えたあと、供物の膳それぞれからすこしずつ供物を取り、ウヤンに献じる。
- 11:46 新しい線香を立て、祈詞を再び唱える。膳には供物 (米とクパン) をたし、再び、それぞれの膳から供物を少しずつ取って献じる。
- 11:52 3回目の線香を立て、拝みを開始する。祈詞を唱えたあと、供物を少しずつ取って献じる。
- 12:01 アミニゲーの3回の拝みが済んだので、カンパナ (神米)、カンコーシ (サミン餅)、マンズーの膳が下げられる。神役はサミン餅をいただく。
- 12:12 新しい供物の膳に並べ替える。クパン、ミシュ、グシンそれぞれの膳に、あらたに豆腐とサツマイモの膳がタツウセの膳として加わる。
- 12:14 新しい願いが始まる。
- 12:21 スーニゲの願いのタチメー (1回目の拝み) が終わり、ツカサはこのときの供物であるサツマイモと豆腐を食べる。
- 12:38 拝みの再開。ブパナニゲの願いとなる。供物は米、タチグシン、クパン、ミシュのみとなる。線香を立て、祈詞を唱える。
- 12:40 祈詞が終わり、それぞれの膳から供物を少しずつ取ってウヤンに献じる。
- 12:45 小休止のあと、クムリの願いの1回目を開始する。
- 12:48 拝みが終わり、供物の一部をウヤンに献じる。
- 《小休止》
- 13:09 あらたな供物の膳が運ばれる。
- 13:17 ツカサが戻る。供物として、米、タチグシン、ミシュ、クパン、シュヌザラーと刺身、ナガザラ、それぞれの膳が並べられる。集落の人が訪れ、供物の一部をお下がりとして持ち帰る。拝みの開始となる。
- 13:20 ツカサは拝みの終了後、供物を少しずつウヤンに献じる。
- 13:22 ツカサはシュヌザラー、ナガザラの供物をいただく。
- 13:25 シュヌザラー、ナガザラの膳が下げられ、供物は米、タチグシン、ミシュ、クパンのみとなる。
- 《小休止》
- 13:36 吸い物膳があたらしく運ばれる。カンヌスイモノ (神の吸い物) 膳とウイヌスイモノ (上の吸い物) 膳には、豆腐とモヤシが入り、サンバンヌスイモノ (三番目の吸い物) には魚が入る。吸い物のともにウーナマシ (刺身) が添えられている。
- 13:37 線香がともされ、拝みの開始。クムリ2回目の拝みである。
- 13:44 吸い物膳は下げられる。
- 13:46 線香に火がつけられ、次の拝みが始まる。供物は、米、タチグシン、ミシュ、クパ

ンとなる。クムリ 3 回目の拌み。

13:43 拌みが終了し、最後の拌みであるマサンを残すのみであるといい、小休止とする。

《小休止》

15:14 最後の拌みマサンの開始。供物は米、タチグシン、ミシュ、クパンとなる。拌みの終了後、膳の上に残ったクパン、ミシュをすべてマソーミの石垣の上におき、御嶽に捧げる。

15:17 供え膳を片づけ、タチグシンには白い紙で栓をする。

15:21 すべてが終了する。

ブスクワーで：

ツカサはこの夜、ブスクワーでのクムリ（御嶽での籠もり）がある。ツカサ A とツカサ B はブスクワーに集まり、クムリの準備をする。

20:30 拝殿には、供物が並べられている（写真 21）。マソーミに向かって左側にブスクワーの供物で、右側にケーシムリワの供物が並ぶ。クムリにあたってのあらたな供物が並ぶ。9 個のコップがおかれた膳で、サイミズといい、水を入れたコップ 3 個、サシバナといい、洗った米にリュウキュウコクタンの葉を 3 枚挿して入れたコップが 3 個、シシミシといい、生米をすったものを入れたコップが 3 個である。これはクムリをおこなうツカサの分として必ず用意されるものという。

20:40 クムリの開始にあたっての拌みを行う（1－2 分）。

ふたりのツカサとヤマニンジュの代表がブスクワーに籠もる。敷地内では集落の人たちが祭りの終了にあたり、慰労会を開いていた。アラントウワーでは、慰労会として、巻踊りを主催していた。グシン（泡盛）を雨のようにしずくにして、高く踊り手にむかって飛ばす。御嶽の敷地内で円になり、巻き踊りをするが、子供も参加している。内側の円で子供、外側で大人が踊る。参加者は頭にサトウキビの葉を巻く。

ツカサは今日の拌みは全部で 9 回であり、プーリンの日より少ないため、ゆっくり拌みができると話す。実際、拌みの途中での休憩がしばしば入っていたが、約 5 時間半で拌みが終了した。しかし、ツカサらには夜に御嶽でのクムリ（籠もり）があり、まだまだ気の抜けない一日であった。

アミジュワーにも、かつてはカンシンの巡行があったというが（アウエハント、2004[1985]: 462-463）、行われていない。

6) 2003 年 7 月 19 日 アサヨイユニゲー：朝願い・世願い

以前は、公民館前がユニゲノザ（ユニゲーの座）だったという。現在は御嶽で行われる。

ブスクワーで：

ツカサA、Bと、ブヤイマシン2人、カマガー1人が参加する。

8:57 昨夜のクムリの供え物を片づけ、アサヨイの準備を始める（写真22）。

9:05 ツカサAは、マソーミで線香をともし、米とミシュ（神酒）を献じ、祈詞を唱え始める。

9:08 拝みが終わり、ツカサはミシュを戴く。

9:09 拝殿にいる新しいカマガーの男性のための拝みとなり、拝殿で立って拝みに参加する。

9:13 ツカサAは拝殿に戻り、ツカサBとともに、拝みを再び始める（写真23）。

9:14 ツカサはこれですべての拝みを終わり、ミシュを戴く。男性もミシュ、グシンを戴く（写真24）。

10:03 後かたづけが始まり、すべてが終了する。

4. おわりに

以上、ミヨウクツェからアミジュワーのアサヨイユーニゲーに至る6日間の神行事の進行を、「拝み」という活動の連鎖として記述してきた。これら一連の神行事には、御嶽の聖なる井戸から汲んだ水によるミジイマチが繰り返し登場し、これまでも指摘されてきたが、水の祈願（雨乞い）が波照間島の人々にとって儀礼の中心的テーマとなってきたことが示されている。ため池を整備し、畑への給水により干魃被害を避ける努力がなされているが、現在のサトウキビ栽培においても、十分な水をえられるかどうかは大きな問題であることには変わらない。現在においても神行事の実践には、豊作の感謝とともに、またこれを願っての強い祈願が生き続けている。

その中で、ピィティヌワーへの移動に車を利用するなど、現代の生活に合わせた神行事の合理化が計られる一方で、各願いの拝みの形式を厳格に守る努力がなされている。次から次へと願いに合わせ運ばれる供物の存在は、神行事はウヤンへの祈りを司る神役の存在だけではなく、行事に欠かすことのできない、サミン餅、タツウセ（塩干し魚の身）、マンズー、クパン、ミシュなどの供物の調理を集落の住民が担うことによって始めて、実施することができるものであることを示している。まさに、集落あげて、神行事の維持に向けての努力がなされているのである。

しかし、はじめに述べたように、ツカサの後継者がいなくなりつつあるという問題は神行事の維持にとって大問題として立ちはだかっていることも事実である。ツカサ、パナヌファは、家筋、継承資格がある女性であれば誰でも良いというわけでもなく、「神高い」こともまた要求される。これまでのツカサの継承においても、ユタの占いによって決まってきた（アウエハント、2004[1985]: 238-239）。ツカサの欠如をパナヌファが代理となることで、何とか神行事の実施を維持するのが現状となりつつあるが、新たな解決策を見出すことに時間の猶予がないことも事実となっている。

最後に、島に若い女性が少ない中で、島の伝統をなくさせないために、進んでパナヌファに加入する若い女性も現れ始めている。若い世代には、伝統が廃れてしまうことに対する危機感もあり、集落によっては島外出身者も加えて神行事を支えるなど、維持に向けての努力がなされている。信仰としての意味だけではなく、島の文化としても神行事を維持する取り組みが始まっているといえよう。

引用文献

アウエハント、コルネリウス 1971[1967]. 「波照間島の神行事について」馬淵東一・小川徹（編）『沖縄文化論叢 第三巻 民俗編Ⅱ』東京：平凡社、pp. 361-374。

——— 2004[1985] 『Hateruma：波照間—南琉球の島嶼文化における社会=宗教的諸相』中鉢良護訳・解説、宜野湾：榕樹書林 [C. Ouweland, 1985, *Hateruma: Socio-religious aspects of a South-Ryukyuan island culture*. Leiden: E.J. Brill]

畠山 篤、1982. 「波照間島の豊年祭（プーリン）と祈年祭（アミジュワー）」『波照間島調査報告書』地域研究シリーズ No.3、宜野湾：沖縄国際大学南島文化研究所、pp. 19-38。

宮良高弘、1972. 『波照間島民俗誌』叢書わが沖縄別巻、東京：木耳社。

仲底善章、1998a. 「波照間島の神行事について—プーリン（豊年祭）を中心として」『波照間島総合調査報告書』那覇：沖縄県立博物館、pp. 240-254。

——— 1998b. 「波照間島の神行事について」『沖縄県立博物館紀要』 24: 63-106。

中鉢良護、2002. 「歴史と構造—波照間島のプーリン/アミジュワー」記念論集刊行会（編）『琉球・アジアの民俗と歴史—比嘉政夫教授退官記念論集』宜野湾：榕樹書林、pp. 213-270。

住谷一彦、クライナー、ヨーゼフ 1977. 「パティローマーモノグラフによる日本民族=文化複合へのアプローチ」『南西諸島の神観念』東京：未来社、pp. 213-311。

アイヌの世界観と動物の世界 —世界観を象徴する動物—

山田 孝子

1. はじめに

アイヌは、永遠不滅な実体である靈魂の存在を認め、これをラマチあるいはラマツと呼びます。そして、靈魂は人間のみならず、生物、無生物を問わずに存在すると考えてきました。また、動植物をはじめとし、道具や器具、天体、気象、地形から病理学的現象にいたる多様な実体を、靈的な力を備えた超自然的存在であるカムイ、あるいはカムイの顕示とみなしてきました。靈魂とカムイの概念は、アイヌの世界観の根本となり、カムイに対する信仰はアイヌの宗教の本質をなしてきたのです。

多様な自然のカムイの存在は、アイヌがさまざまな理由に基づいて、それぞれに靈的な力を認めてきたことを示しています。実際、個々のカムイの実体をみていくと、当然でもあります、「もの」の実用性、あるいは行動的、形態的特異性などに基づいて神格化されるものが多いことが分かります。

たとえば、人間すべてを育む最も根源的源である火はアペ・カムイ（火の神）とみなされる。いろいろな道具をつくる素材となり重宝なカツラの木はランコ・カムイ（カツラの神）と神格化され、矢毒となるトリカブトはスルク・カムイ（トリカブトの神）と呼ばれる。大時化に出会った舟を道案内し、助けたという伝承が残るハシボソガラスはカララク・カムイ（ハシボソガラスの神）と神格化される。クモは、クモの巣を編む行動をからヤ・オシケ・プ・カムイ（網を編む神）などと呼ばれ漁撈の守り神となっています。

その反面、ある種の動物は非常に象徴的に神格化されていることに気がつきます。たとえば、カケスはハシナウ・ウク・カムイ（枝幣を受け取る神）、ヒグマはヌプリ・コロ・カムイ（山岳を領有する神）、シマフクロウはコタン・コロ・カムイ（村を領有する神）、ヘビはヌサ・コロ・カムイ（幣場を領有する神）の顕れとされている。

ここでは、とくに動物に顕現する、ある空間を領有する神である「領有神」の例を取り上げ、①これらの動物がどのようにアイヌの世界観を象徴する機能を果たしているのか、②「領有神」の観念は動物自身の神格化された観念そのものであり、いわゆる「主霊」とは異なること、③このような「領有神」の観念がアイヌの世界観の核となっていることを示すことにしたい。資料は、おもに、北海道西南地域のものに基づいています。

2. 空間象徴としての動物

アイヌの動物のシンボリズムやその神格化は、彼らの動物分類あるいは動物観を抜きにしては考えることができません。では、アイヌは動物をどのように捉えているのでしょうか。

動物は、〈チェプ（サカナ）〉、〈チコイキプ（ケダモノ）〉、〈チカプ（トリ）〉、〈キキリ（ムシ）〉、〈セイ（カイ）〉などのカテゴリー分類されます（山田、1987；1994）。たとえば、〈チ

エプ（サカナ）のカテゴリーには、魚類、円口類、両生類のエゾサンショウウオ、イルカ・クジラ類が含まれます。〈チコイキプ（ケダモノ）〉には、クジラ目、翼手目を除く哺乳類が含まれ、さらにはウメガメ類も含まれます。〈チカプ（トリ）〉には、動物分類学上の鳥類すべてとコウモリ類が含まれ、〈キキリ（ムシ）〉には、爬虫類のヘビ・トカゲ類、両生類のカエルをはじめ昆虫類など多様な動物種が含まれます。

これらのカテゴリーへの動物の分類の仕方を見ると、飛ぶ、泳ぐ、歩き、這うといった移動様式と生息場所における相違と類似に基本的に基づいていることが分かります。動物分類のカギはその生活型にあるのです。このため、動物の分類において、その居住空間である空間カテゴリーが指標となるのです。

一方、アイヌの空間認識は二項対立的傾向が認められます。たとえば、キム（山）とコタン（里）、キム（山）とレプ（沖／海）、パ（上手）とケシ（下手）、カンナ（上方）とポクナ（下方）といった対立的な空間把握があります（山田、1994）。これを反映し、動物の総称的カテゴリーやサブ・カテゴリーへの分類においても居住空間上での対立的把握が基礎となっています。

このことから、たとえば、生活型において空と結びつく〈トリ〉のカテゴリーは、垂直線上での空間カテゴリーであり、地上に対立するカント（天）に連繫することが分かります。

〈ケダモノ〉のカテゴリーには海獣と陸獣が含まれており、トドとヒグマはそれぞれの最も大型の獣ということが出来ます。日高地方に残っているトドとヒグマに関する伝承が示すように、海の獣に対し山の獣は優位に位置づけられると同時に、〈ケダモノ〉は起源上、山に結びつく動物なのです。つまり、このカテゴリーは観念上、里に見かけないものであり、水平線上で海・里に対立する、空間分類におけるキム（山）に結びつくのです。

そして、海の動物の主要なカテゴリーである〈サカナ〉が〈ケダモノ〉との対比の上で、空間分類における、陸に対立するレプ（沖／海）のカテゴリーに対応するといえます。水中に結びつく〈サカナ〉はレプ（沖／海）に関係するものとなります。

〈ムシ〉に属するものは平面上の空間分類のどのカテゴリーにも棲息するものである。アオダイショウが人家によく侵入するように、このカテゴリーは一般に里（集落）においても頻繁に接することのできるものであるという点で、〈ケダモノ〉や〈サカナ〉と異なるのです。この点で〈ムシ〉のカテゴリーは居住地という意味でのコタンと結びつき、里によく見かける点で、山に対立するコタン（里）に連繫するのです。

このようにみていくと、〈ケダモノ〉はキム（山）に、〈トリ〉はカント（空）に、〈サカナ〉はレプ（海）に、〈ムシ〉はコタン（里）に対応することが分かります。動物の総称的カテゴリーは空間上の総称的カテゴリーと対応関係をもつのです。動物は空間カテゴリーの象徴ともなっているのです。

3. 「領有神」の顕れとなる動物—空間の支配性の象徴

アイヌのカムイの観念のなかで、いわゆる「領有神」の顕れとなる動物をみると、ヒグマがヌプリ・コロ・カムイ、シャチがアトゥ・イ・コロ・カムイ、ヘビはヌサ・コロ・カムイ、

シマフクロウはコタン・コロ・カムイあるいはモシリ・コロ・カムイの顕現と考えられています。つまり、ヒグマ、シャチ、ヘビ、シマフクロウは神名の語彙が示す空間カテゴリーと関係づけられていることが分かります。ヒグマはヌプリ「山」、シャチはアトウイ「海」、ヘビはヌサ「幣所」、シマフクロウはコタンあるいはモシリ「国、世界」を象徴するものとなっています。

では、これらの動物が空間カテゴリーの象徴となる背景は何でしょうか。上述のように、動物分類と空間分類とは対応しています。まず、〈ケダモノ〉は「山」に、〈サカナ〉は「海」に、〈トリ〉は「空」に、〈ムシ〉のカテゴリーは「里」結びついていました。一方、動物分類の上ではヒグマは〈ケダモノ〉、シャチは〈サカナ〉、ヘビは〈ムシ〉、シマフクロウは〈トリ〉に属します。

〈トリ〉は垂直線上での空間カテゴリーに対応しています。天空をアイヌ語ではカントと言い、大地をシリあるいはシリと言います。この世をアイヌ・モシリ（人間の世界）と呼ぶのに対し、上方にはカムイ・モシリ（神の世界）が位置するとも考えます。また、この世をカンナ・モシリ（上方の・世界）あるいはカンナ・シリ（上方の・国）と呼ぶのに対し、あの世はポクナ・モシリ（下方の・世界）あるいはポクナ・シリ（下方の・国）と呼ばれます。国土全体を表すモシリは、すべての水平的空間分類のカテゴリーを含み得るものであり、カムイ・モシリとアイヌ・モシリとの対比が示すように、垂直的空間カテゴリーを表す語彙として用いられることが分かります。

また、人間の生活する村をコタンというのに対し、「あの世」をポクナ・コタン（下方の・村）、アラ・ウン・コタン（あちらの・村）と呼びます（知里、1985[1956]）。コタンはモシリと同様に、ポクナ・コタンとの対立において上と下という垂直的空間カテゴリーを表す語彙ともなります。

このようにみてきますと、コタン／モシリはすべての水平面上の空間を内包する垂直的空間カテゴリーを表すものといえます。つまり、〈トリ〉のカテゴリーは、空間分類におけるすべての大地を覆う〈空〉のカテゴリーから派生し、垂直的空間カテゴリーとしての〈コタン／モシリ〉に対応するといえるのです。

〈ケダモノ〉が〈山〉に、〈サカナ〉が〈海〉にというように、この二つのカテゴリーは平面上の空間分類のカテゴリーと対応関係をもちます。〈ケダモノ〉は当然聳える山であるヌプリに、〈サカナ〉は海一般をさすアトウイに結びつきます。〈ケダモノ〉や〈サカナ〉はまた、コタン「里」から離れた空間に位置づけられるカテゴリーといえます。実際、イヌ、ネズミ類を除けば〈ケダモノ〉に類別されるものは山や沖という里から離れた場所に住むものです。また、海や川に住む〈サカナ〉も里とくに集落以外の場所に住むものといえます。

これに対し、〈ムシ〉は里によく見かけるものです。かつて、コタンには必ずヌサ・サン「幣所」がありました。ヌサはイナウの集まりで、いわば祭壇に相当するものである。ヌサがたくさん立てられたヌサ・サンは、居住地における最も神聖な場所、まさにコタンそのもののシンボルとなのです。つまり、〈ムシ〉のカテゴリーは、コタン（里）から派生し、コタンの象徴としての「ヌサ」とも結びつくといえます。

さて、ヒグマ、シャチ、シマフクロウ、ヘビは、それぞれの類別カテゴリーにおいてどのような生態学的地位を占めるでしょうか。ヒグマとシャチについてみると、前者は陸上動物における食物連鎖の中で頂点にあり、〈ケダモノ〉のカテゴリーの中で最も強いものといえます。後者は「鯨を追いかけて浜に寄せてくれる」といわれるように、海の動物の食物連鎖の中で頂点に位置し、〈サカナ〉のカテゴリーの中で最も優位にあるものです。ヘビは〈ムシ〉のカテゴリーの中で最も大きく、最強のものといえます。

ところで、シマフクロウは、北海道地方の森林に住む留鳥の中で最大の夜行性である猛禽類です。サケが産卵するあたりを生活の場とし、サケをはじめとし小魚をとって食べる習性があります。

森林に住む大型の猛禽類の留鳥の中でシマフクロウに匹敵するものにはワシタカ科のクマタカがある位です。平地から山里に近いところに住む猛禽類の留鳥にはフクロウ科ではアオバズク、オオコノハズク、フクロウをあげることができ、他にワシタカ科のオオタカ、ツミ、トンビ、ノスリ等、ハヤブサ科のハヤブサ、チョウゲンボウがあります。フクロウ類は一般に、両眼が顔の前面に位置し、平たくて丸い人間的な顔をもち、夜行性という点で、いわば、鳥類の中で異例な形態をもつものといえます。

猛禽類の中で、フクロウ類であるシマフクロウがシンボル表現として選択される背景はこのような異例性とも無関係ではないでしょう。いずれにしてもシマフクロウはアイヌの主要な食糧となるサケと結びつくものであると同時に、〈トリ〉のカテゴリーのなかで最も強いものの一つなのです。

このような動物の生態学的地位を考えると、これらの動物が神格化される背景を次のようにまとめることができます。

ヒグマは〈ケダモノ〉の最も優位なものであり、〈ケダモノ〉は象徴的に空間カテゴリーであるキム（山）およびヌプリ（聳える山）に対応する。ヒグマはその帰結としてヌプリ・コロ・カムイの象徴になっているといえます。同様に、シャチは〈サカナ〉の中で最優位にあり、〈サカナ〉は象徴的に空間カテゴリーであるレブ（沖）、アトウイ（海）に対応する。この連繋によりシャチはアトウイ・コロ・カムイの顕現となる。ヘビは〈ムシ〉の最大のものであり、〈ムシ〉は象徴的にヌサ・サン「幣所」に対応し、このためヘビはヌサ・コロ・カムイの象徴となる。最後に、シマフクロウは〈トリ〉の最優位かつ異例性を帯びるものであり、〈トリ〉は空間分類上の空と、象徴的にはモシリ／コタンと結びつく。この帰結としてコタン・コロ・カムイあるいはモシリ・コロ・カムイの象徴となるといえます。

ヒグマ、シャチ、ヘビ、シマフクロウなどの動物はそれが属する類別カテゴリーの中で《強さ》、《優位性》、ひいては《支配性》のシンボルとなっていることが分かります。シャチ、ヒグマ、シマフクロウ、ヘビ等がシンボル表現として選択されるのは、もちろんこれらの動物の特異性に基づくといえます。しかし、これらはそれが属する類別カテゴリーの中で最も強いものであるという、その強さによって各空間を支配（領有）する神のシンボルとして選ばれたものといえることができます。

4. 領有性が特徴となる世界観

ある空間カテゴリーの領有性あるいは所在性に焦点が当てられたカムイには、たとえば、ヌプリ・コロ・カムイやキムン・カムイなどの例がありますが、これらは一般に、重要な儀礼において特別な崇拝の対象となっています（山田、1994）。このようなカムイの存在は、カムイの概念において領有性が重要な要素になっていることを示しています（Yamada, 1994）。また、これらは、アイヌ・モシリ（人間の世界）がいくつかの空間に区別されること、そして、それぞれの空間にはそれを領有し、見守るカムイがいると考えられることを示しています。

実際、家、コタン（村）、村の周辺、里山、深山、聳える山、川、河口、入り江、沖などにはこれらの場所を見守るカムイがいます。家は家庭生活の中心となる場であり、居住地は社会的、宗教活動と、村の周辺では、野生の植物の採集、ヒエやアワなどの栽培といった活動を行う場となっています。海や川は漁撈活動の場、里山は鹿などの狩猟や生活資源獲得のための採集、深山はクマの猟場となります。空間区分は生計活動と密接に結びつき、それぞれのカムイに割り当てられる空間は人々の生態を背景としているのです。

アイヌ・モシリ（人間の世界）におけるこのような領域区分は、また超自然的世界であるカムイ・モシリ（神の世界）の在り方とも関連します。あの世において死者は自分の生まれた育った村出身の死者とともに暮らすように、カムイもそれぞれ自分の領地に住むと考えられています。そして、動物たちのカムイ・モシリは、動物分類上のカテゴリーに準じて区別されているのです（山田、1994）。

コタンは宇宙の中心であり、川に沿ってずっと遡った高い山の先には〈ケダモノ〉のカムイ・モシリが広がります。川に沿って下った海の底から先には〈サカナ〉のカムイ・モシリ、垂直方向に昇った天空の先には〈トリ〉のカムイ・モシリ、地下には〈ムシ〉のカムイ・モシリが広がるのです。このように、カムイ・モシリは、アイヌ・モシリを取り囲む垂直上、水平上に3次元的に拡散した先の世界ということが出来ます（Yamada, 1994）。「領有神」に顕現する動物は、このような宇宙の構造的配置を象徴するものともなっています。

5. 動物の送り儀礼—人間とカムイとの相補互酬性の象徴

動物の魂は、狩られたあと丁寧にカムイ・モシリに送り返されるべきものとされています。送り儀礼の最も知られるものが、「クマ送り」儀礼と「フクロウ送り」儀礼です。これらの儀礼は、カムイと人間との関係の在り方を儀礼の場において確認するものとなっています。

また、動物や植物などの自然神が自叙する形式で、これらのカムイが主役となって活躍するカムイ・ユーカラやカムイ・ウエペケルなどの物語があります。これらには次のようなカムイと人間との関係についての考え方が示されています。

たとえば、久保寺逸彦の神謡六「山岳を領く神（熊）の自叙」（久保寺、1977）をみると、アイヌは次のような考え方をもつことが分かります。まず、この神謡において、ヌプリ・コロ・カムイ「山岳を領く神」（クマの神）が霊山の山頂近くにある神の国に住み、人間と同様の姿をし、家族とともに、ちょうど人間の世界での人とまったく同じように生活することになっています。そして、ときどき人間の世界を訪れたくなり、神の世界から人間の世界へとクマの毛皮と肉を土産として（クマの姿をとって）、訪れるのです。ヌプリ・コロ・

カムイ（クマの神）はクマの毛皮をまとい、人間の国を訪れるのですが、人間とカムイとの接点となる狩猟は、クマの神が火の神の招待を受けることによって成立するというアイヌの考え方がこの神謡の中で示されています。

人間に狩られたクマの神は丁重にもてなされ、クマの毛皮を残し、人間から贈られたイナウ「木幣」、酒、燗餅などを土産に持たされ、再び神の国に帰るのです。そして、クマの神は土産に持たされた品々をもとにカムイ・モシリで神々を招待して饗宴を開くのです。さらに、クマの神は、人間の木幣、酒を欲して人間の世界を訪れるという考え方が示されています。

また、知里幸恵が著した『アイヌ神謡集』（知里、1974）の中の「梟の神の自ら歌った謡」においても、同様の考え方が描かれています。たとえば、梟の神が仕留められる様子は、「小さい矢は美しく飛んで／私の方へ来ました。それで私は手を／さしのべてその小さい矢を取りました。／クルクルまわりながら私は／風をきって舞い降りました。」と謡われる。ここでも、動物を仕留めることが出来るのは、対象となる動物の意志によるものであるという考え方が表されています。そして、仕留められた梟の神（コタン・コロ・カムイ）は人間の手厚いもてなしを受け、木幣、酒を土産にカムイ・モシリに帰り、そこで神々を招待して酒宴を開くと謡われます。

このように、カムイは自分の世界、カムイ・モシリにおいて人間の姿をして暮らしており、人間の世界を訪問するときにはそれぞれ固有の服装をして訪れるのであるとアイヌは考えてきました。動物や植物などはカムイが人間の世界を訪れた結果による仮の姿であると考え、この「仮の姿」はカムイの人間への「贈り物」であると考えられるのです。

カムイの「仮の姿」を人間への贈物とみなすことが示すように、人間とカムイとは交流しあうものなのです。しかも人間とカムイとの交流は互酬的交換といえます（煎本、1988）。カムイが自らの「仮の姿」を人間への贈り物とするのに対し、人間はカムイを食物や酒によってもてなし、酒、イナウ（木幣）などを土産として持たせます。イナウと酒は、カムイ・モシリで手にいれることのできない品であるが故に、カムイのもっとも望む品なのです。神々はイナウを求め、人間によって酒と食べ物をもてなされることを欲し、人間の世界を訪れると考えられていたのです。

アイヌは、クマの神が人間の世界を訪問しないことは行く先の飢饉を意味すると信じていました。このため、人間は神々がしげしげと人間の世界を訪れてくれること、狩猟の成功を望みヌプリ・コロ・カムイをもてなすのです。しかし、ヌプリ・コロ・カムイはクマの神の頭領であるといわれますが、この神がクマを人間の世界に送るとは一般に考えられていません。むしろ、人間の国を次ぎに訪問するクマの神は、クマ送りされた神ではなく、その親族であるといえます（煎本、1988）。各々のクマの神が人間の世界を訪れた他のクマの神の土産話を聞き、自ら進んで人間の世界を訪れるのです。

このように、人間の世界と神の世界は、人間と個々のカムイとのこのような互惠的な交換の関係、互酬性で結ばれると考えるのです。両者の関係はさらに、お互い手にいれることの出来ないものを交換し合うという意味で相補的な性格をもつのです。送り儀礼はこのような人間と動物のカムイとの相補互酬的关系を象徴しています。

6. 「領有神」の概念は主霊といえるか？

シベリア諸民族の多くは、動物にはそれぞれの守護霊、いわゆる「主霊」があると考えます。「主」という概念はシベリアの宗教的思考に特有のものであり、これによって自然界全体が超自然的所有者に服属する有様が示されるといわれてきました（ロット・ファルク、1980）。

たとえば、アムール川流域や樺太に住む狩猟民ニヴヒの間では、森・山の「主」と水の「主」がそれぞれ陸と海の動物を支配すると考えられています。そして、水の主霊は魚や海獣を、人間がそれを食糧や衣服にできるように人間に送るのであり、人間はこれに対し、大地に実る果実をお返しの贈り物として送るのであるといわれます。森や海の動物は単なる獲物ではなく、この二つの世界の主霊からニヴヒの手厚いもてなしに対して、彼らのもとに送られたものと考えられるのです（Shternberg, 1933 ; Black, 1973）。

また、ニヴフの伝説によると、クマは山の人であり、山で人間であるニヴフと同じように氏族生活をしているのであり、クマの毛皮はその着衣に他ならないとされています。そして、クマである人間はニヴフの氏族と緊密な血縁関係があるとされ、狩で殺されたクマは山からニヴフのもとに好んで客として降ってきた血縁の人であるといった考え方も示されています（クレイノヴィチ、1993）。

このように、ニヴフは、動物は殺されることを了解して、進んで交換の過程に参加するのであり、人間はこれに対し返礼をしなければならないと考えます。動物の精霊に対する敬意と食物が必要であるし、殺した動物の骨は彼らの世界に送り返さなければならないと考えるのです（Shternberg, 1933）。

ただし、アイヌの場合と異なり、儀礼の対象となるのは動物自身ではなく、その〈主霊〉なのである（Czaplicka, 1914）といわれます。ニヴヒが崇拝する動物は独立した一般的な意味での神々ではなく、単に真の神々である主霊の従者にすぎない（Shternberg, 1933）のです。つまり、これまでの文献資料によると、ニヴヒにおいては個々の動物それ自身が精霊（神）とはみなされず、動物の主となる精霊、主霊の観念が認められるのです。そして、彼らは動物が主霊の命によって人間のもとに送られると考えているといえます。

一方、北シベリアのレナ河流域に住むチュルク語系の牧畜民であるヤクートの間には、次のような観念があります。超自然的存在、つまり、精霊（神）の信仰においては、ある土地や領域、あるいは「もの」の支配者であるイッチ「主・主人」の観念が発達しています。たとえば、火の主、家の主、天幕の主、天幕の四本柱の主、家畜小屋の主があります。また、道、峠、森、水、大地、石、草、茂み、牧地、入れ物、武器、鍛冶道具などすべて、その主を持つと考えます。

そして、森の主バヤナイは、獲物を授けてくれる森の動物の持ち主であると同時にその守護霊であると考えます。水の主は水中で家畜をつれて暮らし、豊漁を授けてくれるのです。ヤクートはクマに出会ったとき、「森の主よ、森のことを思い出しておくれ……」と呼びかけるように、クマは森の主の顕れともなります（ウノ・ハルヴァ、1989）。

ただし、クマが森の主バヤナイの顕現する唯一の動物ということではなく、バヤナイは

一般に森に住み、老人の姿をとるといわれます。バヤナイは狩猟の精霊でもあり、森のすべての動物と関係があり、狩人に狩の獲物を授けてくれると考えられています。バヤナイが狩人に獲物を送ってくれるのです。このため、狩人はバヤナイに狩猟の成功を祈って供物を捧げるといいます (Yamada, 1995)。また、クマ祭は彼らの狩猟儀礼であり、この時には森の主バヤナイの像を作って拝む (ウノ・ハルヴァ、1989) とも報告されています。

ヤクートにおいても、動物の所有者としての森の主の観念があることが分かります。そして、狩猟儀礼においては、動物の精霊が崇拝の対象となるのではなく、森の主バヤナイが崇拝の対象となっているのです。

シベリアの民族の中には、山の人であるクマと人間とは交換贈与の関係にあると考えるニヴヒのように、アイヌによく似た考え方をもつ民族もあります。しかし、シベリアの民族においては個々の動物を超越した、所有者としての「主」の観念があり、このような「主霊」への崇拝が狩猟儀礼の核となることが特徴となっています。

これに対し、ヌプリ・コロ・カムイ (クマの神) はすでに述べたように、いわゆる「主霊」、クマの所有者という観念とは異なります。また、狩猟の神と一般に言われるハシナウ・ウク・カムイ (狩猟の女神) は、仲介者としての役割を持ち、狩猟の女神もまた、シベリアの「主霊」とは性格を異にするものです (山田、1994)。

神話には魚主の神と鹿主の神という魚と鹿の所有者としての神が登場しますが、この二神は、宗教儀礼において礼拝の対象とはならないのです。鮭や鹿のたくさん獲れることをこの二神に直接祈ることはなく、その代わり、アイヌは狩猟や漁撈の成功をハシナウ・ウク・カムイ (狩猟の女神) に祈るのです。神話が示唆するように、儀礼の場において狩猟の神に祈ることは、人間と鹿主の神と魚主の神の二神との仲介の労をとるように祈ることなのです。

このように、アイヌの儀礼、狩猟儀礼において崇拝の対象となる重要な神々の中には「主霊」の性格を持つものがないのです。もちろん、ヌプリ・コロ・カムイの名称には「領有者」、「所有者」としての意味が含まれています。しかし、アイヌは動物それ自身をカムイとみなす考えを基本とし、ヌプリ・コロ・カムイはクマの神格化そのもののなのです。儀礼において崇拝の対象となるのは動物自身のカムイなのです。他の「領有神」についても同様であるといえます。

それぞれの「領有神」は、自らの意志で人間世界を訪れるのです。個々の神は個別に人間との関係をもつと考えられているのです。このような「領有神」の観念はアイヌに特徴的な考えであるといえます。

7. おわりに

以上のように、アイヌの世界観の特徴の一つとして、神格化の原則の中で、特定の動物と、神格の役割および空間との象徴的等式が認められる点をあげることができます。しかも、特定の空間カテゴリーの支配性や所在性に関係する神々は特に重要な儀礼において崇拝される神なのです。

領有神の名称は空間区分の存在と同時に一定の空間の所有の観念を表わし、このような

カムイの存在は、カムイの概念において領有性が重要であることを示しています。そして、動物がこれを視覚的に表現するものとして選ばれているのです。動物分類と空間分類との連繋が領有性のメタファーの背景となり、動物の生態学的地位に基づく優位性が支配性のメタファーの背景となっているのです。動物はアイヌの世界観を象徴するものなのです。

最後に、シベリアの狩猟文化との対比の上で次の点をあげることができる。主霊（獲物の所有者として）の観念が儀礼の場においてあまり重要な意味を持たないことである。狩猟儀礼において崇拜の対象となるのは個々の動物のカムイである点が大きな特徴であり、この点で、シベリアの諸民族の狩猟儀礼と異なっています。このような相違は、アイヌの世界観が人間とカムイとの本質的平等を根本とすることと無関係ではないといえます。

引用文献

- Black, Lydia, 1973. The Nivhi (Gilyak) of Sakhalin and the Lower Amur. *Arctic Anthropology*, 10(1): 1-110.
- 知里真志保 1985[1956]. 『地名アイヌ語小辞典』 北海道出版企画センター。
- 知里幸恵 1974. 『アイヌ神謡集』 岩波書店。
- Czaplicka, M.A., 1914. *Aboriginal Siberia*, Oxford University Press.
- 煎本 孝 1988. 「アイヌは如何にして熊を狩猟したか」 『民族学研究』 52(2):125-154.
- クレイノヴィチ, E.A., 1993. 『サハリン・アムール民族誌』 柘本哲訳、法政大学出版局。
- 久保寺逸彦 1977. 『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』 岩波書店。
- ロット・ファルク, E., 1980. 『シベリアの狩猟儀礼』 田中克彦訳、弘文堂。
- ウノ・ハルヴァ, 1989. 『シャマニズム—アルタイ系諸民族の世界像』 田中克彦訳三省堂。
- Sheternberg, Lev. IA., 1933. *The Gilyak, Orochi, Goldi, Nigidal, Ainu: Articles and Materials*, Habarovsk: Dalgiz (HRAF-RX 2:1).
- 山田孝子 1987. 「アイヌの動物分類と世界観」 『北方文化研究』 18号、219-258.
- 1994. 『アイヌの世界観—「ことば」から読む自然と宇宙』 講談社選書メチエ。
- Yamada, Takako, 1994. Animals as the Intersection of Religion with Ecology: An Ainu Example. In: Irimoto, T. & T. Yamada (eds.), *Circumpolar Religion and Ecology: An Anthropology of the North*, University of Tokyo Press, pp. 69-102.
- 1995. The Concept of Spiritual Beings Among the Contemporary Yakut Shaman. In: Yamada, T. & T. Irimoto (eds.), *Circumpolar Animism and Shamanism*, Hokkaido University Press, pp. 207-228, 1997.

結びにかえて

山田 孝子

以上、八重山地方の生態と世界観の動態を、主に波照間島を対象に自然認識および神行事の実践という点からみてきた。波照間島では、サトウキビ栽培の生産拡大に向けて、圃場整備から貯水池の建設、畑への給水管の配管など、さまざまな環境整備の努力が払われてきた。このような農業経営の現代化は天候による作物生育への影響を極力減少させる努力のたまものともいえる。その意味では、本土で農耕儀礼が過去のものとなってしまったのと同じように、波照間島における農耕儀礼の衰退を予想することすら可能である。

しかし、島では、これまでに述べてきたように、ほとんどが農耕儀礼といつてよい神行事が、神役のなり手がいないといった問題を抱えながらも実践され続けている。若い世代の島民と話をする機会はあまりなかったが、年輩の人々には、とくに、御嶽をめぐるウヤン（神）への信仰は波照間の生活の根本であり、これがなくては生活が成り立たないと語る人も多く、聖域である御嶽に関するタブーは現在でも生きている。

作物がサトウキビに変わり、年間の農耕暦も変化する中で、豊作の感謝と豊作予祝の儀礼は島をあげての神聖な行事として実施されているのである。複雑なプロセスをとる儀礼を実践できることは島民の誇りともいえ、八重山の島々がますます均質化していくなかで、神行事の実践こそが島民性を証明する証といえよう。プーリンをめぐる一連の行事への島民の参加協力の実態は、神行事の実践が信仰上の問題であると同時に、島民としてアイデンティティそのものであることを示している。

ところで、アイヌの人々は文化復興運動の中で、「初めてのサケを迎える儀式」、「イチャルパ」（祖先供養祭）などの儀礼を復興させていったが、儀礼の復興は忘れ去られようとしていた言語、歌、踊り、伝統工芸などを彼らの間に活性化させ、アイヌとしてのアイデンティティの基盤ともなったのであった（Yamada, 2000）。また、東シベリアのサハの人々の間でも同様に、ソ連の崩壊後、ソビエト時代に反宗教政策によって禁じられていた伝統的宗教であるシャマニズムの復興、伝統的儀礼の復興が進められ、伝統芸能もまた復興し、サハの人々のアイデンティティの再構築が行われていったのであった（山田、2002; Yamada, 2004）。いずれもの例も、現代社会にあつて、宗教がアイデンティティの核として重要な意味をもつことを示すものである。今回の波照間島の事例においても、同様のことが確認できたといえよう。

一方、島の環境整備の中で自然植生が変化し、伝統的な植物の知識も少しずつ忘れ去ら

れ、また、植物名が標準和名化していく中で、儀礼に使われる植物についての伝統的知識はしっかりと受け継がれている。もちろん、神行事の実践は伝統料理、島ことば、植物の知識にとどまらず、イショーブサというプーリンでの役割分担が示すように、漁撈活動をつうじて、海の知識と漁法という生活技術をも伝承させていく役目を担っている。このように、現代において儀礼は伝統文化を継承させる一つの装置としての意味をもつことが分かる。

最後に、まだ、分析の途中ではあるが、波照間島における神の観念について触れておきたい。波照間島の各御嶽には、ツカサによって伝承されてきた、ヤマヌパンという御嶽への祈詞があるが、これは神行事において欠くことのできない祈りのことばとされる。ヤマヌパンにはその御嶽において拝む対象となる数々のウヤン（神）の名前が登場し、これは島の人々のウヤンの観念を表出するものということができる。たとえば、ブスクワーのヤマヌパンには、先代のツカサの説明によると、「マサルブツ、ケーシブツ、ザイレピサユレ、オールウヤン」（マサルブツという名の場所、ケーシブツという名の場所にいらっしゃる神）を始め、神々はたいてい「どこそこにいらっしゃる神様」という名で登場する。波照間島の神の観念においては、特定の土地が神の所在として重要な意味をもつことが分かる。ウヤンは特定の土地との結びつきを介して想起されるという特徴をもつが、姿形は具現化されるものとはなっていない。神行事においてツカサがミジィマチ（水の供え）を行うことによってその場に臨在することが知られるのみである。

これに対し、アイヌの神の観念をみると、たとえば、「山岳を領有する神」といった例のように、主要な神々については、広汎な空間領域を対象に神の観念が想定され、しかも、この神がクマを顕れとするというように、神の観念は動物や植物などに顕現して具現化されるものともなっている（山田、2004）。波照間島においても、アイヌにおいても、土地あるいは空間が神の観念の結節点となりうる点では同じといえるが、抽象化に違いがあることが分かる。波照間では、ミジィマチが象徴するように水を介して神が立ち顕れるのに対し、アイヌでは狩猟採集の対象である動植物を介して神は立ち顕れるのである。多様な神を想定するというアニミズム的観念の中に、生態的基盤が大きく関わるさまをここにみることができる。波照間島の神信仰は、神の観念のあり方を含めて農耕という生態を基盤とすることが分かる。

引用文献

- Yamada, Takako, 2000. The Revival of Rituals among the Sakha-Yakut and the Hokkaido Ainu. *Acta Borealia* 17(1): 77-115.
- 山田 孝子 2002 「サハにおける文化復興とシャマニズム・儀礼の復興」 煎本孝編『東
北アジア諸民族の文化動態』北海道大学図書刊行会、319-356 頁。

山田 孝子 2004 「アイヌの世界観と動物の世界—世界観を象徴する動物」 安田喜憲
編『魔女の文明史』八坂書房、433-448 頁。

Yamada, Takako, 2004. Symbiosis with Nature: A Message for the Reconstructing of Sakha
Ethnicity and Identity. In: Irimoto, Takashi & Takako Yamada (eds.), *Circumpolar Ethnicity
and Identity*, Senri Ethnological Studies no. 66, pp. 217-230.



写真 1 キナヤマにおける拝み [撮影：山田]

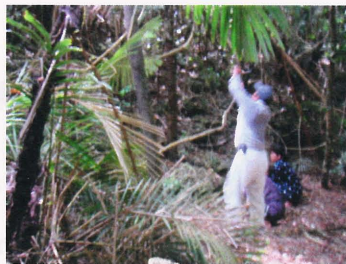


写真 2 ミヨウクツェにおけるアパティワの清掃（枝払いなど） [撮影：高橋]



写真 3 マーニ（コミノクロツグ）の敷物 [撮影：山田]



写真 4 ミヨウクツェ、アパティワでの拝みを終えたツカサ達 [撮影：高橋]



写真 5 カンバナにおける供え物 [撮影：高橋]



写真 6 御嶽の井戸のつるべとなるホラガイと水入れのヒョウタン [撮影：小西]



写真 7 ベムチ浜で香炉用の砂を採る [撮影：山田]



写真 8 クパン用のカニ [撮影：小西]



写真 9 クパンがのせられた膳 [撮影：小西]



写真 10 プーリンの供物（トゥニムトゥ家にて） [撮影：山田]



写真 11 プーリンにおける司とバナヌファへのもてなし（トゥニムトゥ家で） [撮影：高橋]



写真 12 シュヌザラ（角皿） [撮影：高橋]



写真 13 トウニムトゥ家のピナカンにプーリンの始まりを報告するツカサ [撮影：高橋]



写真 14 プーリンの拌み、トウニムトゥ家の一番座で [撮影：小西]



写真 15 ナガザラを手にして、ナガザラの神歌を唄うトウニムトゥ家のブナリ [撮影：小西]



写真 16 盃を手にして、願いの神歌を唄うツカサ [撮影：小西]



写真 17 ブスクワーでのプーリンの拌み [撮影：山田]



写真 18 アサヨイ、役目の終わりにあたり、立って拌むカマガー [撮影：高橋]



写真 19 ムシャマー広場で開かれた巻き踊り [撮影：高橋]



写真 20 アミジュワー、ケーシムリワールでの拌み [撮影：山田]



写真 21 クムリのときの供物 [撮影：小西]



写真 22 アサヨイユーニゲールの供物 [撮影：山田]



写真 23 アサヨイユーニゲールの拌殿での拌み [撮影：小西]

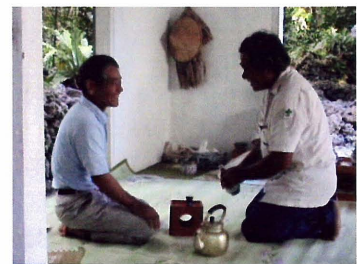


写真 24 アサヨイユーニゲールの拌殿でのブヤイマシンのもてなし [撮影：小西]